宮城県文化財調査報告書第61集

五 輪 C 遺 跡

昭和 54 年 8 月

宮 城 県 教 育 委 員 会
東北地方建設局仙台工事事務所

序

宮城県内には、私達の祖先がのこした数多い遺跡があります。これらの文化遺産は、豊かな自然環境と長い歴史の中で創造し、育ぐくんできたものであり、これを愛護し活用するとともに後世に伝えていくことが現代の私達の重要な責任であると考えます。近年、地域の開発事業が進展するに伴ない、埋蔵文化財の保護が県政のなかで重要視されてきているのもその線に沿ったものであります。

今日、建設省東北地方建設局によって、国道４号の栗原郡高清水町市街地内での交通渋滞解消を目的として、高清水バイパスの建設が急速に進められておりますが、このバイパスも極力遺跡を避けて計画された結果、最終的には４遺跡にしぼられるにいたりました。

本報告書は、そのうちのひとつ、五輪Ｃ遺跡について、昭和53年度に宮城県教育委員会が実施した事前の発掘調査の成果をとりまとめ、同バイパス関連調査報告書第１号として刊行する運びとなったものであります。

ここに本書を刊行するにあたり、関係された方々の御協力を感謝いたしますとともに、遺跡に対する御理解をいただき、さらに学術上も大きく役立つことを切に願ってやまない次第であります。

昭和 54 年８月

宮城県教育委員会　教育長　　北　村　　潮

例　　言

１．本書は、宮城県栗原郡高清水町五輪を通過する高清水バイパスの計画に伴う事前発掘調査報告書である。

２．遺跡名：五輪Ｃ遺跡（遺跡記号－ＦＤ、宮城県遺跡記号－44034）

３．遺跡所在地：宮城県栗原郡高清水町五輪

４．調査主体者：宮城県教育委員会、東北地方建設局

５．調査担当者：宮城県教育庁文化財保護課

６．地元協力者（順不同、敬称略）

武川悦二、千葉竜男、加藤倉次、武川捨男、操文吾、佐藤定夫、操臣六、菊地房雄、佐藤栄、今井長人、今野賢治、武田正、梅崎喜吾、佐々木安夫、佐々木輝雄、岩渕藤太、熊谷正助、半沢マス子、山崎シモ子、鈴木はじめ、佐々木たみよ、佐藤容子、操はな、堀越はま子、山崎とも子、千葉とりみ、森屋キヨノ、佐藤まき子、門田信子、長浦まつよ桃枝京子

７．調査期間：昭和53年9月26日～11月15日

８．調査面積：約3,500㎡

９．発掘調査にあたっては、高清水町教育委員会の協力をいただいた。

10. 本書の作成にあたっては、石質鑑定は東北大学助教授蟹沢聡史氏、鉄器の処理にあたっては東北歴史資料館研究科長村山斌夫氏の御指導を得た。

11. 本書において土色については「新版標準土色帳」（小山、佐原：1967）を、土性については、国際土壌学会法の粒径区分を参照した。

12. 本書第１図は建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の２万５千分の１地形図を複製したものである。（承認番号 昭54東複　第398号）

13. 五輪Ｃ遺跡周辺の遺跡（第１図）は、宮城県遺跡地図をもとに作成し、遺跡番号は便宜上組みなおし、必要な遺跡のみ付した。

14. 本遺跡の調査に関する諸記録および出土遺物は宮城県教育委員会において保管している。

15. 本書の執筆、編集は文化財保護課職員の協議を経て、小野寺祥一郎が担当した。

目　　次

序

Ⅰ．調査にいたる経過 …… 1

Ⅱ．遺跡の位置と自然環境

1．位置と自然環境 …… 2
2．町内の遺跡 …… 2

Ⅲ．調査方法と経過

1．調査の方法 …… 6
2．調査の経過 …… 6

Ⅳ．発見された遺構と遺物

1．遺構の基本層位 …… 9
2．竪穴住居跡とその出土遺物 …… 10
3．竪穴遺構とその出土遺物 …… 48
4．焼土遺構とその出土遺物 …… 50
5．土壙とその出土遺物 …… 54
6．井戸跡とその出土遺物 …… 56
7．溝とその出土遺物 …… 59
8．ピットとその出土遺物 …… 61
9．遺物包含層とその出土遺物 …… 62
10．遺構以外の出土遺物
イ．表土からの出土遺物 …… 66
ロ．出土地点・層位不明な出土遺物 …… 69
ハ．縄文土器 …… 70
ニ．弥生土器 …… 70
ホ．石器および石製品 …… 70

Ⅴ．遺構・遺物に関する考察と問題点

1．出土遺物
イ．出土土器の分類 …… 74
ロ．出土土器の組み合わせとその年代 …… 80
ハ．出土土器に関する問題点 …… 87
2．遺　構
イ．竪穴住居跡とその年代 …… 90
ロ．その他の遺構とその年代 …… 93

Ⅵ．まとめ …… 94

Ⅰ．調査に至る経過

五輪Ｃ遺跡は、宮城県栗原郡高清水町五輪地内にあり、高清水バイパスの建設と係り合いを持った。

高清水バイパスは、高清水町字中の茎及び字松ノ木沢田から同町字小山田西欠屋敷に至る４.１㎞の路線で、建設省東北地方建設局仙台工事事務所が、国道４号線の交通渋滞解消を目的に建設を計画したものである。計画路線は昭和46年１月に決定し、昭和52年度に用地買収が完了した。

宮城県教育委員会で路線に係る遺跡の分布調査を実施し、その取り扱いに再三の協議と調整を行ったが、４遺跡はどうしても建設工事と係り合うことが判明した。４遺跡とは南から北へ順に松ノ木沢田Ａ・Ｂ遺跡、向野Ａ遺跡及び五輪Ｃ遺跡である。

これらの遺跡は、いずれも道路の線形等の関係から回避する方途が困難なもので、事業施工前の発掘調査が必要である。とりわけ五輪Ｃ遺跡は、工事の関係で昭和53年度の調査が強く要望された。

こうして五輪Ｃ遺跡の調査は、東北地方建設局仙台工事事務所の委託にもとづき、宮城県教育庁文化財保護課が担当し、昭和53年９月26日から11月15日までの間に実施した。

Ⅱ．遺跡の位置と自然環境

１．位置と自然環境

五輪Ｃ遺跡は、宮城県栗原郡高清水町五輪に所在している。遺跡は、高清水町のほぼ中央に位置しており、高清水町役場から北西方向約1.3㎞の地点にある。

宮城県北西部一帯には、陸前丘陵の中の１つである築館丘陵が西から東へ向って高さを減じながら延びている。高清水町は、この築館丘陵が次第に枝分かれし低平となった末端部に位置している。

本町の中央部には、築館丘陵から枝分かれした標高50mほどの小丘陵が延びており、この小丘陵の北側には善光寺川をはさんで標高70mほどの丘陵地帯が連なり、南側には小山田川をはさんで標高40mほどの丘陵地帯がある。さらにそれぞれの丘陵地帯は、小山田川、善光寺川等に流れ込む小さな谷川によって細かく開析されている。小山田川とその支流で北部を流れる善光寺川及び南部を流れる透川流域には沖積地が発達しており、水田などに利用されている。

遺跡は、本町の中央部にある標高50mほどの小丘陵の南東部南斜面の項部から中央部にかけて立地している。遺跡の現状は山林や畑地となっている。北側と西側は山林によって囲まれ、東側には小さな沢が入り込み湿地帯を形成している。南側には、小山田川によって形成された沖積地が広がっており、周囲には湧水や溜池などがある。遺跡中央部での標高は約41m、南側の水田との比高差は約23mである。

２．町内の遺跡

町内には、縄文時代以降中・近世に至るまで多くの遺跡が確認されている。(第１図）その中には発掘調査が行なわれ遺跡の内容が明らかになっているものも多い。以下、町内の遺跡を概略して見る。

旧石器時代の遺跡は、今のところ確認されていない。縄文時代の遺跡で最も古い遺跡は、昭和30年に東北大学によって調査された縄文時代早期の大寺遺跡がある。大寺遺跡からは、石器石ヒ、磨製石斧などとともに沈線文、貝殻腹縁文のある尖底土器が大量に発掘された。大寺式の設定は、この遺跡出土の土器を標式として行なわれた。縄文時代の遺跡としては、その他に前期の遺物を出土する宿ノ沢遺跡、晩期の土器を出土する萩田遺跡などがある。萩田遺跡からは、大型棒状太口蛤刃磨製石斧とともに弥生時代中期初頭の大泉式土器が出土している。

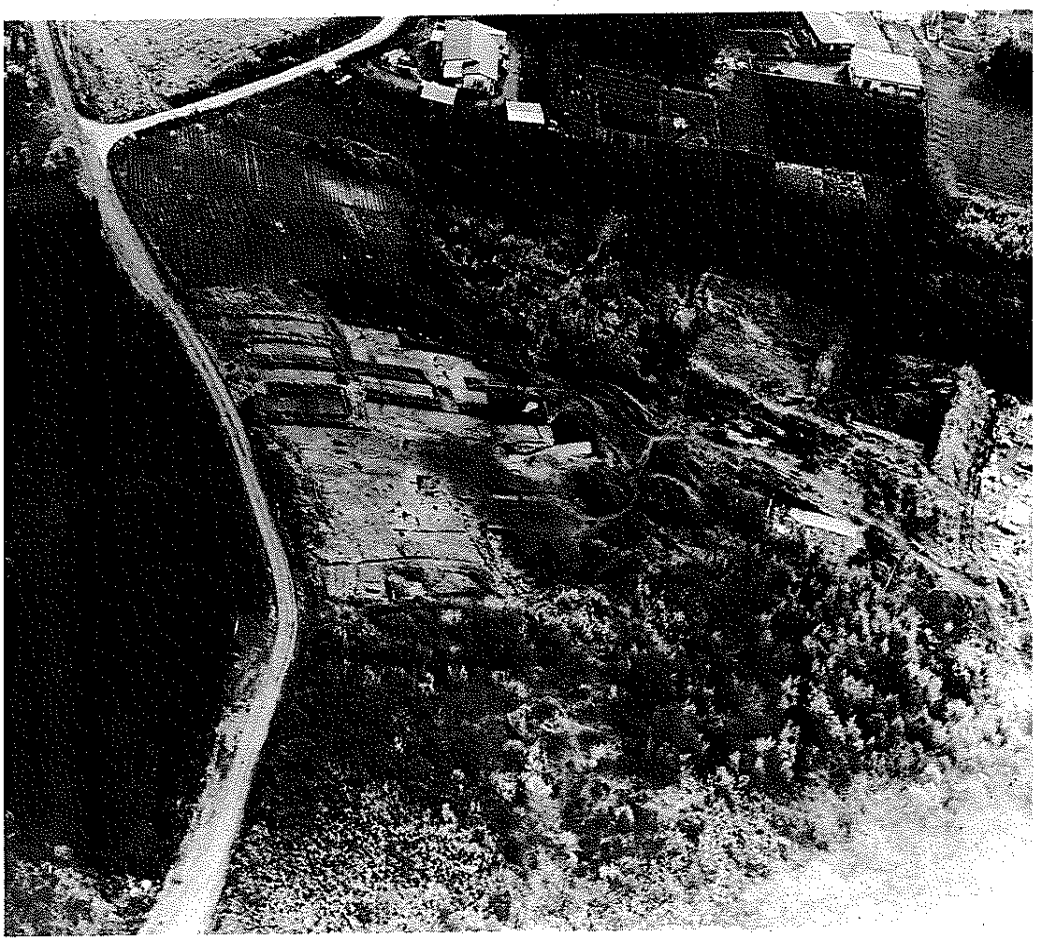
古墳時代になると遺跡の増加を見る。東館遺跡では、古墳時代前期の方形周溝墓１基、古墳時代中期の住居跡が１軒発掘されている。観音沢遺跡では、古墳時代後期の住居跡が15軒発掘

されている。

奈良・平安時代になると急激な遺跡の増加を見る。西手取遺跡からは平安時代の住居跡が５軒、手取遺跡からは平安時代の住居跡５軒と宮城県内初の合せ口甕棺墓が発掘された。また、下析木遺跡でも住居跡が発掘され集落跡と考えられている。

中世の遺跡には、高清水城跡、新庄館跡、陣館などの中世城館がある。観音沢遺跡では、掘立柱建物跡、井戸、土倉などの遺構や青磁、陶器、木製品など多数の遺物が発見され、中世の集落跡と考えられている。

近世の遺跡としては、覚満寺跡がある。以上の様に、高清水町には縄文時代から中・近世に至るまで各時期の遺跡が多数残されている。本町では、奈良・平安時代の遺跡が最も多く、弥生時代に成立した農耕社会が次第に定着し、奈良・平安時代には、安定した生活基盤が築かれたことを物語っている。本遺跡もこの様な状況の下に営まれていたと考えられる。



遺　跡　遠　景　（西上空から）

高清水町
高清水町
高清水町
高清水町
勝負町
佐野寺
萩田原
萩田原
四ッ壇原
四ッ壇原
舌川市
小野
須賀
河原目
本町
仲屋敷
1000
0
1000
2000
3000

第１図　周辺の遺跡

第１表遺跡地名表

番号	遺跡名	種別	時代	宮城県遺跡地名表番号	番号	遺跡名	種別	時代	宮城県遺跡地名表番号
1	五輪Ｃ遺跡	包含地	奈良・平安	44034	19	東館遺跡	集落跡	奈良	44017
2	五輪Ｂ遺跡	包含地	奈良・平安	44033	20	高清水城跡（御要害）	城館	中世	44024
3	五輪Ａ遺跡	包含地	縄文・古墳	44010	21	経ヶ崎遺跡	包含地	縄文・古墳 奈良・平安	44003
4	袖山遺跡	包含地	奈良・平安	44038	22	上経ヶ崎遺跡（滴海壇）	五輪塔	平安	44004
5	折木山寺跡	寺院跡	鎌倉	44006	23	透川遺跡	包含地	平安	44032
6	陣館館跡	城館	中世	44036	24	台町西遺跡	包含地	奈良	44013
7	宮ノ脇遺跡	包含地・塚	奈良・平安 中世・近世	44022	25	松ノ木沢田遺跡Ａ	包含地	縄文・平安	44027
8	運難館跡	城館	中世	44037	26	松ノ木沢田遺跡Ｂ	包含地	縄文	44028
9	下田遺跡	包含地	奈良・平安	44035	27	萩田遺跡	包含地	縄文・弥生	44007
10	宿ノ沢遺跡	包含地	縄文 奈良・平安	44025	28	向野Ａ遺跡	包含地	縄文・平安	44029
11	手取遺跡	集落跡	縄文・平安	44011	29	松ノ木沢田遺跡Ｃ	包含地	平安	44030
12	西手取遺跡	集落跡	縄文・平安	44011	30	向野Ｂ遺跡	包含地	奈良・平安	44031
13	明官遺跡	包含地	奈良	44009	31	観音沢遺跡	集落跡	縄文	44019
14	新庄館跡（新庄館）	城館	中世	44002	32	仰返り地蔵前遺跡	包含地	奈良・平安	44005
15	下折木遺跡	集落跡	平安	44014	33	外沢田遺跡	包含地	奈良・平安	44008
16	下佐野遺跡	包含地	奈良・平安	44015	34	覚満寺跡	寺院跡	中世・近世	44023
17	大寺遺跡	包含地	縄文・古墳 奈良・平安	44001	35	中ノ茎遺跡	集落跡	縄文・奈良 平安・中世	44018
18	萱の池遺跡（筒の池）	包含地	古墳・奈良	44016					

Ⅲ．調査の方法と経過

１．調査の方法

発掘調査は、国道４号線高清水バイパスにかかる丘陵の南斜面にある畑地、山林約 3,500 ㎡を対象として実施した。

調査地区の一部は山林となっており、その刈り払い終了後地区設定を行なった。地区設定に際しては、バイパスが丘陵を横断するので路線敷の中心杭を利用することにし、バイパス路線敷に埋設されている中心杭のうち、調査区のほぼ中央にある№157 を第１原点とし、第２原点は、№158 から１m西の地点に定めた。基準線は、第１原点と第２原点を結びその延長を南北軸と定め、第１原点を通過し南北軸に直交するように東西軸を定めた。

これらを基準にして調査地区全体に３m単位のグリットを設定した。グリット名は、東西方向をアルファベット（AL～BⅠ）、南北方向をアラビア数字（10～29）で表わした（第４図）。

遺構の確認および分布状況を把握する際には、3m（東西）×12～15m（南北）のトレンチを3mおきに配列した。

遺物の取り上げは、基本層位に従いグリット毎に行なった。遺構内の遺物の取り上げは、四分法に従い層位毎に取り上げた。特に、住居跡内の遺物の取り上げは、カマドを中心にしてカマド右側から時計回りにA、B、C、Dの４つに区分し、それぞれのコーナーで層位毎に取り上げた。

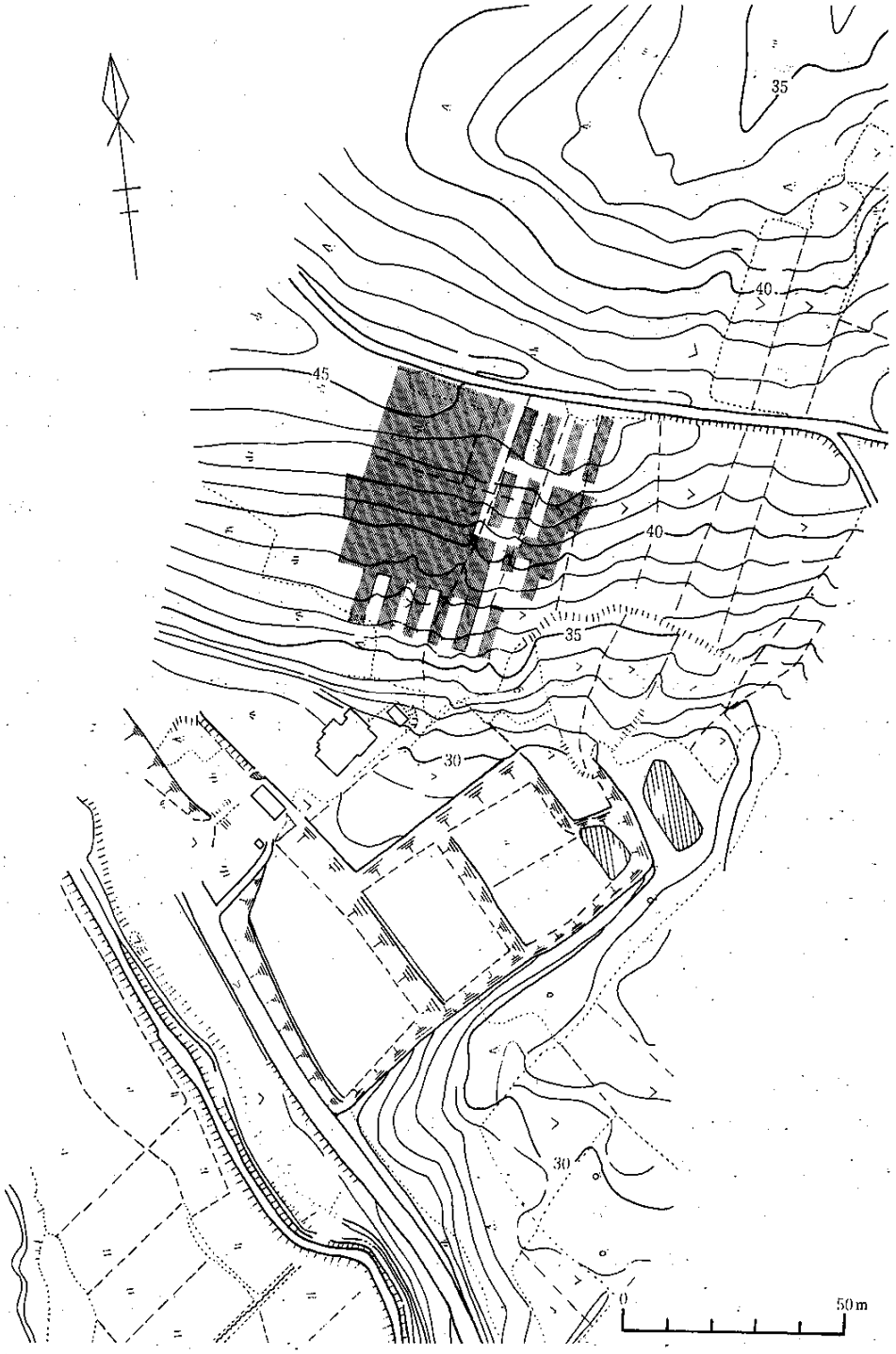
遺構の発見された地区には、実測図作成のためにトレンチの中央に位置する第１原点を中心として遣り方を設定した。発見された遺構については、20 分の１の平面図、断面図を作成した。基本層位の断面図は、原点を通過する南北の中心軸で作成した。なお、井戸については、40 分の１の平板測量を行なった。

２．調査の経過

調査は、昭和53 年９月26 日に開始した。調査区の一部は雑木林となっており、その刈り払いを10 月２日まで行なった。その後、調査区全体に３mおきに設定しておいた３m×12～15mのトレンチを順次開けて、遺構の確認を行なった。

10 月４日までに、調査区北側と東側の一部の表土を剥離した。調査区北側はかなり削平を受けており、表土下はすぐに地山となっていた。地山面で住居跡１軒、焼土遺構１基を確認した。

10 月９日までに、調査区南側を除いてすべてのトレンチにおいて遺構確認面まで掘り下げた。調査区中央から西側にかけては、表土下に２層の遺物包含層が確認され、多量の土師器・須恵



第２図　五輪Ｃ遺跡，グリット配置図

器が発見された。また、基本層位第１層上面で、２ヶ所において重複した何軒かの住居跡、竪穴遺構、焼土遺構、土壙、井戸、溝などが確認された。調査区東側においても遺物包含層が確認されたが１層のみであった。地山面において住居跡２軒が確認された。

10月11日は、調査区南側の表土を剥離した。北側同様、表土下はすぐに地山となっており、焼土遺構が１基確認されたにとどまった。

10月13日からは、南側を除いてトレンチの拡張を行ない、最終的には約2,100㎡を発掘した。

その結果、住居跡11軒、竪穴遺構２基、焼土遺構９基、井戸跡１基、土壙４基、溝、ピット等の遺構や、土師器、須恵器、縄文土器、弥生土器、石器、鉄製品、土製品などの多数の遺物が発見された。

11月上旬にはほぼ遺構の検出を終え、遣り方を設定、実測に入った。調査の途中ではあったが遺構の性格が明らかになった11月11日に現地説明会を開催した。発掘の一切を終了したのは11月15日である。

第２表　原点の座標

点　名	X	Y
原　点　1	－　148,489.613	＋　15,194.389
原　点　2	－　148,513.847	＋　15,181.384
原　点　3	－　148,531.006	＋　15,172.176

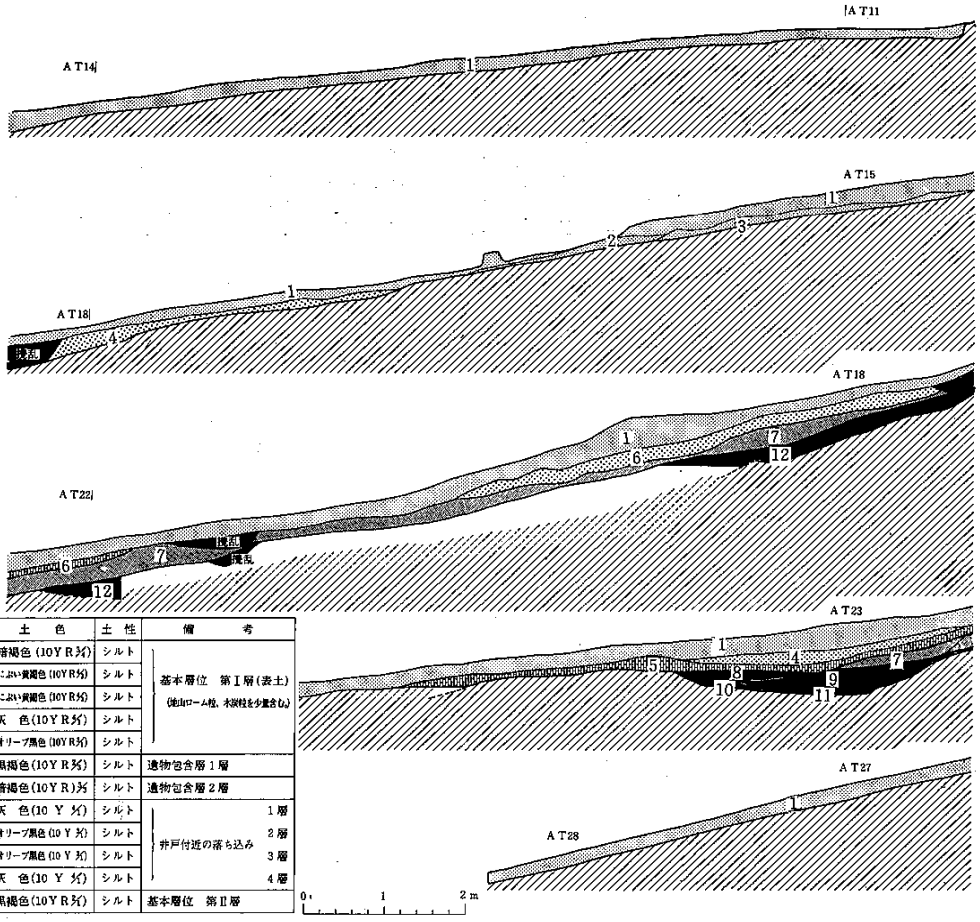
Ⅳ．発見された遺構と遺物

１．遺構の基本層位

遺跡は、丘陵の南斜面に立地している。調査区は、丘陵南斜面の頂部から中腹にかけての範囲である。今回の調査区の微地形を見ると、調査区北側はかなり急な斜面となっている。中央で一旦緩斜面となり、南側にくると北側同様の急斜面となっている。また、調査区の中央から西側の部分が東側と比較するとわずかにくぼんでいる。次に各層の状況と分布、遺構との関係について述べることにする。

〔第Ⅰ層〕

表土である。暗褐色シルト層（10YR4/3）で、調査区北側、南側で厚さ20cm前後であり、中央



層位	土色	土性	備考
1	暗褐色（10YR3/4）	シルト	基本層位　第Ⅰ層（表土）（地山ローム粒、木炭粒を少量含む）
2	にぶい黄褐色（10YR5/3）	シルト	
3	にぶい黄褐色（10YR5/3）	シルト	
4	灰　色（10YR5/1）	シルト	
5	オリーブ黒色（10YR3/2）	シルト	
6	黒褐色（10YR3/2）	シルト	遺物包含層１層
7	暗褐色（10YR）3/3	シルト	遺物包含層２層
8	灰　色（10Y 5/1）	シルト	井戸付近の落ち込み　１層
9	オリーブ黒色（10Y 3/1）	シルト	２層
10	オリーブ黒色（10Y 3/1）	シルト	３層
11	灰　色（10Y 5/1）	シルト	４層
12	黒褐色（10YR3/1）	シルト	基本層位　第Ⅱ層

第３図基本層位

の最も厚いところで30㎝前後の厚さである。土師器、須恵器等の遺物が多量に出土している。

〔第Ⅱ層〕

黒褐色シルト層（10YR3/1）で、調査区の中央から西側にかけて分布している。最も厚いところで60㎝前後の厚さがある。第Ⅱ層上面において灰白色の火山灰の堆積が見られたが、最も厚い部分で５㎝程であり、分布範囲も狭く中央部分に限定されていた。第Ⅱ層上面において遺構が確認されている。第Ⅱ層は無遺物層である。

〔地山〕

黄褐色シルト層（10YR5/6）で、北側と東側ではこの層の上面において遺構が確認されている。

２．竪穴住居跡とその出土遺物

第１号住居跡（第５図）

〔遺構の確認〕　調査区東側の地山面で確認された。

〔重複・増改築〕　認められない。

〔平面形・規模〕　住居跡の南壁が削平を受けて失われているが、残存する壁の状況から平面形は、東西軸約3.6mの長さを持つ方形を基調とする住居跡である。全体の規模は不明である。

〔堆積土〕　５層に大別することができる。第１層は、にぶい黄褐色シルト層で住居跡のほぼ全域を覆う。第２層は、暗褐色シルト層で壁際を除いた住居跡のほぼ全域を覆う。第３層は、黒褐色シルト層で壁際を除いた住居跡のほぼ全域を覆っていて、住居跡の中央においては床面直上に堆積している。第４層は、暗褐色・褐色シルト層で壁際から住居跡中央にかけて堆積している。第５層は、明黄褐色シルト層で壁際に堆積している。

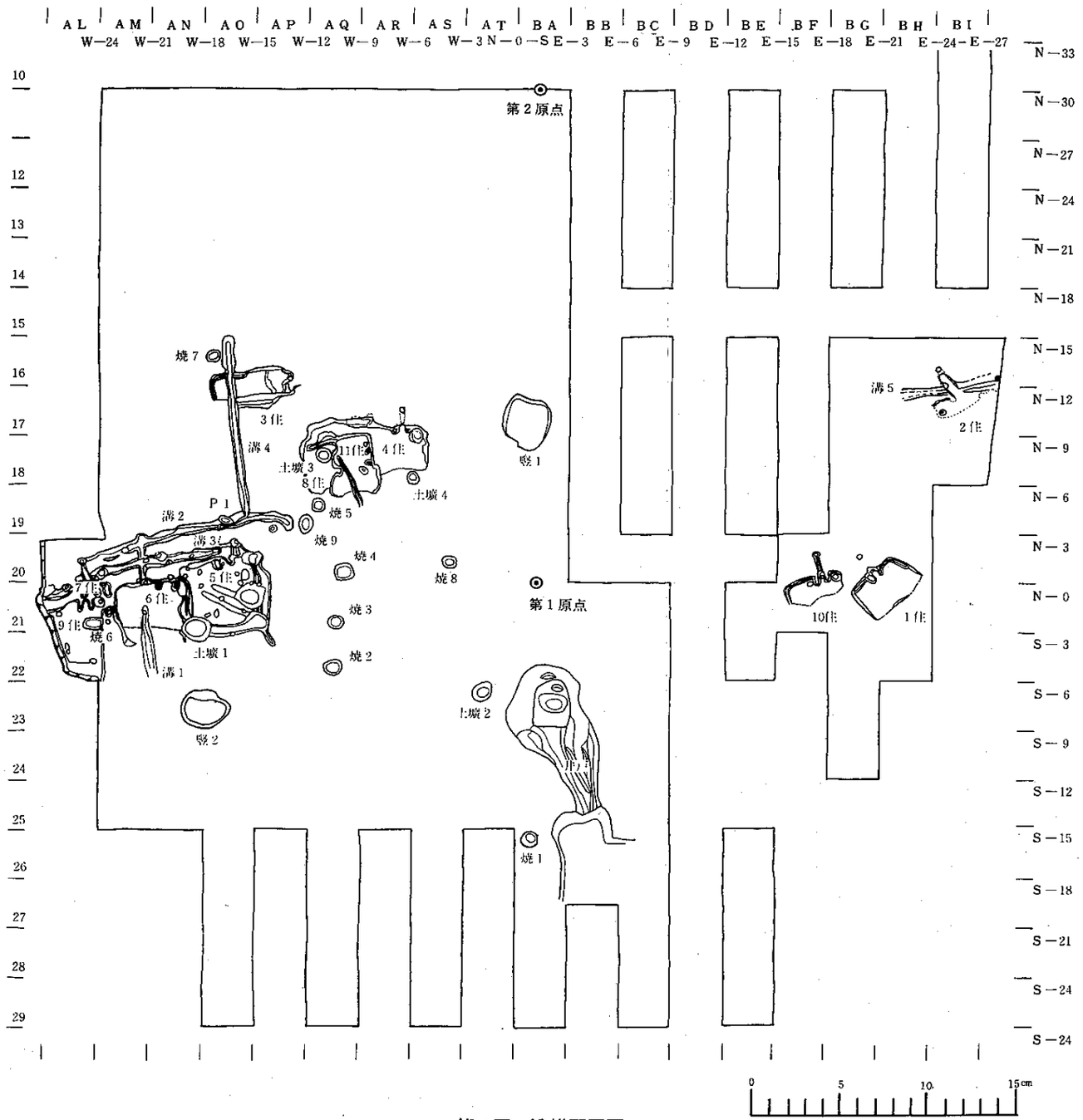
〔壁〕　地山をそのまま壁としている。削平のために南壁が失われている。最も保存の良好な北壁で約60㎝の高さを有する。東・西壁は、北側で約40～60㎝の高さを有するが、南側に行くに従ってその高さを減じている。壁の立ち上がりは急である。

〔床面〕　地山をそのまま床としている。床面は、中央でわずかにくぼんでいる。全体的に南側にわずかに傾斜しており、平坦で堅い。

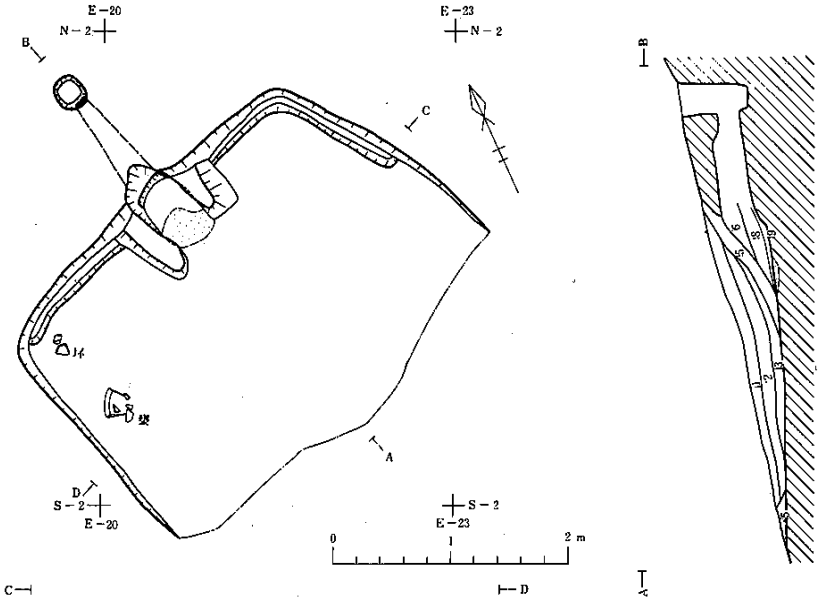
〔柱穴〕　ピットは検出されなかった。

〔周溝〕　北壁沿いと、東壁沿いの北側に認められた。北壁のものは、カマド部分で途切れている。周溝の幅は約10㎝、深さは約５㎝であり、断面は「U」字形である。

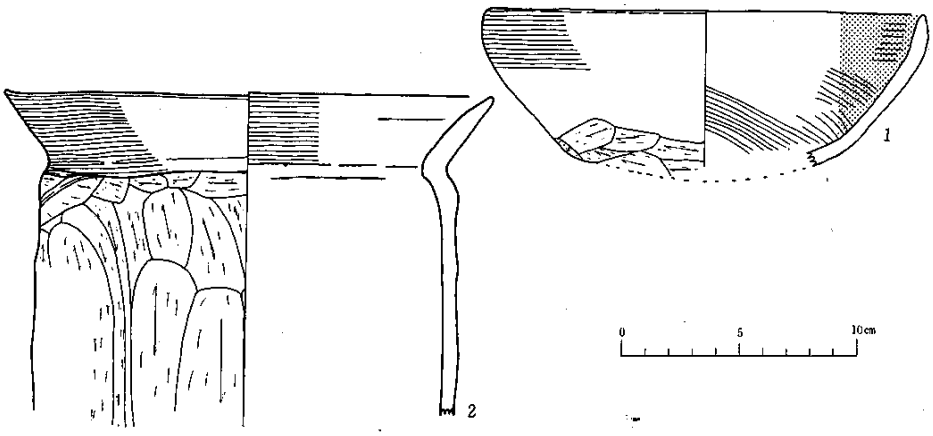
〔カマド〕　北壁のほぼ中央に位置しており、燃焼部と煙道部とからなる。燃焼部天井はすでに崩落していた。燃焼部側壁は、地山を削り出して構築されている。奥壁は、住居跡北壁をそのまま使用しており、奥壁の掘り込みはなかった。燃焼部底面は、奥壁側から前方に向って緩


AL AM AN AO AP AQ AR AS AT BA BB BC BD BE BF BG BH BI
W—24 W—21 W—18 W—15 W—12 W—9 W—6 W—3 N—0—S E—3 E—6 E—9 E—12 E—15 E—18 E—21 E—24 E—27
N—33 N—30 N—27 N—24 N—21 N—18 N—15 N—12 N—9 N—6 N—3 N—0 S—3 S—6 S—9 S—12 S—15 S—18 S—21 S—24 S—24
10 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29
第2原点
第1原点
焼7
3住
溝4
土壙3
11住
4住
8住
土壙4
焼5
P1
溝2
溝3
焼9
焼4
焼8
7住
5住
6住
9住
焼6
土壙1
溝1
焼3
焼2
竪2
竪1
土壙2
井戸
焼1
溝5
2住
10住
1住
0 5 10 15cm

第4図　遺構配置図



層位	層No.	土色	土性	備考	遺物取り上げ層位
第1層	1	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト		1層
第2層	2	暗褐色(10YR3/3)	シルト	1層のにぶい黄褐色土を少量含む。	2層
第3層	3	黒褐色(10YR3/2)	シルト		
第4層	4	暗褐色(10YR3/4)	シルト		3層
	5	褐色(10YR4/4)	シルト		
第5層	6	明黄褐色(10YR6/6)	シルト		
周溝堆積土	7	褐色(10YR4/4)	シルト		周溝内
カマド内堆積土	8	暗褐色(10YR3/3)	シルト	6層の明黄褐色土を含む。	カマド内
	9	黒褐色(10YR3/2)	シルト	焼土を多量に含む。	



第5図第1号住居跡

やかに傾斜している。燃焼部側壁内面と底面の一部は火熱を受けて赤変していた。底面から約10㎝の高さを持って煙道部へ移行する。煙道は、トンネル状になっており、長さは約80㎝、幅約25㎝である。煙道先端には、径約30㎝の円形の煙り出しピットがある。ピットの底面は、煙道底面より約８㎝低い。煙道部は、カマドの軸からわずかに東に傾いている。

〔出土遺物〕　本住居跡に伴うと考えられる遺物には、床面出土の土器およびカマド内出土の土器などがある。

土師器

坏（第５図１）　底部は欠損しているが、丸底と思われる。体部中央でわずかにへこみ口縁部は内弯している。器面調整は口縁部外面にヨコナデ、単位が不明な部分もあるが、体部にはヘラケズリが施されている。内面は、全面にヘラミガキ、黒色処理が施されている。

甕（第５図２）　最大径の位置が口縁部にあり、頸部には段が巡っている長胴形の甕である。体部下半から底部にかけて欠損している。口縁部は大きく外傾している。器面調整は、口縁部内外にヨコナデ、体部外面が縦方向のヘラケズリが施されている。体部内面の器面調整は磨滅のため不明である。

第２号住居跡（第６図）

〔遺構の確認〕　調査区北側の地山面において確認された。

〔重複・増改築〕　溝によってカマド燃焼部と煙道部の一部が切られている。

〔平面形・規模〕　溝や削平によって竪穴住居跡の大部分が失われており、平面形や全体の規模は不明である。

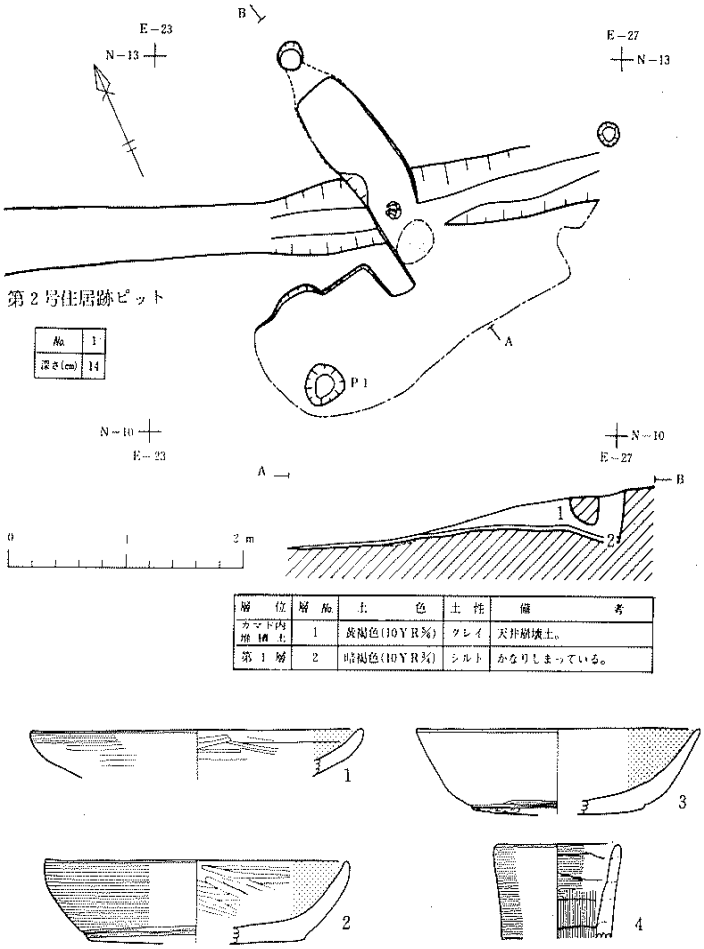
〔堆積土〕　削平を受け、堆積土は殆んど残っていない。わずかに、カマド西側周辺を中心に暗褐色シルトの単一の層が残っており、最も厚い部分で約８㎝の厚さである。

〔床面〕　地山をそのまま床としており、平担で堅い。床面は削平を受け住居跡北側を除いて大部分は失われている。

〔柱穴〕　住居跡西側でピットが１個検出されている。柱痕は検出されていない。周囲に堆積土がないことや、他に組み合うピットも検出されていないことから、本住居跡に伴うかどうかは不明である。

〔周溝〕　認められない。

〔カマド〕　燃焼部の一部と煙道部が残存していた。燃焼部天井および右側壁はすでに失われていた。カマド左側壁は地山を削り出して構築されており、本来は地山を削り出してカマドを構築していたものと思われる。燃焼部底面には焼け面が見られた。左側壁に焼け面は見られなかった。煙道部へは燃焼部底面から緩やかな傾斜を持って移行する。煙道の天井は一部を残し



No.	1
深さ(cm)	14

層位	層No.	土色	土性	備考
カマド内堆積土	1	黄褐色(10YR5/6)	クレイ	天井崩壊土。
第１層	2	暗褐色(10YR3/3)	シルト	かなりしまっている。

第６図　第２号住居跡

で崩落していた。煙道は長さ約 1.2m、幅約 0.5mの規模である。煙道先端には経約 20cm の円形の煙り出しピットがある。煙道から煙り出しピットへは緩やかな傾斜を持って移行しており、ピットの底面は、煙道底面から約10cm 低くなっている。

〔貯蔵穴状ピット〕　認められなかった。

〔出土遺物〕　本住居跡に伴う遺物としては、カマド内出土の土器がある。

土師器

坏　いずれも製作の際にロクロを使用していない。底部は丸底のもの（第６図２・３）、欠損して不明のもの（第６図１）とがある。前者は口縁部が内弯気味になっており、体部外面下端には沈線が巡っている。外面器調整の違いによってさらに、沈線を境にして上半分ヨコナデ、

下半分にヘラケズリが施されているもの（第６図２）と沈線を境にして上半分にヘラケズリ後ヘラミガキ、下半分にヘラケズリが施されているもの（第６図３）とに分かれる。いずれも内面には、ヘラミガキ黒色処理が施されている。後者は、口縁部が内弯気味になっており、体部外面には沈線は巡っていない。口縁部外面にヨコナデ、体部外面にヘラミガキ、内面はヘラミガキ、黒色処理が施されている。

手捏ね土器　（第６図４）　内外面ともナデ調整が施されている。輪積み痕が明瞭に残る。

第３号住居跡（第７図）

〔遺構の確認〕　調査区北側の地山面において確認された。

〔重複・増改築〕　２本の溝によって住居跡西側と南側が切られている。

〔平面形・規模〕　南壁は、削平によって失われているが、残存する壁の状況から平面形は方形を基調とすると考えられる。東西軸は、約4.8mの長さである。全体の規模は不明である。

〔堆積土〕　４層に大別することができる。１層は、褐色シルト層で住居跡のほぼ全域を覆う。第２層は、暗褐色シルト層で北壁沿いに堆積している。第３層は、暗褐色シルト層で住居跡北東隅から東壁沿いに堆積している。第４層は、暗褐色シルト層で東壁沿いに堆積している。

〔壁〕　地山をそのまま壁としている。南壁および東壁、西壁の南半分はすでにない。北壁の状況から比較的急な立ち上がりであったと考えられる。壁高は、最も保存状況のよい北壁で約25㎝の高さである。

〔床面〕　地山をそのまま床としている。床面は、南側にかけて緩やかに傾斜している。床面は堅くひきしまっているが、ところどころ竹の根による攪乱があり凹凸がある。

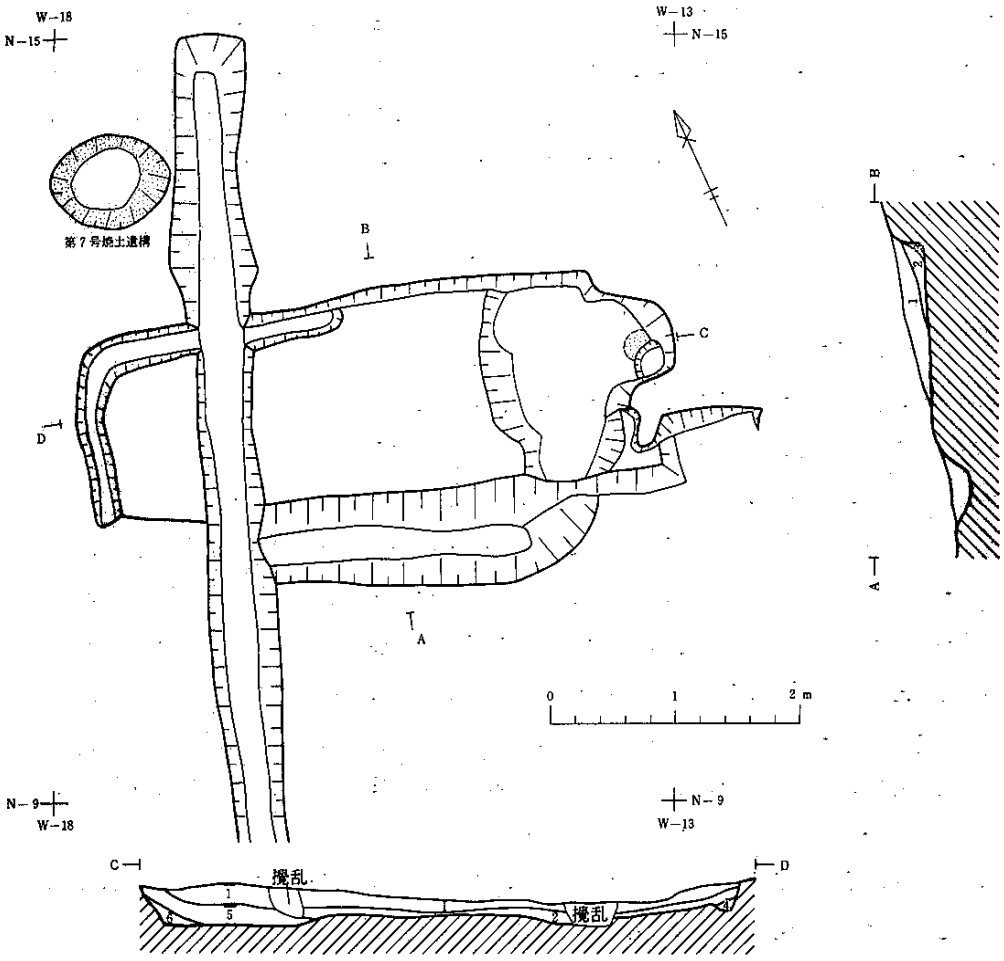
〔柱穴〕　ピットは検出されなかった。

〔周溝〕　北壁の西側と西壁かけて巡っている。幅約15～20㎝、深さは約３～５㎝と浅く、断面は「U」字形である。

〔カマド〕　住居跡東壁沿いにわずかに焼土、木炭の分布が見られた。しかし、カマドと思われる施設はなく、焼け面なども見られなかった。

〔貯蔵穴状ピット〕　住居跡北東隅に不整楕円形の落ち込みが検出されたが、竹の根による攪乱が激しく、出土遺物もなかった。

〔出土遺物〕　本住居跡に伴うと考えられる遺物は出土していない。



層位	層No.	土色	土性	備考	遺物取り上げ層位
第１層	1	褐色(10YR⅔)	シルト	地山ローム粒を少量含む。	１層
第２層	2	暗褐色(10YR⅔)	シルト	木炭粒を少量,地山ロームを多量に含む。しまりよし。	
	3	暗褐色(10YR⅔)	シルト	地山ロームを多量に含むが,2層より少ない。しまりよし。	
第３層	4	暗褐色(10YR⅔)	シルト	木炭粒,地山ローム粒をわずかに含む。しまりよし。	
第４層	5	暗褐色(10YR⅔)	シルト	地山ロームを多量,焼土・木炭粒を少量含む。しまりよし。	
周溝内堆積土	6	暗褐色(10YR⅔)	シルト	地山ローム粒を少量含む。しまりよし。	

第７図

第４号住居跡（第８図）

〔遺構の確認〕　調査区中央の地山面で確認された。

〔重複・増改築〕　第８号住居跡、第11号住居跡を切っている。

〔平面形・規模〕　南壁及び東・西壁の南側はすでに失われているが、残存する３つの壁の状況から北西隅がわずかに張り出した方形基調の住居跡であると考えられる。東西軸は約4.2mの長さである。全体の規模は不明である。

〔堆積土〕　４層に大別する事ができる。第１層は、黒褐色シルト層で、住居跡南側を除いてほぼ全域を覆っている。第２層は、暗褐色シルト層で住居跡の全域を覆っている。住居跡中央部では床面に達している。第３層は、暗褐色シルト層で住居跡の北壁、東壁沿いに堆積している。西壁および住居跡南側には見られない。第４層は、黄褐色シルト層で住居跡の壁の崩れであり、東壁際に堆積している。

〔壁〕　北壁と東壁は地山をそのまま壁としている。西壁は、第８号住居跡の堆積土を壁としている。壁は床面から緩やかに立ち上がっている。最も良く残存している北壁で約40㎝の高さである。東壁、西壁は、南側に行くに従ってその高さを減じている。

〔床面〕　住居跡西側は、第８号住居跡（第８号住居跡は、第11号住居跡の上に貼り床をして構築されている）の床面をそのまま床として使用している。その他の床面は、地山をそのまま床としている。床面は比較的堅く、北壁際と東壁際がわずかに低くなっており、中央がやや高くなっている。

〔柱穴〕　ピットは検出されなかった。

〔周溝〕　認められない。

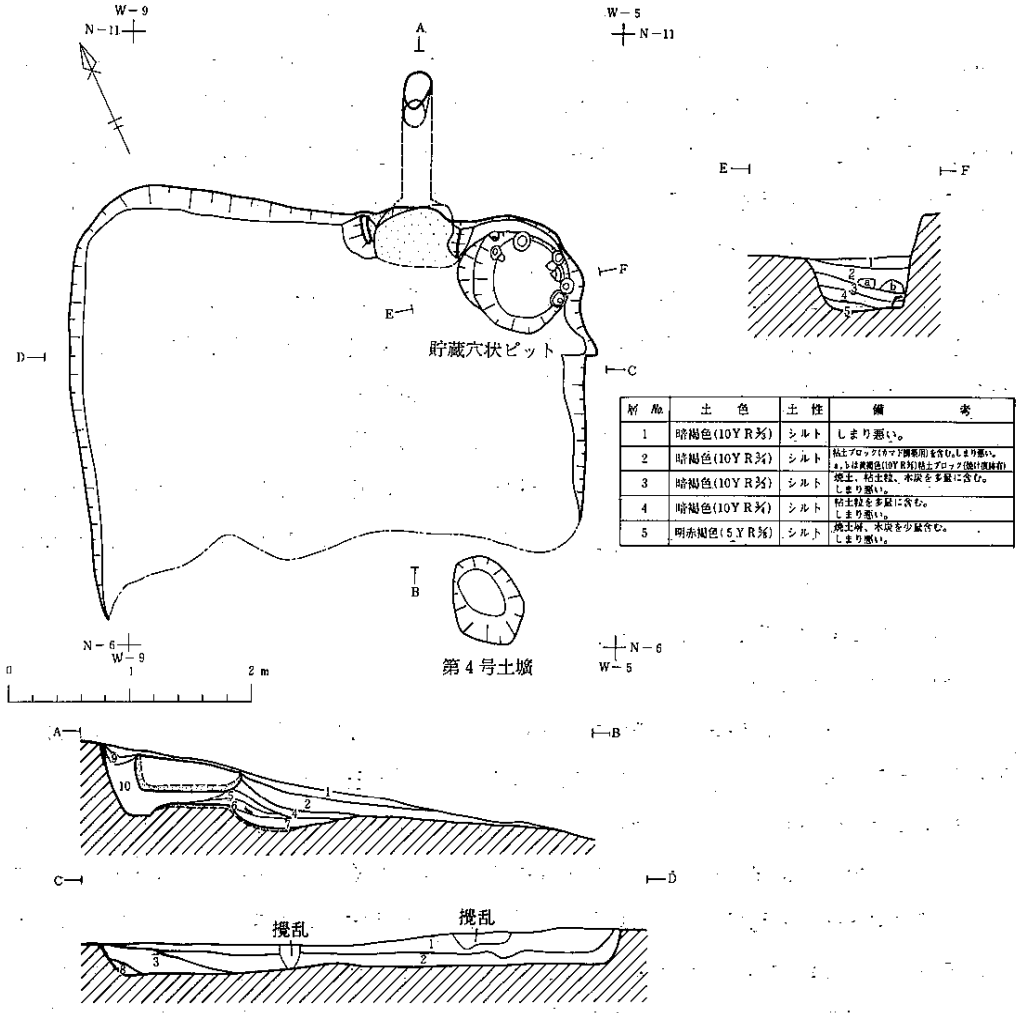
〔カマド〕　カマドは、住居跡北壁の中央からやや東寄りの部分に付設されている。燃焼部と煙道部とからなる。燃焼部天井はすでに失われているが両側壁が残存している。両側壁は、白色の粘土により構築されており、掘り方はない。燃焼部底面には焼け面が認められた。両側壁や奥壁も火熱のために赤化している。燃焼部奥壁は、北壁をそのまま利用しており掘り込みはない。燃焼部底面から約10㎝の高さをもって、煙道部へ移行する。煙道はトンネル状に掘り抜かれており、長さ約70㎝、幅約10㎝である。壁は、赤褐色に焼け堅くなっている。煙道の先端には、径約20㎝の円形の煙り出しピットがある。煙り出しのピット底面は、煙道底面より約10㎝低くなっている。

〔貯蔵穴状ピット〕　カマド右脇、住居跡北東隅で検出された。平面形は円形で、径約 60㎝、深さ約 40㎝ である。ピット内には、土師器や礫（火熱を受けた）が多数出土した。ピットの堆積土の状況をみると水平堆積を示しており、カマド側壁（焼け面の見られる粘土ブロック）・天井崩壊土と考えられる粘土ブロックが混っていた。また、焼土や木炭もかなり含まれており、人為的な堆積状況を示していた。

〔出土遺物〕　本住居跡に伴うと考えられる遺物には、床面、貯蔵穴内およびカマド内出土の土器がある。

土師器

坏　いずれも製作に際しロクロを使用している。体部は丸味を持って立ち上がり、口縁部で内弯気味になるもの（第９図１・２）、体部は丸味を持って立ち上がり、口縁部でわずかに、あ

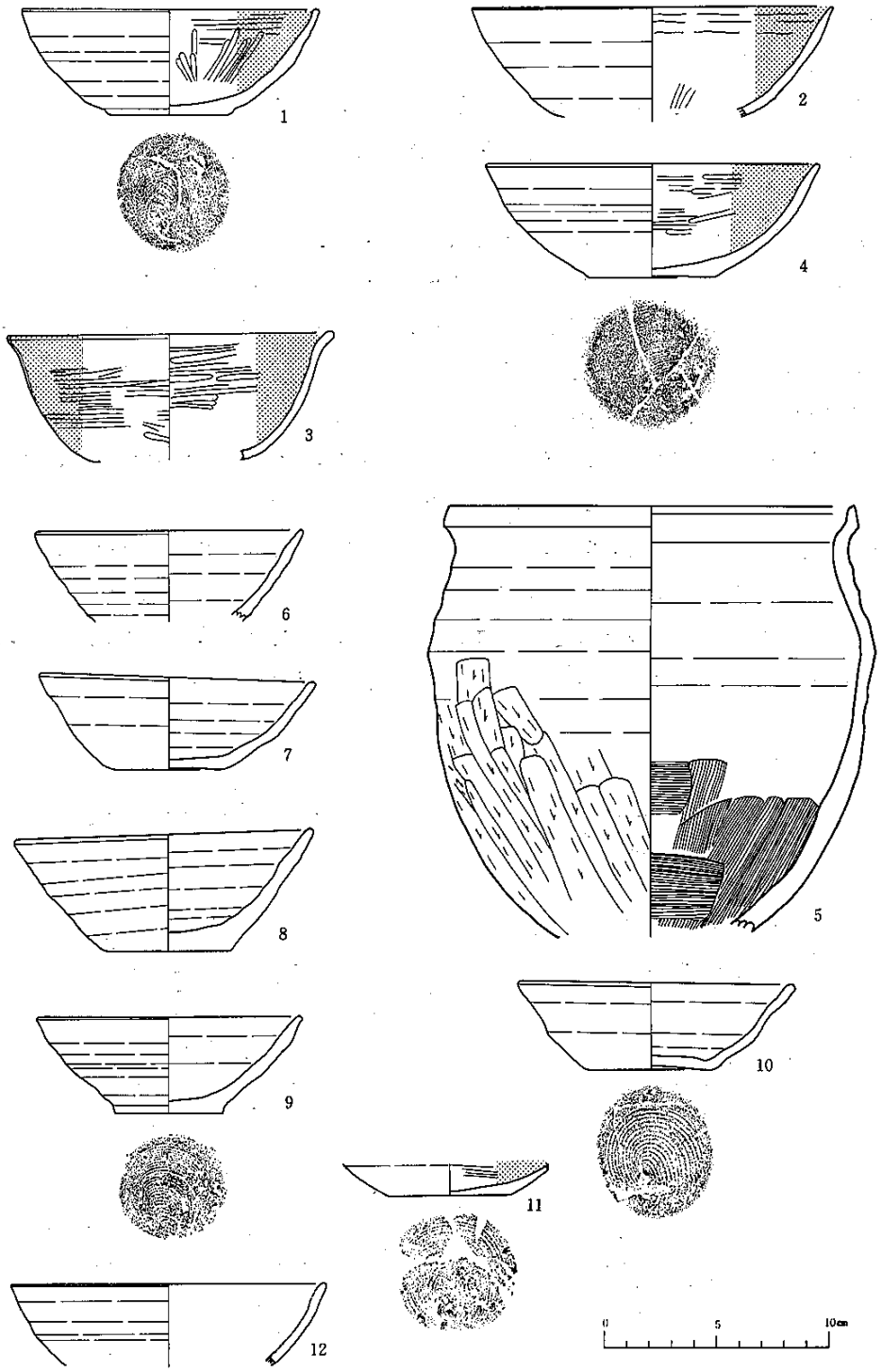


層	No.	土色	土性	備考
1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	しまり悪い。
2	暗褐色(10YR3/4)	シルト	粘土ブロック(カマド下調整用)を含む。しまり悪い。 a，bは黄褐色(10YR5/6)粘土ブロック(撹拌痕跡)
3	暗褐色(10YR3/4)	シルト	焼土、粘土粒、木炭を多量に含む。 しまり悪い。
4	暗褐色(10YR3/4)	シルト	粘土粒を多量に含む。 しまり悪い。
5	明赤褐色(5YR5/6)	シルト	焼土塊、木炭を少量含む。 しまり悪い。

層位	層No.	土色	土性	備考	遺物取り上げ層位
第1層	1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	木の根の含む。 しまりやや良し。	1 層
第2層	2	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山ローム粒を少量含む。 しまり良し。	2 層
第3層	3、	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト	しまり悪い。	3 層
	4	暗褐色(7.5YR3/4)	シルト	地山ローム粒 木炭粒を少量含む。 しまり悪い。	
第4層	5	黄褐色(10YR5/6)	シルト	地山ローム ブロック (住居掘削の残れ)	
カマド内堆積土	6	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山ブロック、木炭粒を少量含む。 しまり悪い。	カマド内
	7	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山ローム ブロック、焼土、木炭を含む。 しまり悪い	
	8	黒褐色(10YR3/2)	シルト	木炭、焼土を多量に含む。	
	9	暗褐色(7.5YR3/4)	シルト	木炭、焼土を少量含む。 (掘出し pit)	
	10	暗褐色(10YR3/3)	シルト	木炭粒、焼土を少量含む。	

第８図　第４号住居跡

るいは強く外反するもの（第９図３・４）、体部が直線的に立ち上がるもの（第９図 11）などがある。３は、内外面ヘラミガキ、黒色処理が施されている。その他の土器は、内面のみにヘラミガキ、黒色処理が施されている。第９図２を除いて、底部切り離し技法は回転糸切りであ



第９図　第４号住居跡出土遺物（Ⅰ）

る。

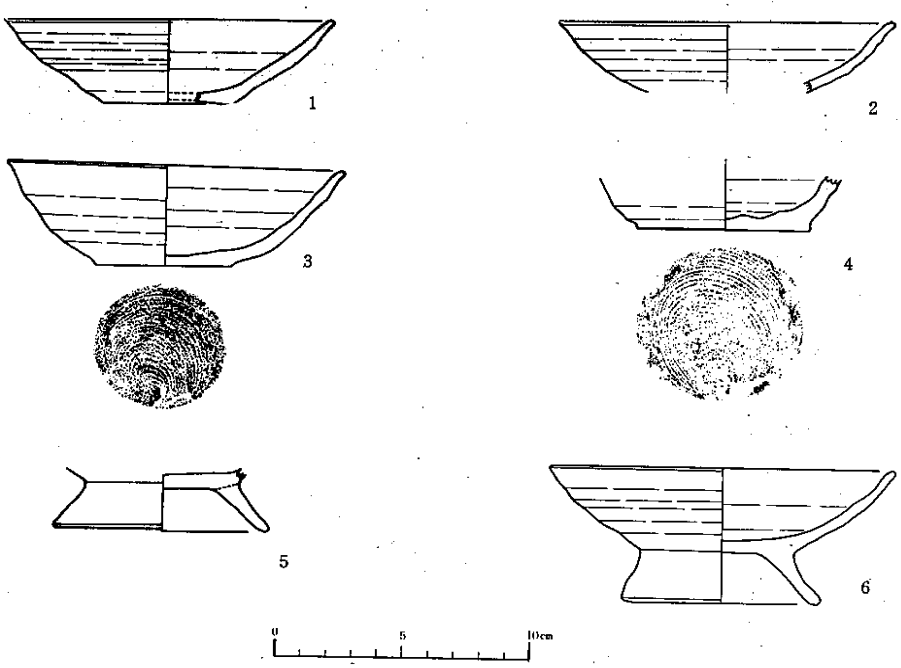
甕（第９図５）　製作に際しロクロを使用している。口径より器高が大きく最大径の位置は体部にある。口縁部は、外反しており、端部は上方につまみ出され、狭い縁帯をつくっている。体部外面には、縦方向のヘラケズリ、内面には体部下端にナデ調整が施されている。

赤焼土器

坏　いずれも製作・調整に際しロクロを使用し、底部切り離しが回転糸切り技法によるもので、内外面とも再調整の施されない土器群である。底部から口縁部にかけて直線的に外傾するもの（第９図６～10・12)、体部は丸味を持って立ち上がり、口縁部でわずかに外反するもの（第10図１～３）とがある。底部欠損しているもの（第９図６・12、第10図２）を除いて、底部切り離しは回転糸切り技法である。

甕（第10図４）　製作に際しロクロを使用し、再調整は加えていない。底部切り離しは回転糸切り技法である。体部下端から底部のみ残存している土器である。

高台付坏　いずれも製作に際しロクロを使用している。「ハ」字状に開く高台部のみ残存しているもの（第10図５）、体部は丸味をもって立ち上がり、口縁部で内弯気味になる坏部と、坏部に比して低い「ハ」字状に開く高台部とならなるもの（第10図６）とがある。いずれも高台部接合の際のナデ調整のために、坏部の底部切り離し技法は不明である。



第10図　第４号住居跡出土遺物（Ⅱ）

第５号住居跡（第11・12図）

〔遺構の確認〕　調査区西側の基本層位第Ⅱ層上面において確認された。

〔重複・増改築〕　第６号住居跡によって切られている。

〔平面形・規模〕　西壁は、第６号住居跡によって上半分を切られ、南壁は削平によってすでに失われている。残存する壁の状況から方形を基調とした住居跡であると考えられる。東西軸は、約5.0mの長さである。全体の規模は不明である。

〔堆積土〕　６層に分けられる。第１層は、黒褐色シルト層で住居跡中央に堆積している。第２層は、暗褐色シルト層で南側を除いて住居跡ほぼ全域を覆っている。第３層は、暗褐色シルト層で北壁際および西壁際に堆積している。第４層は、黒褐色シルト層で住居跡東壁沿い、西壁沿いを除いて北壁際から中央にかけて住居跡床面に堆積している。第５層は、暗褐色シルト層で住居跡南側に堆積している。第６層は、黒褐色シルト層で住居跡南側に堆積している。

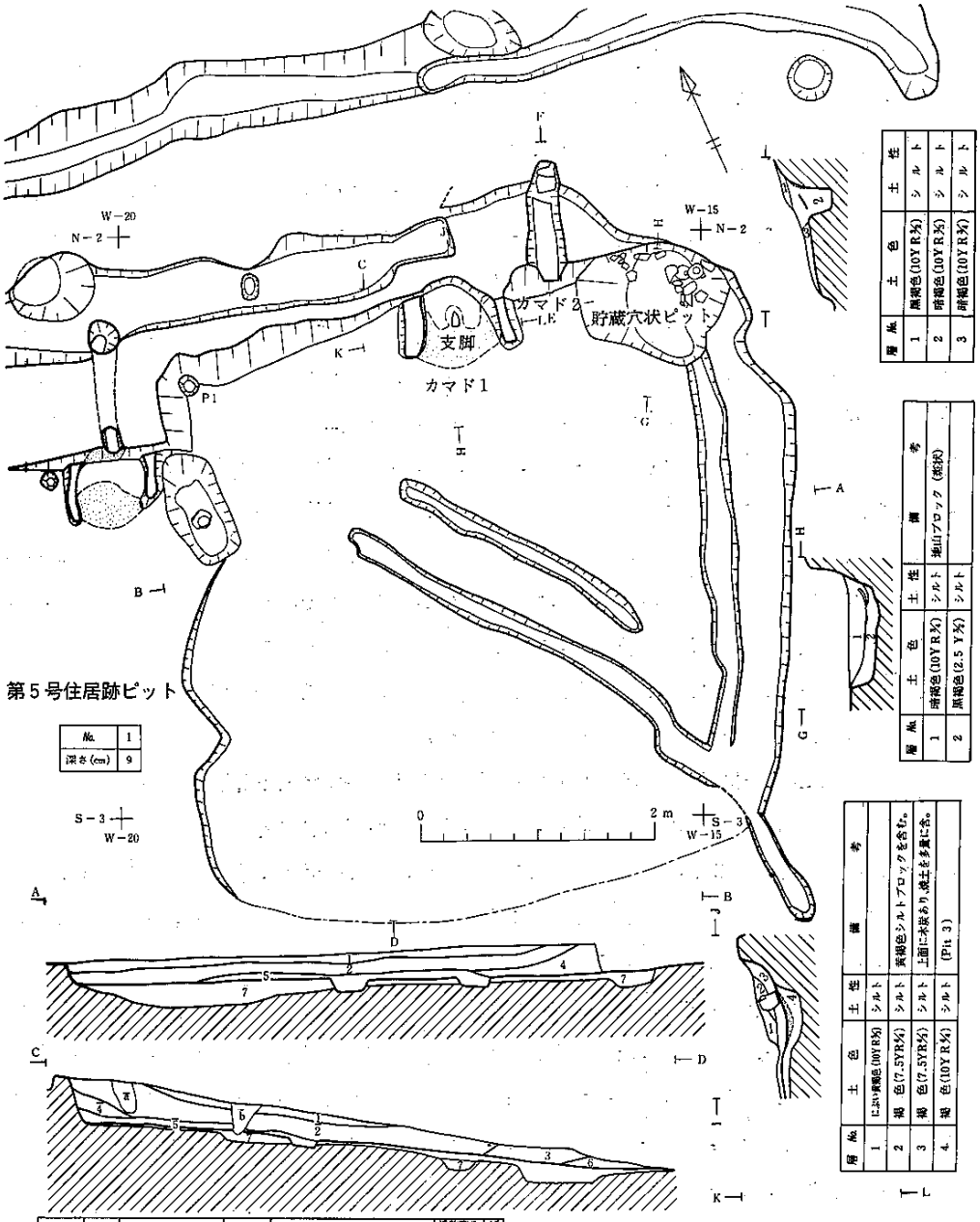
〔壁〕　南壁は削平されてすでにない。北壁は、地山をそのまま壁としており、比較的緩やかな立ち上がりを示している。残存壁高は最も保存の良いところで約40㎝である。東壁は、基本層位第Ⅱ層を壁としている。東壁は、北側が最も高く約25㎝の高さで、南側に行くに従いその高さを減じている。西壁は、基本層位第Ⅱ層を壁としている。第６号住居跡によって上半分が削られており、最も保存の良いところで壁高が８㎝ほどである。

〔床面〕　北側の一部は地山を床としているが、その他は基本層位第Ⅱ層上に貼り床をして床としている。床面は、ボサボサして軟かい。西壁沿いと南側に住居跡の掘り方が検出された。南側の掘り方を切って３本の溝が検出されている。住居跡の床面上に堆積している第４層と、これらの溝の堆積土とは区別することができなかった。従って、この３本の溝が本住居跡に伴うものであるかどうかは不明である。

〔柱穴〕　住居跡内から16個のピットが検出されている。ピット１を除いて、いずれも貼り床下で検出されている。ピットの配置などからピット７、ピット８、ピット12、ピット14の組み合わせを考えることができるが、いずれも掘り方がしっかりしておらず、主柱穴とは考えられない。他のピットも配置に規則性がなく、本住居跡の柱穴については不明である。

〔周溝〕　認められない。

〔カマド〕　新旧２つのカマドが認められた。カマド１（新）は、住居跡北壁のほぼ中央に付設されていた。燃焼部のみ残存していた。天井はすでに失われていたが両側壁が残存しており、浅黄橙色シルトと黄褐色シルト土が積み重ねられて構築されていた。内側は熱を受け赤化していた。底面の中央には、支脚と考えられる細長い石が直立していた。しかし、原位置をとどめているかどうか不明である。燃焼部底面も側壁同様に赤く焼けていた。燃焼部奥壁は、住居跡北壁をそのまま使用している。カマド２（旧）は、住居跡北壁東隅に煙道のみ残存していた。



層位	層No.	土色	土性	備考	遺物取り上げ層位
第1層	1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	灰白色シルト層を含む。	1 層
第2層	2	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山を斑状に含む。	2 層
第3層	3	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山ブロック、焼土を含む。	
第4層	4	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山(斑状)炭化物を含む。	3 層
第5層	5	黒褐色(10YR3/2)	シルト	白色シルト、地山(斑状)、炭化物を多量に含む。	
第6層	6	黒褐色(10YR3/2)	シルト		
貼り床	7	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山を斑状に多量に含む。固くしまっている。	貼り床
攪乱	a	黒色(10YR3/2)	シルト	地山ブロックを含む	
	b	黒褐色(10YR3/2)	シルト	ぼさぼさして、しまりがない。	

層No.	土色	土性	備考
1	浅黄橙色(10YR8/3)	シルト	
2	黄褐色(10YR5/6)	シルト	焼けた部分あり。
3	明赤褐色(5YR5/6)	シルト	固く焼けている。
4	暗褐色(7.5YR3/4)	シルト	地山ブロックを含む。

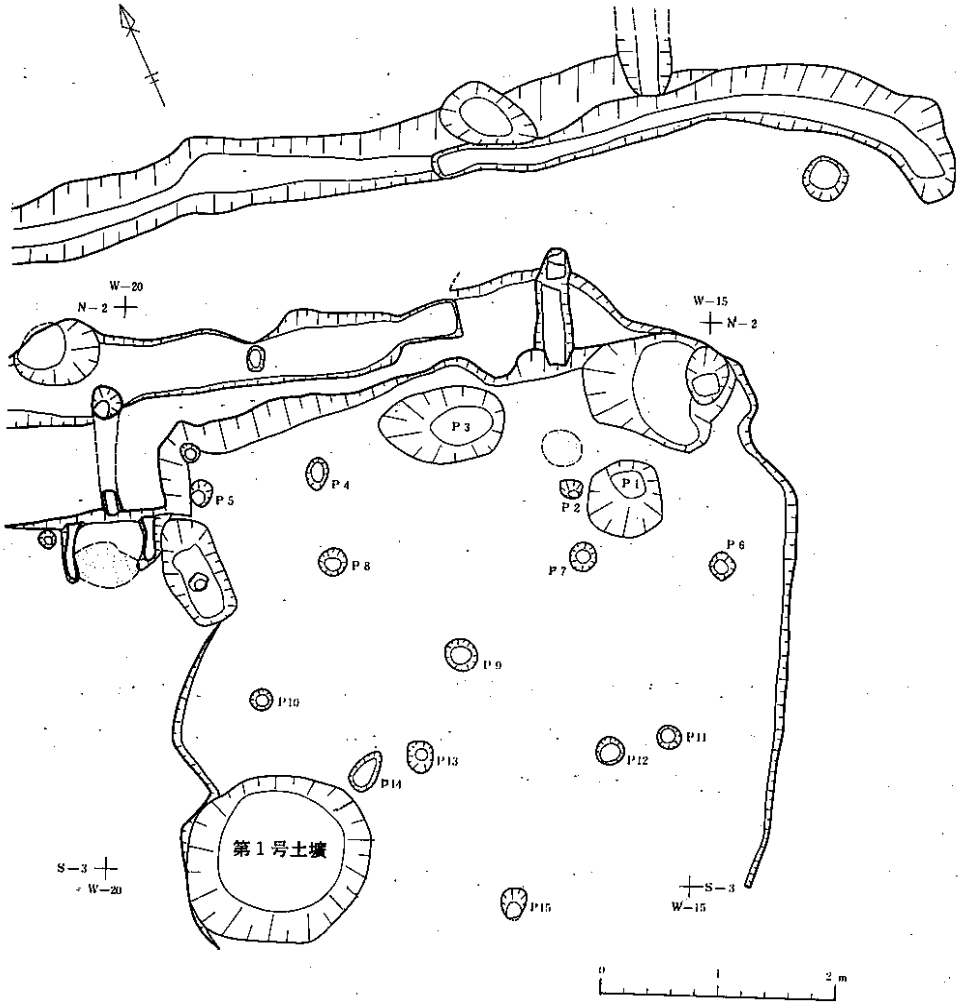
層No.	土色	土性	備考
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	
2	暗褐色(10YR3/3)	シルト	
3	暗褐色(10YR3/3)	シルト	

層No.	土色	土性	備考
1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山ブロック(斑状)
2	黒褐色(2.5Y3/2)	シルト	

層No.	土色	土性	備考
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	
2	暗褐色(7.5YR3/4)	シルト	黄褐色シルトブロックを含む。
3	暗褐色(7.5YR3/4)	シルト	上面に木炭あり、焼土を多量に含む。
4	暗褐色(10YR3/4)	シルト	(Pit 3)

No.	1
深さ(cm)	9

第11図　第５号住居跡



第５号住居跡ピット

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
深さ(cm)	39	20	13	3	12	16	18	23	11	11	19	13	29	7	27

第12図　第５号住居跡貼り床下検出ピット

煙道は、長さ約60cm、幅は約50cmの溝状になっており、燃焼部方向に向ってわずかに傾斜している。煙道先端には、径25cmの円形の煙り出しピットがあり、煙り出しピット底面は煙道から約20cm低くなっている。

〔貯蔵穴状ピット〕 住居跡北東隅に長軸約1.3m、短軸約1.0m、深さ約40cmの楕円形のピットが検出された。堆積土中や底面から土師器や須恵器などが出土している。

〔出土遺物〕 本住居跡に伴うと考えられる遺物には、床面出土の土器および鉄製品、カマド内、貯蔵穴内、貼り床内出土の土器がある。

土師器

坏 いずれも製作の際にロクロを使用している。体部は丸味を持って立ち上がり、口縁部でわずかに外反するもの（第13図１～４）、体部は丸味を持って立ち上がり、口縁部で内弯気味になるもの（第13図５）、体部から口縁部までほぼ直線的に外傾するもの（第13図６～13、第14図1）などがある。第13図１～３、５～10、14の底部切り離し技法は、回転糸切りである。第13図３・８は、体部下端に手持ちヘラケズリが施されている。第14図１は、体部上半から底部にかけて、第13図４は、底部のみに手持ちヘラケズリが施されており、底部切り離し技法は不明である。いずれも、内面にはヘラミガキ、黒色処理が施されている。

須恵器

坏 体部は丸味を持って立ち上がり、口縁部でわずかに外反するもの（第14図２）、体部から口縁部にかけて直線的に外傾するもの（第14図３）とがある。いずれも底部は回転糸切り技法によって切り離されており、再調整はない。

赤焼土器

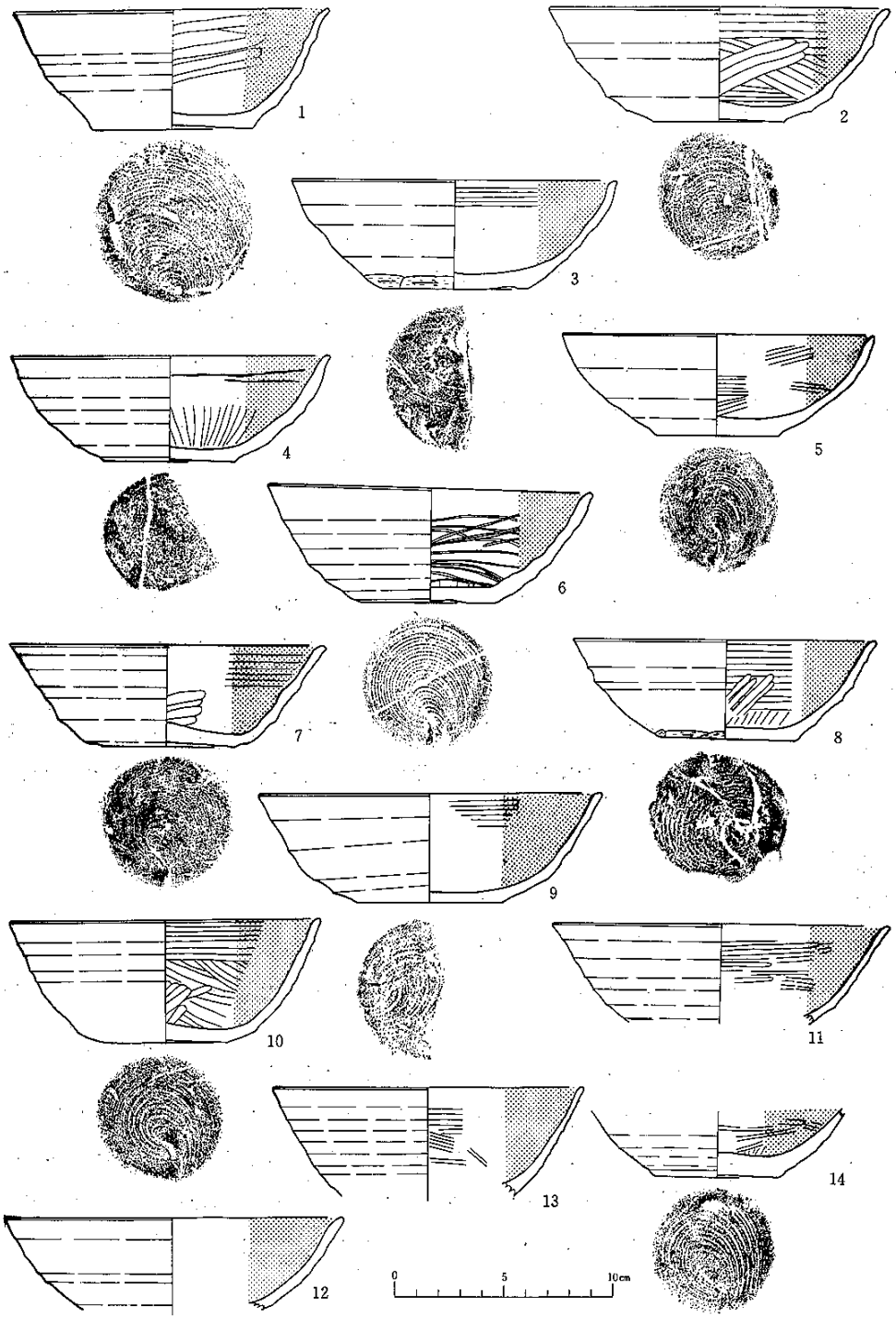
坏（第14図４） 製作に際しロクロを使用しており、再調整はない。底部切り離し技法は、回転糸切りである。

鉄製品

刀子 ３点出土している。いずれも、平棟直身の刀子で、銹化がすすんでいる。第14図５・７は刀身の半分が欠損している。第14図６は、茎部の先端を欠いており、茎部に柄のものと思われる木質が付着している。

第５号住居跡出土刀子計測表

	現存長	刃　幅	棟　幅
第14図５	8.3cm	1.0cm	0.4cm
第14図６	7.7cm	0.8cm	0.4cm
第14図７	10.6cm	1.0cm	0.4cm



第13図　第５号住居跡出土遺物（Ⅰ）

ピット２出土遺物

土師器

坏（第14図９）　製作の際にロクロを使用している。体部は丸味を持って立ち上がり、口縁部は強く外反している。内面はヘラミガキ、黒色処理が施されている。底部切り離しは、回転糸切り技法である。

耳皿（第14図８）　坏部と坏に比してわずかに低い高台部とからなる。ロクロ使用の有無は不明である。坏部の口縁部は、長軸方向に対している口縁を上方に折り曲げている。高台部は、直線的に外傾している。坏部外面には一部ヘラミガキが見られるが、摩滅が激しく単位不明な箇所が多い。内面は、口縁部は横方向のヘラミガキ、その他の部分は長軸方向に平行してヘラミガキが施されている。高台部外面はヘラミガキ、内面にはナデ調整が施されている。全面に黒色処理が施されている。

ピット３出土遺物

土師器

坏（第14図10）　製作の際にロクロを使用している。体部は丸味を持って立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。内面はヘラミガキ、黒色処理が施されている。底部切り離し技法は回転糸切りである。

甕（第14図13）　製作の際にロクロを使用していない。最大径の位置は口縁部にある。口縁部は外傾しており、体部はわずかに脹らむ。器面調整は、口縁部内外ともにヨコナデ、体部外面は縦方向のヘラケズリ、内面はヘラナデが施されている。

堆積土出土遺物

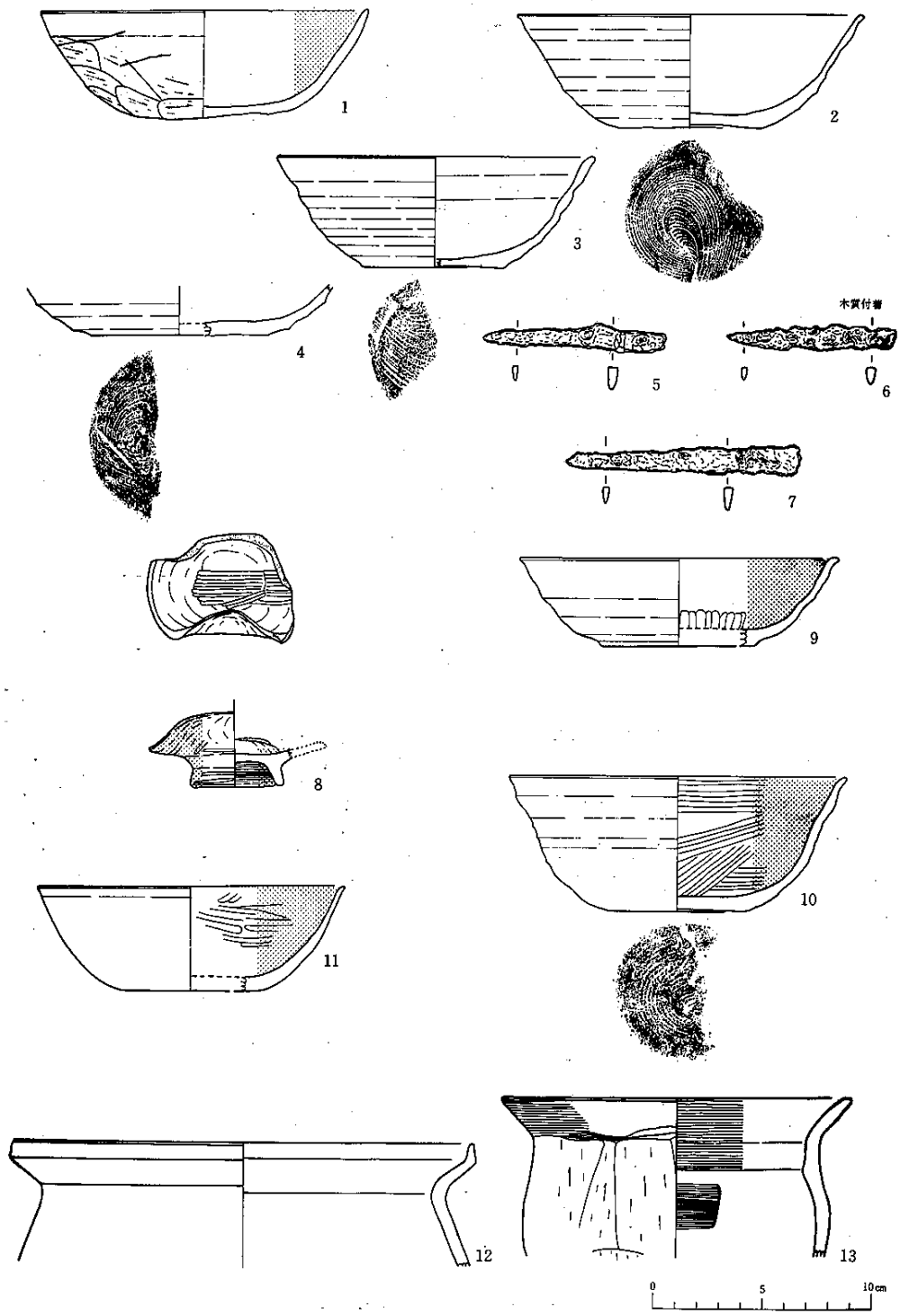
土師器

坏（第14図11）　製作に際しロクロを使用している。体部は丸味を持って立ち上がり、口縁部でわずかに外反している。内面はヘラミガキ、黒色処理が施されている。底部は摩滅のため切り離し技法は不明である。

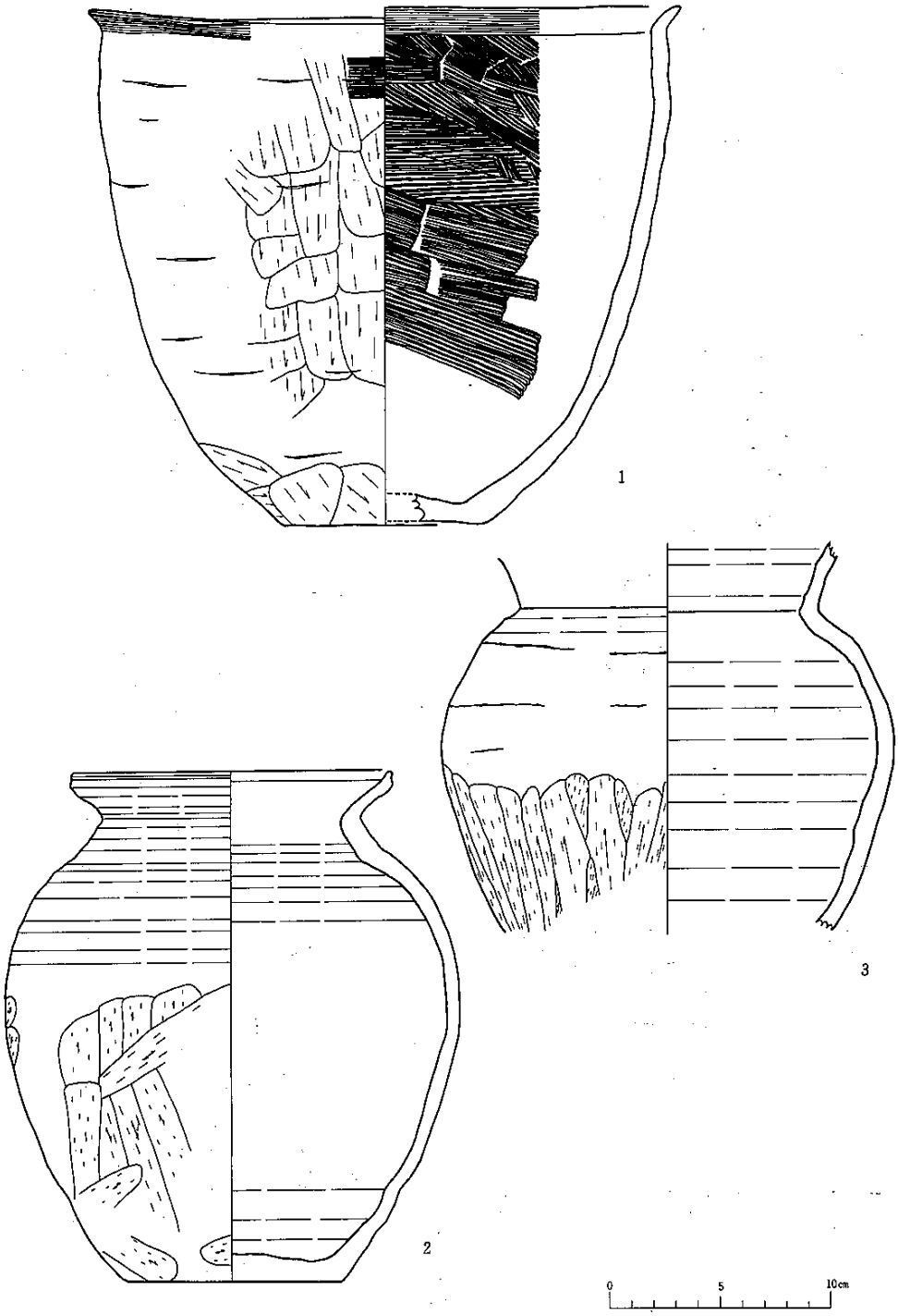
甕　製作に際しロクロを使用しているもの（第14図12）と使用していないもの（第15図１）とがある。第14図12の口縁部は外反し、端部は上方につまみ出され狭い縁帯をつくり出している。体部下半は欠損して無い。第15図１は、口径より器高が小さく、最大径の位置が口縁部にある。口縁部は短く外傾している。口縁部内外にヨコナデ、体部外面は縦方向のヘラケズリ、内面には全面に刷毛目が施されている。底部には、ヘラケズリが施されている。

須恵器

甕　ほぼ完形のもの（第15図２）、口縁部および体部下半が欠損しているもの（第15図３）とがある。いずれも最大径の位置は体部上半にあり、体部中央から底部にかけてヘラケズリが施されている。



第14図　第５号住居跡出土遺物（Ⅱ）



第15図　第５号住居跡出土遺物（Ⅲ）

第６号住居跡（第16図）

〔遺構の確認〕　調査区西側の基本層位第Ⅱ層上面で確認された。

〔重複・増改築〕　第５・第７・第９号住居跡を切り第１・３号溝によって切られている。

〔平面形・規模〕　南壁は削平を受けておりすでにないが、残存する３つの壁から方形基調と思われ、東西軸は4.2mの長さである。全体の規模は不明である。

〔堆積土〕　４層に分かれる。第１層は、暗褐色シルト層で住居跡のほぼ全体を覆っている。第２層は、褐色シルト層で住居跡西半分に堆積し、中央では床面に達している。第３層は、褐色シルト層で東半分に堆積し、壁沿いを除いて床面に堆積している。第４層は、黒褐色シルト層で壁沿いに見られる。

〔壁〕　南壁と東・西壁の南側は残存しない。北壁は、地山をそのまま壁としている。東壁は第５号住居跡の堆積土を、西壁は第７号住居跡堆積土を壁としている。壁の立ち上がりは急であり、壁高は最も保存の良い北壁で約35㎝である。

〔床面〕　北壁沿いは地山上に貼り床をしており、その南側は地山を、南端は基本層位第Ⅱ層を床としている。全体に堅く、貼り床の部分には細かな凹凸が見られる。床面は、わずかに南側に傾斜している。

〔柱穴〕　カマド左脇にピット１個が検出されているが、柱穴と考えられるものはなく本住居跡の柱穴については不明である。

〔周溝〕　認められない。

〔カマド〕　北壁東寄りに付設されている。燃焼部と煙道部とからなる。燃焼部の天井はすでに崩落しており、両側壁のみが残存していた。黄褐色粘土によって構築されている。両側壁には、焼け面が見られ、燃焼部底面にも焼け面が見られた。燃焼部奥壁は、北壁をそのまま使用している。煙道部は、燃焼部底面から約20㎝の高さをもってほぼ水平に掘り抜かれており、トンネル状になっている。煙道は、長さ約80㎝、幅約10㎝の規模である。カマドの掘り方は無い。燃焼部内には、側壁あるいは天井の崩落したものと考えられる焼土、粘土、ブロックが堆積しており、その中には芯入りのものも見られる。

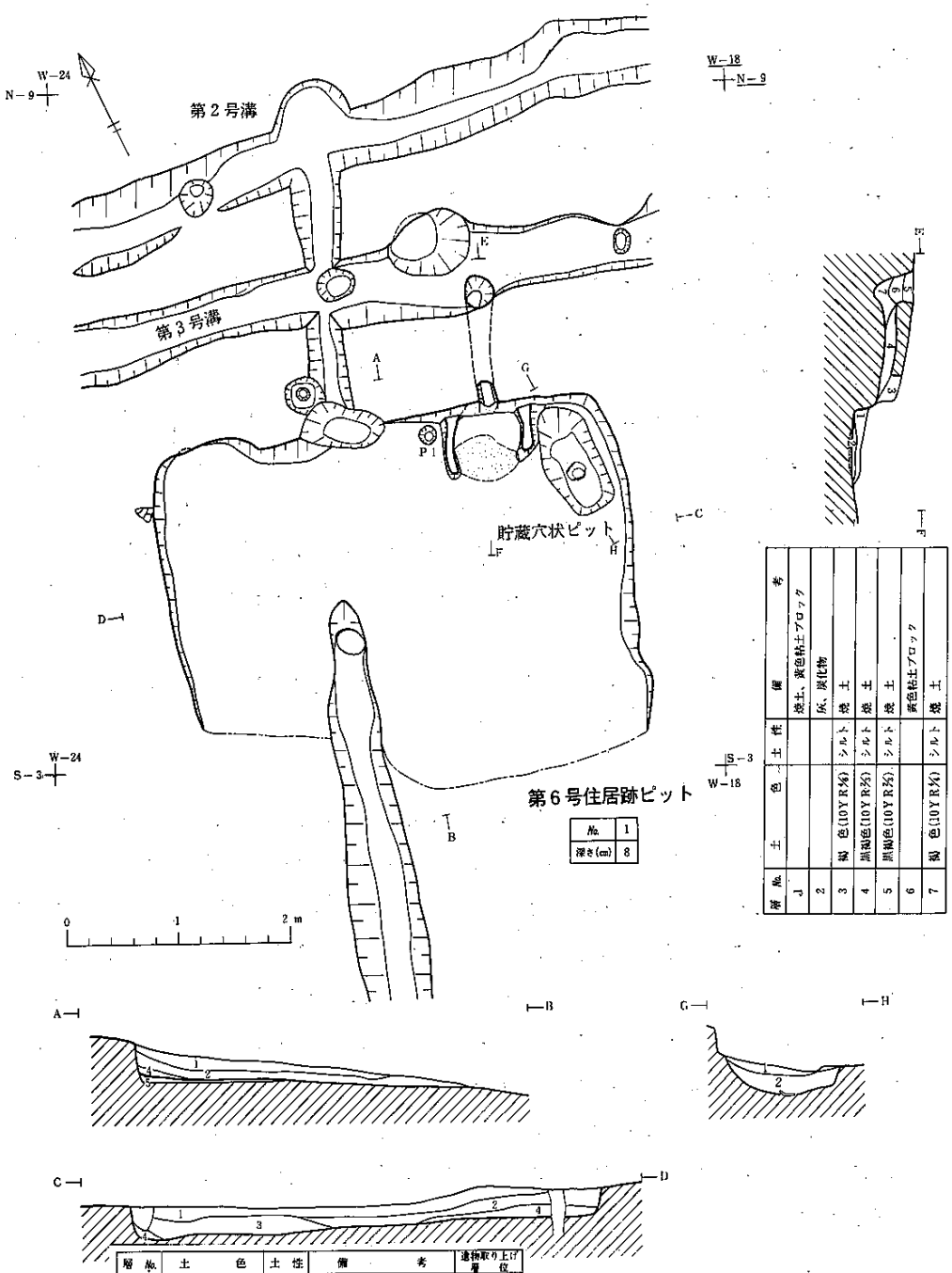
〔貯蔵穴状ピット〕　住居跡北東隅のカマド右脇に位置している。平面形は、長軸約1.0m、短軸約0.5m、深さ約20㎝の楕円形で、堆積土中および底面から遺物が出土している。

〔出土遺物〕　本住居跡に伴うと考えられる遺物には、床面出土の土器がある。しかし、図示できるものはない。

堆積土出土遺物

土師器

坏　いずれも製作に際しロクロを使用している。体部は丸味を持って立ち上がり、口縁部で



層No.	土色	土性	備考
J			焼土、黄色粘土ブロック
2			灰、炭化物
3	褐色(10YR⅘)	シルト	焼土
4	黒褐色(10YR⅔)	シルト	焼土
5	黒褐色(10YR⅔)	シルト	焼土
6			黄色粘土ブロック
7	褐色(10YR⅘)	シルト	焼土

層No.	土色	土性	備考	遺物取り上げ層位
1	暗褐色(10YR⅓)	シルト	黄色粘土、白色粘土ブロックを含む。	1 層
2	褐色(10YR⅘)	シルト	黄色粘土、黒色シルトブロックを多量に含む。	2 層
3	褐色(10YR⅘)	シルト	白色粘土、黒色シルトブロックを多量に含む。	
4	黒褐色(10YR⅓)	シルト	焼土を少量、炭化物を多量に含む。	3 層
5	黄褐色(10YR⅝)	シルト	貼り床。	貼り床

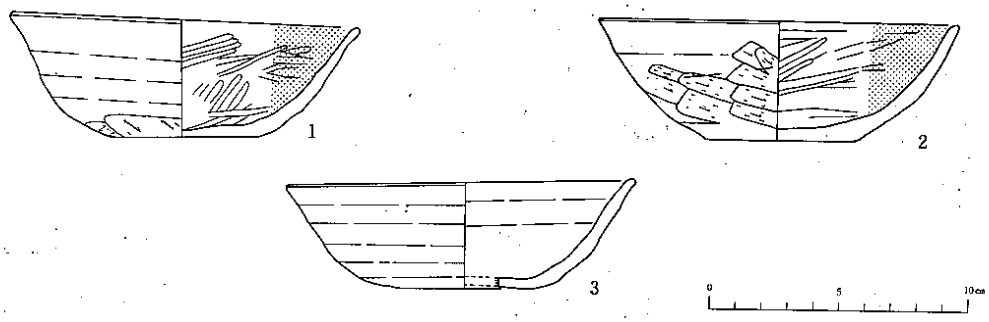
層No.	土色	土性	備考
1	にぶい黄褐色(10YR⅝)	シルト	白色粘土を多量に含む。
2	黒褐色(10YR⅔)	シルト	黄色粘土を多量に含む。

第16図　第６号住跡

わずかに外反するもの（第17図１）、体部は丸味を持って立ち上がり、口縁部まで直線的に外傾するもの（第17図２）とがある。前者は、体部下端にのみ手持ちヘラケズリが施されており、後者は、手持ちヘラケズリが体部上半から底部まで施されている。いずれも内面はヘラミガキ、黒色処理が施されている。

赤焼土器

坏（第17図３）　製作に際しロクロを使用しており、再調整はない。体部は丸味を持って立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。底部は摩滅しており、切り離し技法は不明である。



第17図　第６号住居跡出土遺物

第７号住居跡（第18図）

〔遺構の確認〕　調査区西側の基本層位第Ⅱ層上面で確認された。

〔重複・増改築〕　第６号住居跡、第６号焼土遺構などによって切られ、第９号住居跡を切っている。なお、第９号住居跡との関係については、第９号住居跡から第７号住居跡への増改築が考えられるが、詳細は第９号住居跡の項で記述する。

〔平面形・規模〕　北壁のみ残存している。北壁の状況から方形基調とする住居跡であると考えられる。全体の規模は不明である。

〔堆積土〕　住居跡内堆積土の残りは良くなく１層のみである。黒褐色シルト層であり、最も厚いところで20㎝程である。

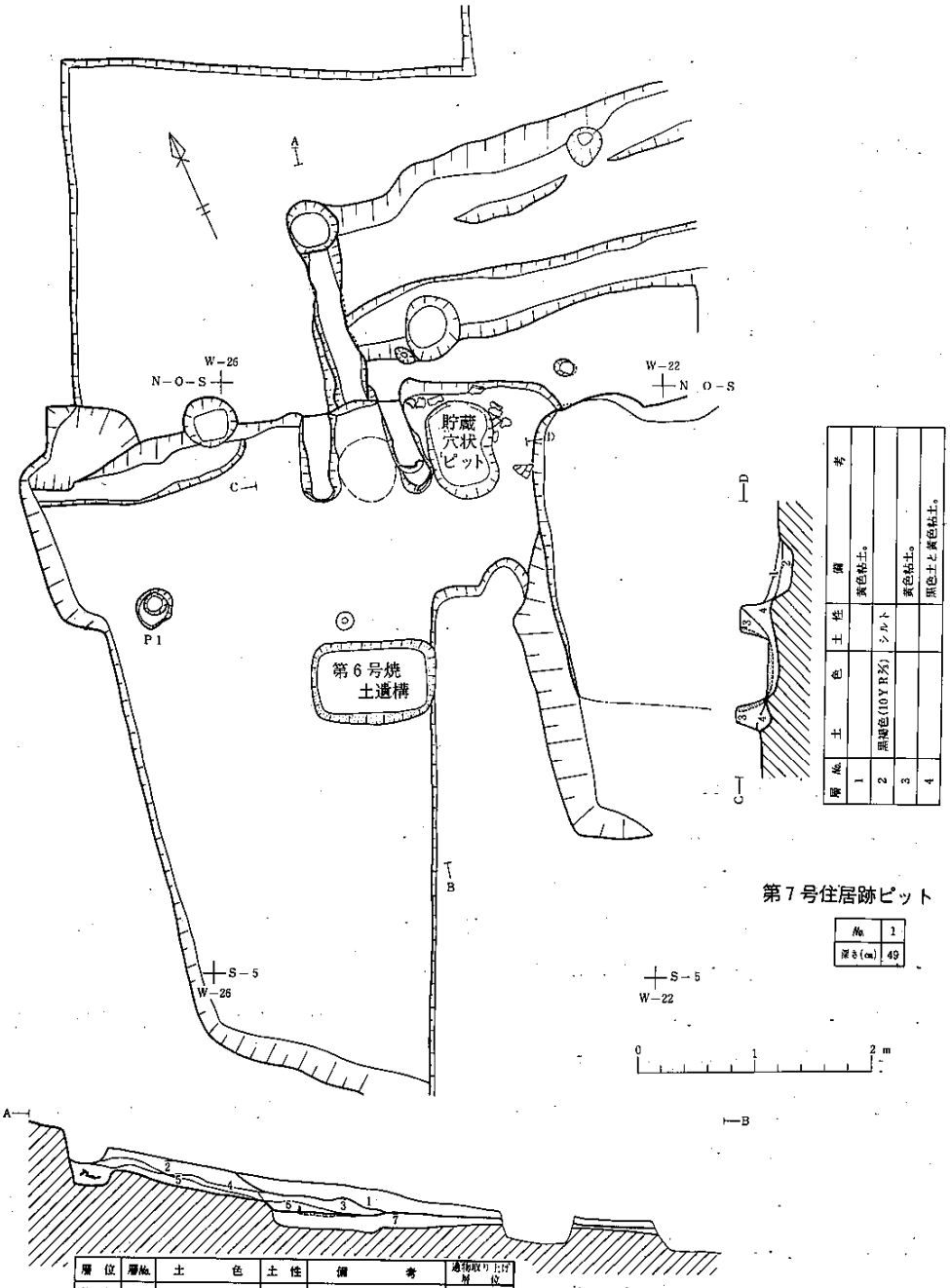
〔壁〕　北壁のみが残存する。地山を壁とし、立ち上がりは急である。壁高は約30㎝である。

〔床面〕　北壁沿いは地山を直接床としており、その地は第９号住居跡床面に貼り床をして床面としている。全体的に堅く平坦である。

〔柱穴〕　住居跡内からピット１個がカマド南西において検出されている。柱痕跡が確認されており、柱穴と考えられるが、他に組み合うピットはなく全体としては不明である。

〔周溝〕　認められない。

〔カマド〕　北壁の東寄りに付設されている。燃焼部と煙道部とからなる。燃焼部天井は崩落



第7号住居跡ピット

No.	1
深さ(cm)	49

層位	土色	土性	備考
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	黄色粘土。
2			
3			黄色粘土。
4			黒色土と黄色粘土。

層位	層No.	土色	土性	備考	遺物取り上げ層位
第1層	1	黒褐色(10YR3/2)	シルト		1 層
カマド内堆積土	2	褐 色(10YR4/4)	シルト		カマド内
	3			焼土、焼土ブロック、炭化物	
	4			焼土、焼土ブロック 3層より焼土の色は暗い。	
	5	褐 色(10YR4/6)	シルト	焼土、炭化物	
	6	褐 色(10YR4/6)	シルト		
貼り床	7	黒褐色(10YR3/2)	シルト	黄褐色(10YR5/6)粘土を含む。	貼り床

第18図　第7号住居跡

してすでにない。両側壁は、黄色粘土と黒色シルトを使用して構築されており、平面形は「八」字状に開く。両側壁先端には、土師器甕を倒立させ、芯として埋め込んでいる。燃焼部底面には、楕円形の焼け面が見られた。燃焼部奥壁は、住居跡北壁をそのまま使用しており、煙道部へは燃焼部底面から約 10cm の段をもって移行する。煙道の天井はすでになく、溝状になっており長さ約1.3m、幅約30cmの規模である。煙道は、煙り出しピット側から燃焼部方向にむかって傾斜している。高低差は、20cm程である。先端には、径約40cmの円形の煙り出しピットがある。煙り出しピットの底面は、煙道底面より約15cm程低い。燃焼部内には、側壁あるいは天井の崩落したものと考えられる焼土ブロックが堆積しており、その中には茨が入っている。なお、燃焼部下には、燃焼部とほぼ同規模の掘り方が見られ、側壁下部は掘り方埋土と同一の土で構築されている。

〔貯蔵穴状ピット〕　北壁沿いのカマド右側で検出されている。平面形は楕円形で長軸約 90cm 短軸約50cm、深さ約20cmの規模である。堆積土および底面から遺物が出土している。

〔出土遺物〕　本住居跡に伴うと考えられる遺物には、カマド側壁に使用している土器およびカマド内土器、床面の土器などがある。

土師器

甕　いずれも製作に際しロクロを使用している。口径より器高が大きく、最大径の位置が体部にあるもの（第19図１・３）、口径より器高が大きく、最大径の位置が口縁部にあるもの(第19図２)、最大径の位置が口縁部にあるもの（第19図４・５・６、第20図１）、最大径の位置が体部にあるもの（第20図２)、最大径の位置が不明なもの（第21図１・２）とがある。

いずれも頸部でくびれ、口縁部は外反かもしくは外傾している。端部は、上方につまみ出され狭い縁帯をつくっているもの（第19図１・３・５・６、第20図１・２、第21図１・２）、丸くおさまるもの（第 19 図２・４）とがある。また、外面にヘラケズリの再調整が施されるもの（第19図１・３・６、第20図１・２）や、内面にヘラナデの再調整が施されているもの（第20図１）がある。内面には、再調整のないものが多い。

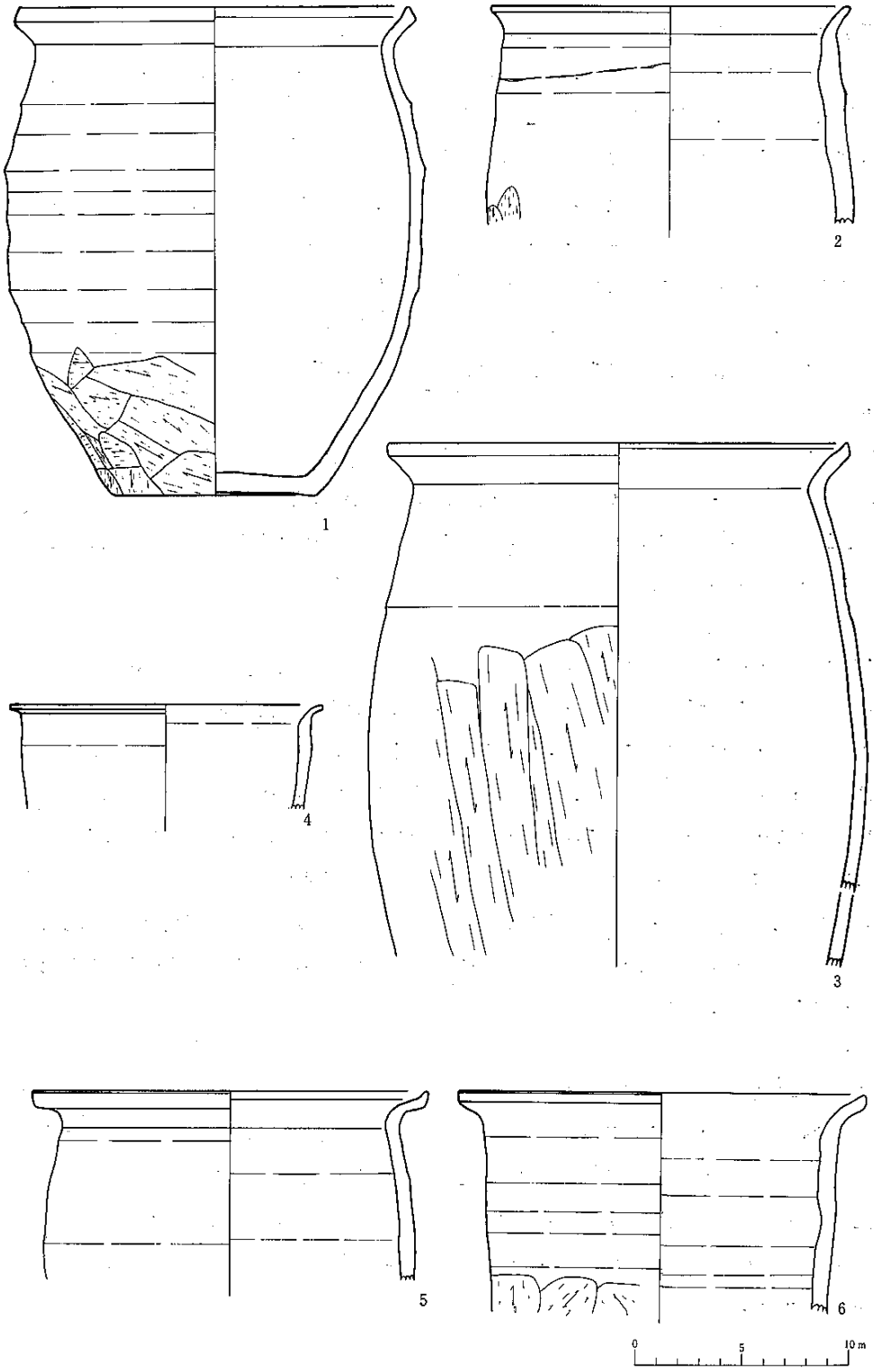
須恵器

坏　体部は丸味を持って立ち上がり、口縁部でゆるやかに外反するもの（第20図３）、底部からほぼ直線的に外傾するもの（第20図４）とに分けられる。底部切り離し技法は、４が回転糸切りで、３は手持ちヘラケズリの再調整が施されているために不明である。

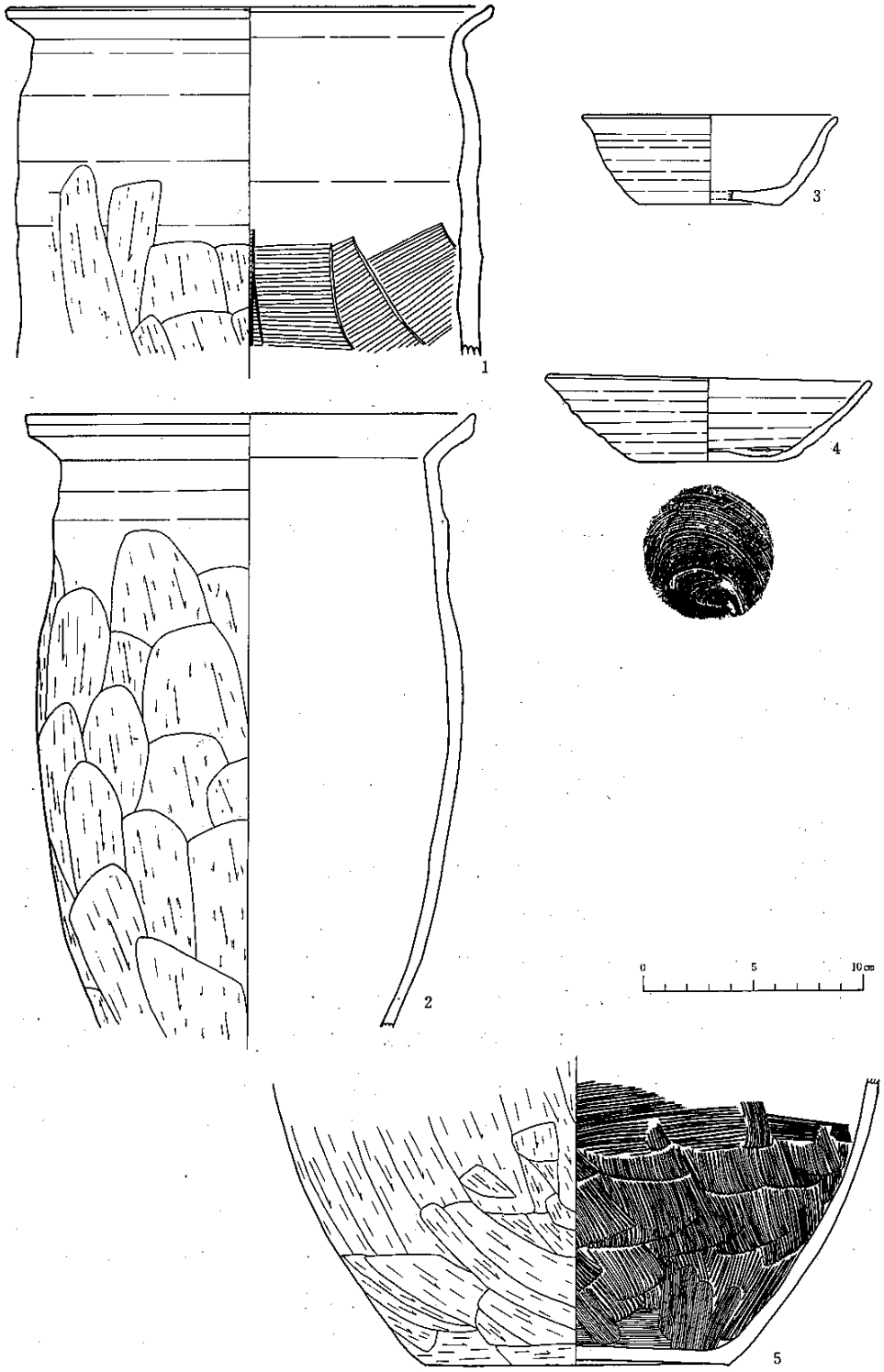
甕（第20図５）　体部上半及び口縁部は欠損している。体部外面は全面にヘラケズリ、内面は体部下半に刷毛目を切ってナデ調整が施され、その他は刷毛目が全面に施文されている。

堆積土出土遺物

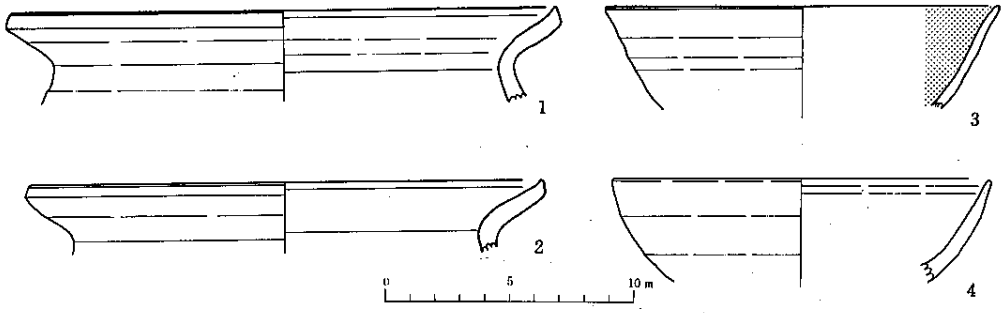
土師器



第19図　第７号住居跡出土遺物（Ⅰ）



第20図　第７号住居跡出土遺物（Ⅱ）



第21図　第７号住居跡出土遺物(Ⅲ)

坏（第21図３）　製作に際しロクロを使用している。底部は欠損しており、口縁部はわずかに外反している。内面はヘラミガキ（摩滅のため単位不明)、黒色処理が施されている。

赤焼土器

坏（第21図４）　製作に際しロクロを使用しており、再調整はない。体部から口縁部にかけて内弯気味になる。摩滅が激しい。

第８号住居跡（第22図）

〔遺構の確認〕　調査区中央の地山面において確認された。

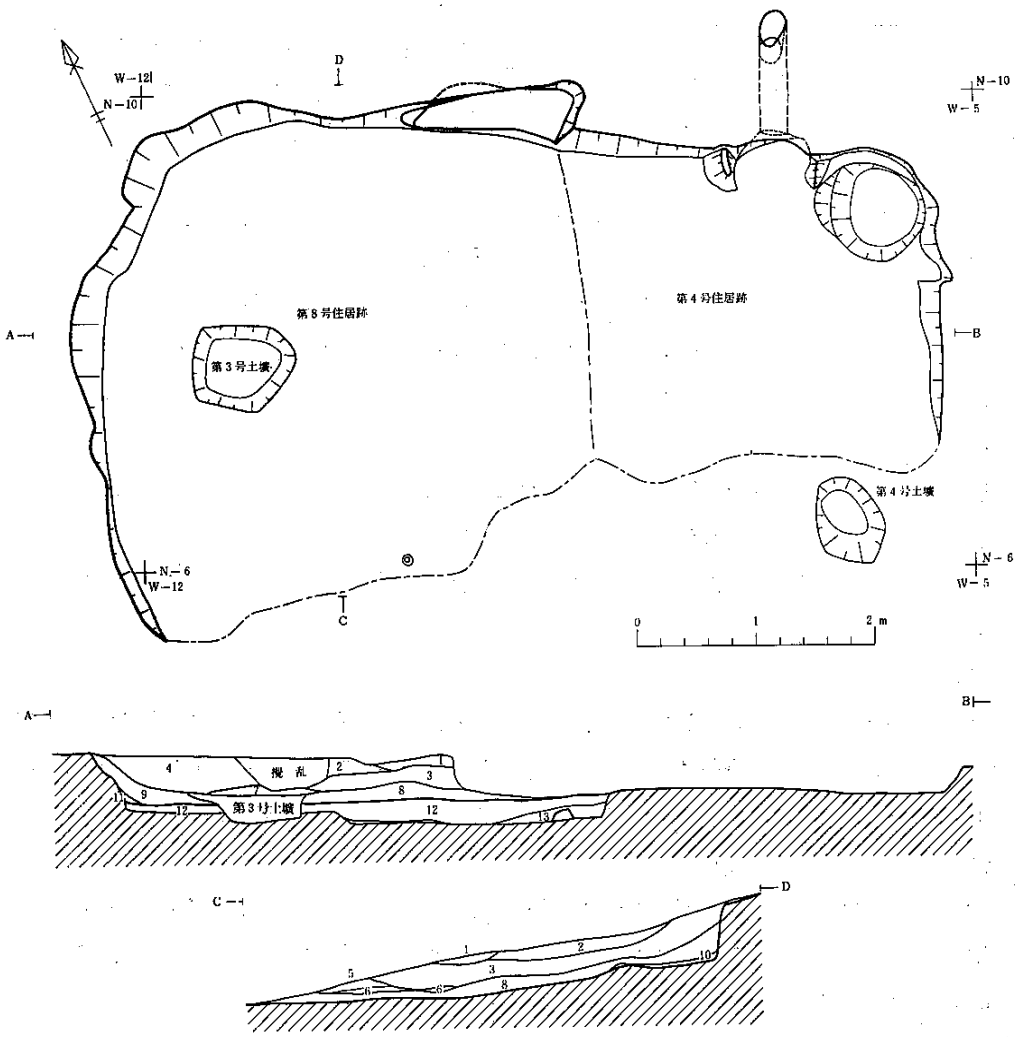
〔重複・増改築〕　第11号住居跡を切って構築されており、第４号住居跡および第３号土壙によって切られている。第11号住居跡から第８号住居跡への増改築が考えられるが、詳細は第11号住居跡の項で記述する。

〔平面形・規模〕　南壁や西壁の南半分および東壁はすでにない。しかし、床面の状況と残存する壁の状況から、方形を基調とする住居跡であると考えられる。壁および貼り床の状況から東西軸は4.0mの長さと考えられるが全体の規模については不明である。

〔堆積土〕　９層に大別することができた。第１層は、黒褐色シルト層で住居跡の中央にのみ堆積している。第２層は、暗褐色シルト層で住居跡東半分に堆積している。第３層は、にぶい黄褐色シルト層で西半分に堆積している。非常に堅い層である。第４層は、暗褐色シルト層で南半部に堆積している。第５層は、地山の崩壊した層で北西隅に堆積している。第６層は、暗褐色シルト層で住居跡床面のほとんど全域を覆っている第７層は、暗褐色シルト層で住居跡西壁沿いに堆積している。第８層は、褐色シルト層で北壁沿いに堆積している。

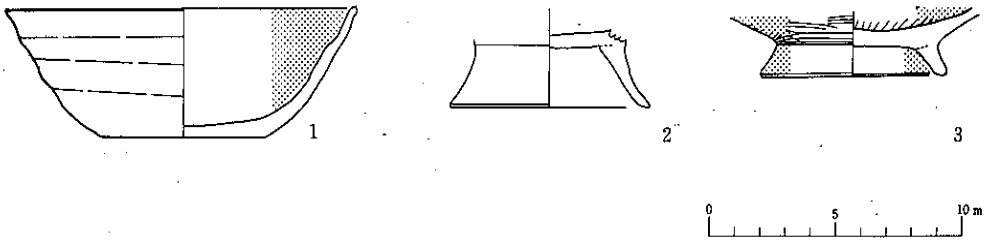
第９層は、地山崩壊土であり、住居跡壁の崩壊したものと考えられ、西壁沿いに堆積している。

〔壁〕　東壁と南壁はすでになく不明であるが、残存する壁は、地山をそのまま壁として使用している。壁の崩壊が激しく凹凸が目立つ。最も遺存状態の良い北壁で、残存高は約50cmである。壁の立ち上がりは北壁においては急であるが、西壁は緩やかである。



層位	層No.	土色	土性	備考	遺物取り上げ層位
第1層	1	黒褐色(10YR3/4)	シルト	木の根を含む。	1層
第2層	2	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山ロームを多量に含む。しまり良し。	
	3	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山ロームを含むが、2層より少ない。しまり良し。	2層
第3層	4	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	地山ローム、白色サンド、木炭粒を少量含む。しまりかなり良し。	3層
第4層	5	暗褐色(10YR3/4)	シルト	しまり悪い。	
	6	暗褐色(10YR3/4)	シルト	焼土、木炭を多量に含む。	
第5層	7	黄褐色(10YR5/6)	シルト	地山ローム層。	
第6層	8	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山ロームを含む。しまり悪い。	4層
第7層	9	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山ロームを少量含む。しまりかなり良し。	
第8層	10	褐色(10YR4/4)	シルト	焼土、木炭粒を少量含む。しまり悪い。	
第9層	11	黄褐色(10YR5/6)	シルト	地山ローム、(住居跡壁焼土)	
貼り床	12	暗褐色(10YR3/4)	シルト	黄褐色(10YR5/6)粘土ブロックを多量に含む。	貼り床
	13	黒褐色(10YR3/3)	シルト	焼土、炭化物。	
第3号土壙		暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山ローム粒、木炭粒を少量含む。ややしまり悪い。	
撹乱		暗褐色(10YR3/4)	シルト		

第22図　第8号住居跡



第23図　第８住居跡出土遺物

〔床面〕　北側の一部は地山を床としているが、西側は地山の上に、東側は第11号住居跡床面の上に貼り床をして床としている。床面は南側にむかってわずかに傾斜している。

〔柱穴〕　ピットは検出されなかった。

〔周溝〕　認められない。

〔カマド〕　認められない。焼け面も認められなかった。

〔貯蔵穴状ピット〕　認められない。

〔出土遺物〕　本住居跡に伴うと考えられる遺物には、床面・カマド内・カマド側壁出土の土器がある。

土師器

坏（第23図１）　製作に際しロクロを使用している。体部は丸味を持って立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。内面はヘラミガキ、黒色処理が施されている。摩滅が激しいために内面のミガキの単位は不明である。底部には手持ちヘラケズリの再調整が施されている。

高台付坏（第23図２）　坏部の底部および高台部のみ残存している。高台部は「八」字状に開き、内外ともにナデ調整が施されている。坏底部の切り離し技法は、高台部接合の際のナデ調整のために不明である。

堆積土出土の遺物

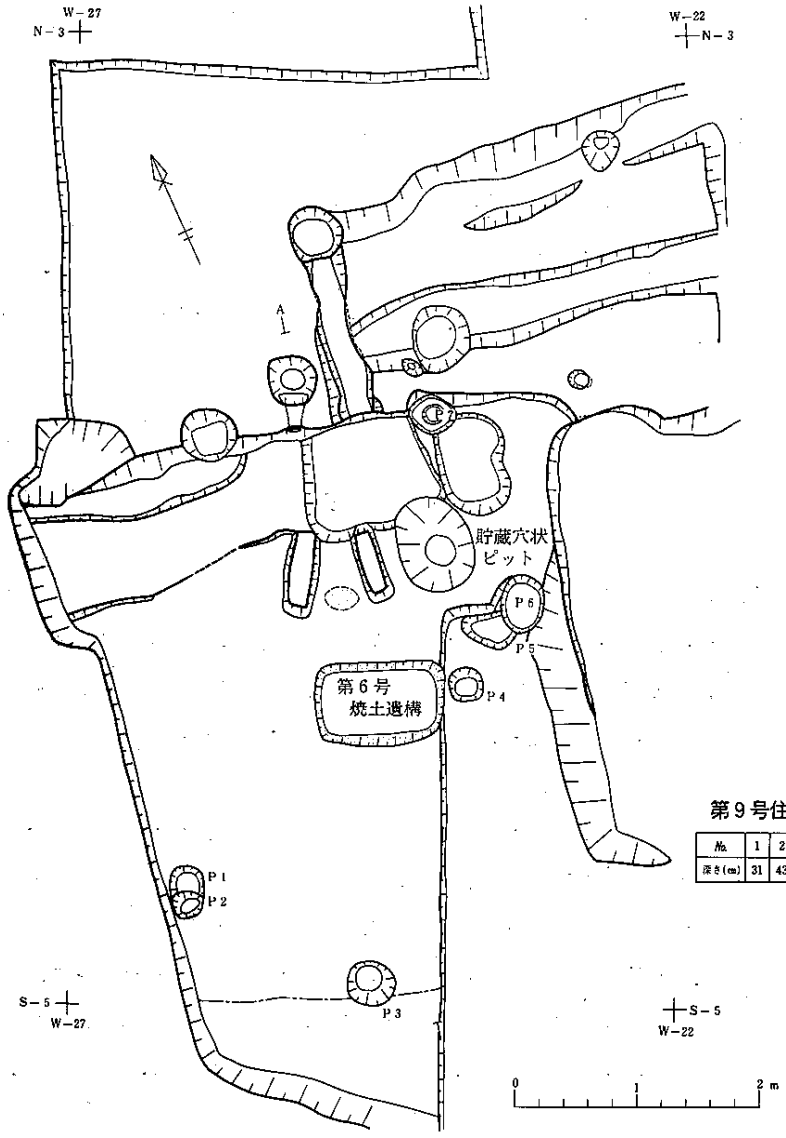
土師器

高台付坏（第23図３）　坏部の底部および高台部のみ残存している。坏部は、上半分が欠損している。高台部は短く外傾している。坏部内外面はヘラミガキ、高台部は内外面にナデ調整が施されている。全面に黒色処理が施されている。坏底部の切り離し技法は、高台部接合の際のナデ調整のために不明である。

第９号住居跡（第24図）

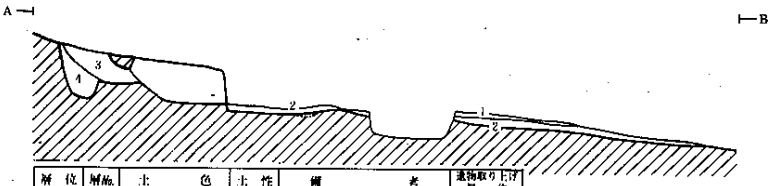
〔遺構の確認〕　調査区西側第７号住居跡貼り床下で確認された。

〔重複・増改築〕　第６号住居跡および第６号焼土遺構によって切られている。第７号住居跡は、



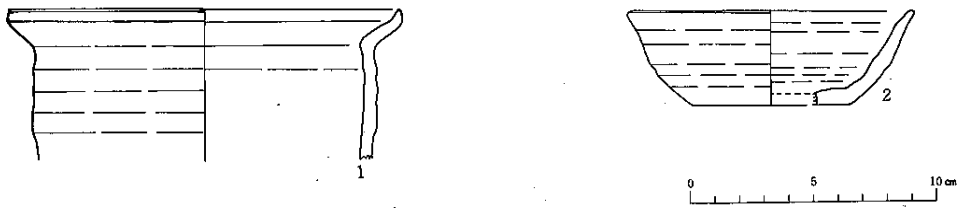
第9号住居跡ピット

No.	1	2	3	4	5	6	7
深さ(cm)	31	43	32	51	35	28	23



層位	層No.	土色	土性	備考	遺物取り上げ層位
貼り床	1	暗褐色(10YR3/4)	シルト	黄色粘土ブロック	貼り床
	2	黒褐色(10YR3/3)	シルト	焼土、炭化物、黄色粘土ブロック	
カマド内堆積土	3	暗褐色(10YR3/4)	シルト		カマド内
	4	黒褐色(10YR3/3)	シルト	焼土、炭化物	

第24図　第9号住居跡



第25図　第９号住居跡出土遺物

第９号住居跡が廃棄後、堆積土が流入する以前に構築されている。残存する北壁の輪郭が第７号住居跡と平行することから、第９号住居跡から第７号住居跡へ増改築された可能性が考えられる。

〔平面形・規模〕　残存する北壁の状況から方形を基調とする住居跡であると考えられる。規模は不明である。

〔堆積土〕　第７号住居跡の貼り床が、本住居跡の床面と接しており、堆積土は見られなかった。

〔壁〕　北壁の一部が残存している。地山をそのまま壁としており、残存壁高は約５㎝である。

〔床面〕　北壁沿いは地山をそのまま床としており、他の部分は基本層位第Ⅱ層上に黄褐色粘土を使用して貼り床を行なっている。全体に平坦で硬く、南側にわずかに傾斜している。

〔柱穴〕　住居跡内でピットは７個検出されているが、柱穴と考えられるものはない。

〔周溝〕　認められない。

〔カマド〕　北壁に付設されている。燃焼部と煙道部とからなる。燃焼部は天井がすでに失われており両側壁のみ残存する。平面形は「八」字状に開き、黄色粘土で構築されている。カマドの掘り方はない。燃焼部底面には、焼け面が見られた。西側壁内面及び煙道部内面も熱を受け赤変していた。煙道は、ほとんどが第７号住居跡構築の際に破壊されており残存しないが、わずかに煙り出しピットに接する部分に認められるだけであった。煙道は本来トンネル状に掘り抜かれていたと考えられる。煙道の長さは約1.2m、煙道先端には、径約40㎝の円形の煙り出しピットがある。煙り出しピットは、煙道底面よりも約10㎝低い。

〔貯蔵穴状ピット〕　カマド右脇で検出された。平面形は楕円形で、規模は長軸約80㎝、短軸約60㎝、深さ約20㎝である。内部には、炭化物および遺物を含んだ単一の層が堆積している。人為的に埋められた可能性が強い。

〔出土遺物〕　本住居跡に伴う遺物としては、床面および貯蔵穴出土の土器がある。

土師器

甕（第25図１）　製作に際しロクロを使用している。最大径は口縁部にある。頸部でくびれ口縁部は外傾している。端部は上方につまみ出され、狭い縁帯をつくり出している。

須恵器

坏（第25図２）　体部は丸味を帯びて立ち上がり、口縁部はわずかに外反している。底部は、手持ちヘラケズリの再調整のために切り離し技法は不明である。

第10号住居跡（第26図）

〔遺構の確認〕　調査区東側の地山面において確認された。

〔重複・増改築〕　認められない。

〔平面形・規模〕　住居跡、南壁及び東壁、西壁南半は削平のために失われているが、平面形は残存する壁の状況から方形を基調としていると考えられる。東西軸は約 3.5mの長さである。全体の規模は不明である。

〔堆積土〕　２層に分かれる。第１層は暗褐色シルト層で、壁沿いを除いて住居跡の床面上に堆積している。第２層は褐色シルト層で、壁沿いに堆積している。

〔壁〕　北壁と東西壁の北部に残存している。地山をそのまま壁としている。壁高は、最も保存の良好な北壁で約30㎝である。東・西壁は、南側に行くに従ってその高さを減じている。壁の立ち上がりは急である。

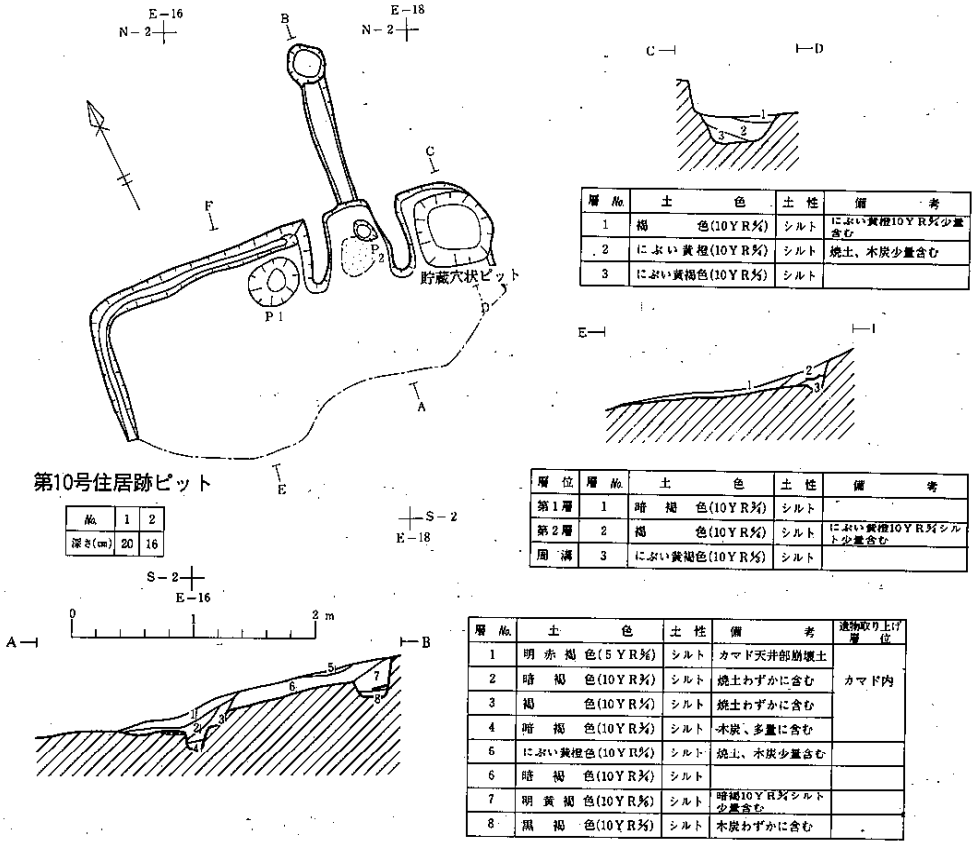
〔床面〕　地山をそのまま床としており、わずかに南側にかけて傾斜している。全体的に平担で堅い。

〔柱穴〕　カマドの西側でピットが検出されたが、柱痕跡や掘り方が認められず、本住居跡の柱穴については不明である。

〔周溝〕　北壁と西壁沿いに認められた。北壁沿いのものはカマド西側にのみ認められた。周溝は幅約 15㎝、深さ約 10㎝で、断面形は「U」字形である。

〔カマド〕　北壁の東寄りの部分に位置しており、燃焼部と煙道部とからなる。燃焼部天井はすでに崩落してない。燃焼部両側壁は、地山を削り出して構築されている。底面は、奥壁側から前方にわずかに傾斜している。また、底面には焼け面が見られた。両側壁内側も、熱を受け赤化していた。底面の中央からやや右側壁に寄ったところに径約 16㎝、深さ約 16㎝の円形のピットが検出された。このピットは、支脚の掘り方であるかどうかは不明である。燃焼部奥壁は住居跡北壁をそのまま使用している。燃焼部底面から約 15㎝の高さをもって煙道に移行する。煙道は、溝状になっていたが、本来は、トンネル状に掘り抜かれていたものと考えられる。規模は長さ約1.0m、幅約20㎝であり、燃焼部に向って傾斜している。煙道の先端には径約30㎝の円形の煙り出しピットがある。ピットの底面は、煙道の底面より約 10㎝低い。

〔貯蔵穴状ピット〕　住居跡北東隅、カマド右脇において検出された。平面形は円形で、規模は径約 60㎝、深さ約 30㎝である。堆積土及び底面から土師器坏・嚢・赤焼土器坏が出土している。



層No.	土色	土性	備考
1	褐色(10YR4/4)	シルト	にぶい黄橙10YR6/4少量含む
2	にぶい黄橙(10YR6/4)	シルト	焼土、木炭少量含む
3	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	

層位	層No.	土色	土性	備考
第1層	1	暗褐色(10YR3/4)	シルト	
第2層	2	褐色(10YR4/4)	シルト	にぶい黄橙10YR6/4シルト少量含む
周溝	3	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	

No.	1	2
深さ(cm)	20	16

層No.	土色	土性	備考	遺物取り上げ層位
1	明赤褐色(5YR5/6)	シルト	カマド天井部崩壊土	カマド内
2	暗褐色(10YR3/4)	シルト	焼土わずかに含む	
3	褐色(10YR4/4)	シルト	焼土わずかに含む	
4	暗褐色(10YR3/4)	シルト	木炭、多量に含む	
5	にぶい黄橙色(10YR6/4)	シルト	焼土、木炭少量含む	
6	暗褐色(10YR3/4)	シルト		
7	明黄褐色(10YR6/6)	シルト	暗褐10YR3/4シルト少量含む	
8	黒褐色(10YR3/4)	シルト	木炭わずかに含む	

第26図　第10号住居跡

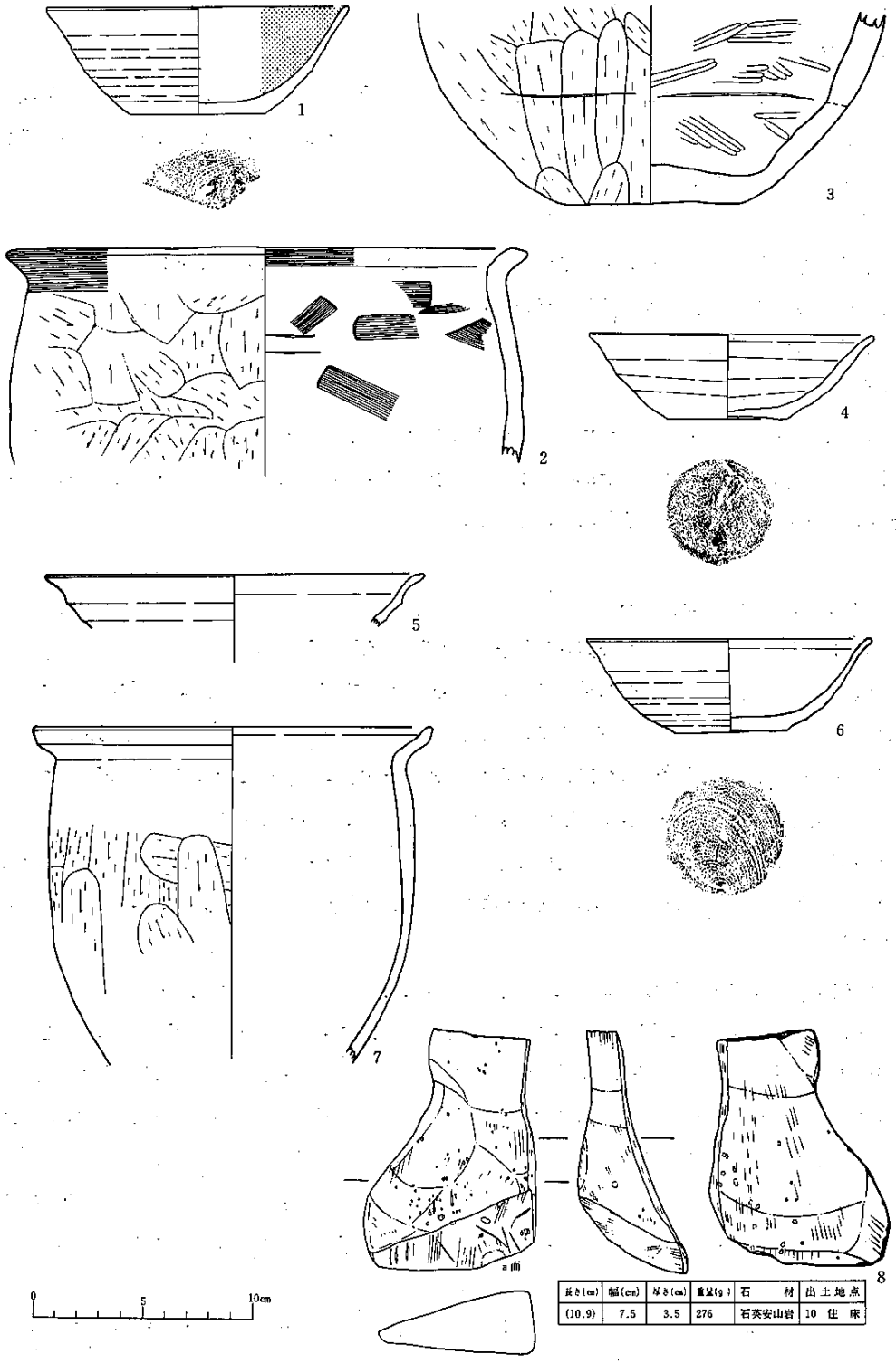
また、カマド左側に径約45cm、深さ約20cmの円形ピットが検出された。ピットの性格については不明である。

〔出土遺物〕　本住居跡に伴う遺物としては、床面出土の土器及び石製品、ピット内・貯蔵内・カマド内出土の土器がある。

土師器

坏（第27図１）体部は丸味を持って立ち上がり、口縁部まで直線的に外傾する。内面はヘラミガキ、黒色処理が施されている。内面器面調整は摩滅が激しくヘラミガキの単位は不明である。底部切り離し技法は、回転糸切りである。

甕　体部上半のみ残存するもの（第27図２）、体部下半のみ残存するもの（第27図３）とがある。前者は、最大径が口縁部にある。口縁部は、外反して短い。端部は比較的厚く、丸くおさまっている。器面調整は、口縁部内外ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ、内面はヘラナデが施されている。後者は、体部下半のみ残存している。体部は、球形に脹らむと考えられる。器面調整は、体部外面はヘラケズリ、内面にはヘラミガキが施されている。底部にはヘラケズリが



長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石　材	出土地点
(10.9)	7.5	3.5	276	石英安山岩	10　住　床

第27図　第10号住居跡出土遺物

施されている。

赤焼土器

坏　いずれも製作に際しロクロを使用しており、再調整はない。体部は丸味を持って立ち上がり、口縁部でわずかに外反している（第27図４～６）。４・６は、底部切り離し技法が回転糸切りである。５の底部は、欠損してない。

石製品

砥石（第27図８）　一部欠損している。全面に使用痕が認められる。a面にはところどころ刃の当たりによると思われる凹凸が認められる。

堆積土出土遺物

土師器

甕（第27図７）　製作に際しロクロを使用している。最大径の位置は口縁部にあり、口縁部はゆるやかに外反している。端部は、上方につまみ出され狭い縁帯をつくり出している。体部外面には縦方向のヘラケズリが施されている。

第11号住居跡（第28図）

〔遺構の確認〕　調査区北側の第８号住居跡貼床下で確認された。

〔重複・増改築〕　第４号住居跡、第８号住居跡によって切られている。第８号住居跡は、第11号住居跡廃棄後、堆積土が流入する以前に構築されている。第８号住居跡の壁と貼り床の状況から、第８号住居跡東壁は第11号住居跡の東壁と一致する。このことから第11号住居跡から第８号住居跡へと増改築された可能性が考えられる。また、溝２本が住居跡を切っている。

〔平面形・規模〕　南壁が長く、北壁が短い隅丸の台形である。長軸は約3.4m、短軸は約2.6mである。西壁中央において約50cm×60cmの規模で地山が住居跡内に入り込んでいる。性格は不明である。

〔堆積土〕　第８号住居跡の貼り床が本住居跡の床面と接しており堆積土は見られなかった。

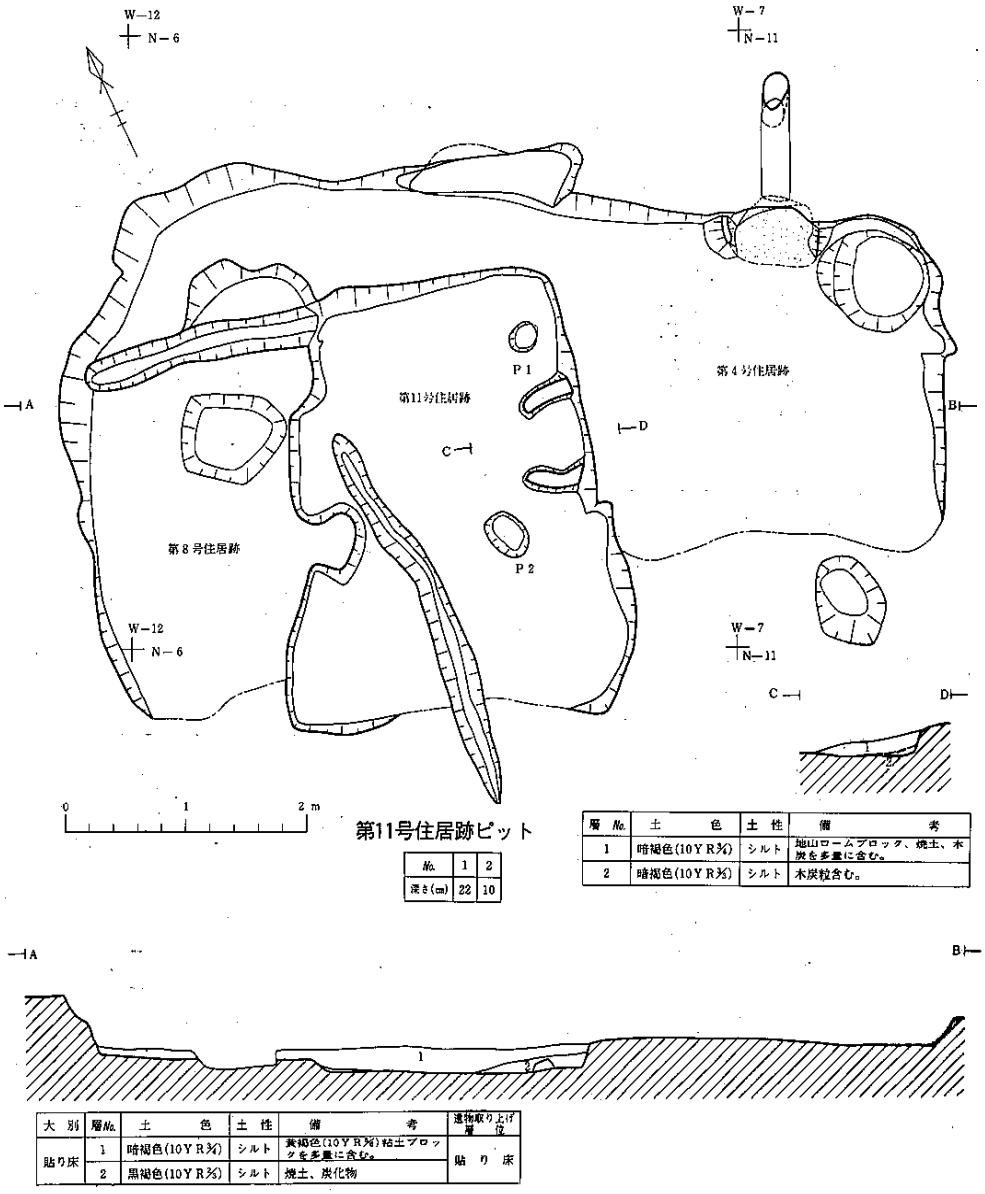
〔壁〕　地山をそのまま壁としている。８号住居跡構築の際に壁の大半が壊されており遺存状態は悪い。最も保存の良好なところで壁高が約25cmである。壁の立ちあがりは緩やかである。

〔床面〕　地山をそのまま床としている。住居跡南側がわずかに低くなっており、全体的に南側にわずかに傾斜している。

〔柱穴〕　住居跡内からピットが２個検出されている。ピット１とピット２からは柱痕が確認されなかった。柱穴として認められるものはなく、本住居跡の柱穴については不明である。

〔周溝〕　認められない。

〔カマド〕　住居跡東壁の中央からやや北側寄りの部分に付設されている。燃焼部のみ残存して

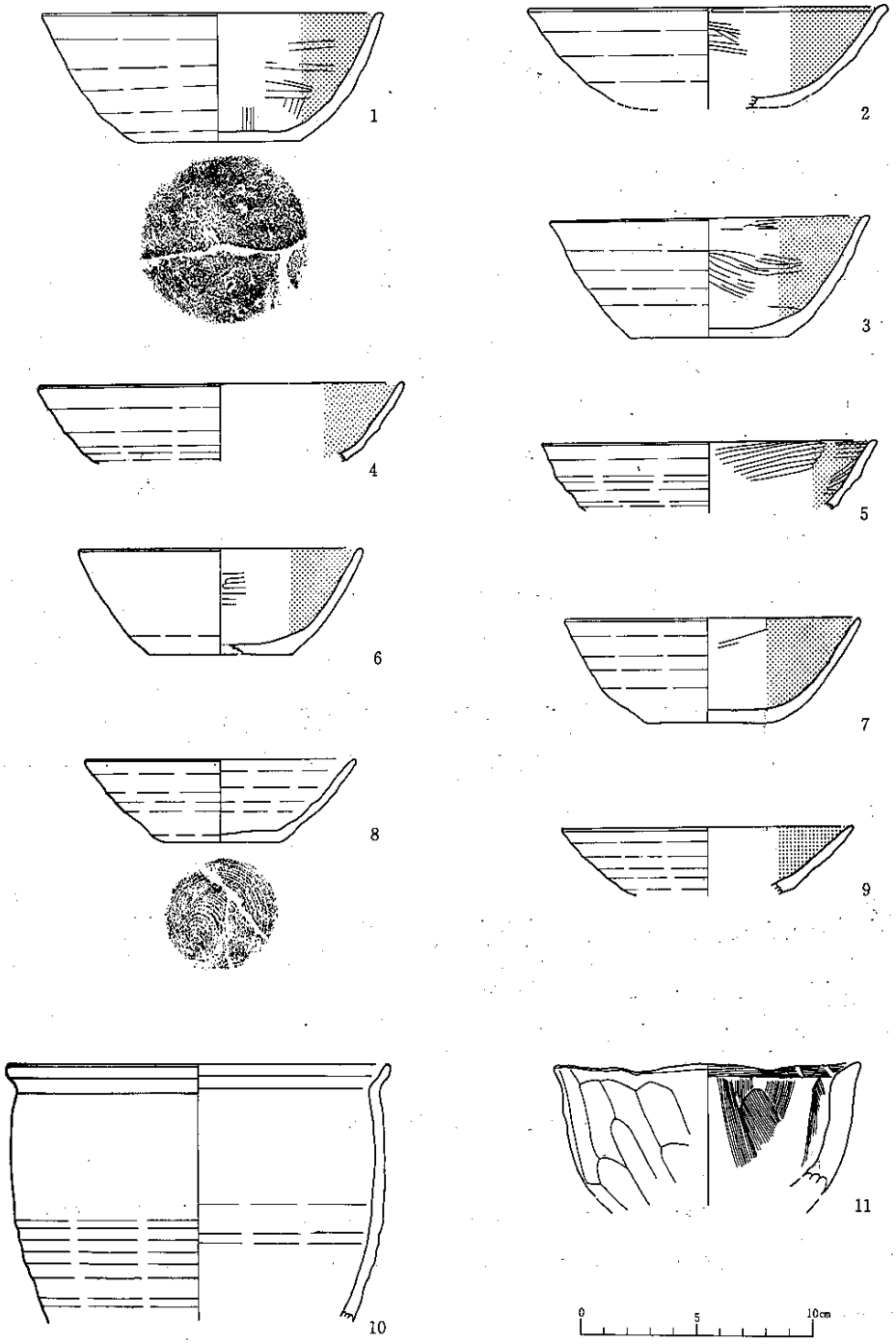


第28図　第11号住居跡

ており、側壁は白色の粘土によって構築されている。燃焼部天井は、すでにない。燃焼部底面には、焼け面が見られなかったが、両側壁はかなり熱を受けており赤化していた。カマドの掘り方はない。

〔貯蔵穴状ピット〕　認められない。

〔出土遺物〕　本住居跡に伴う出土遺物としては、床面出土の土器がある。



第29図　第11号住居跡出土遺物

土師器

坏　いずれも製作に際しロクロを使用している。体部は丸味を持って立ち上がり、口縁部でわずかに外反するもの（第29図１～３）、底部から口縁部まで直線的に外傾するもの（第29図４～８）とがある。いずれも内面はヘラミガキ、黒色処理が施されている。底部切り離し技法は、回転糸切りによるもの（第29図７）、手持ちヘラケズリによって不明のもの（第29図１・３）、摩滅のため不明のもの（第29図６）などがある。２・４・５・９は、底部が欠損している。

甕　製作に際しロクロを使用しているもの（第29図10）とロクロを使用しないもの（第29図11）とがある。前者は、頸部でわずかにくびれ口縁部で外反し、端部は上方につまみ出され狭い縁帯を作っている。最大径の位置は、口縁部にある。再調整は認められない。後者は、厚手の土器であり、最大径の位置は口縁部にある。口縁部はわずかに外反している。底部は欠損してない。外面には指頭によるオサエの痕跡が見られる。内面は、口縁部は横方向のナデ調整、体部は縦方向のナデ調整が施されている。

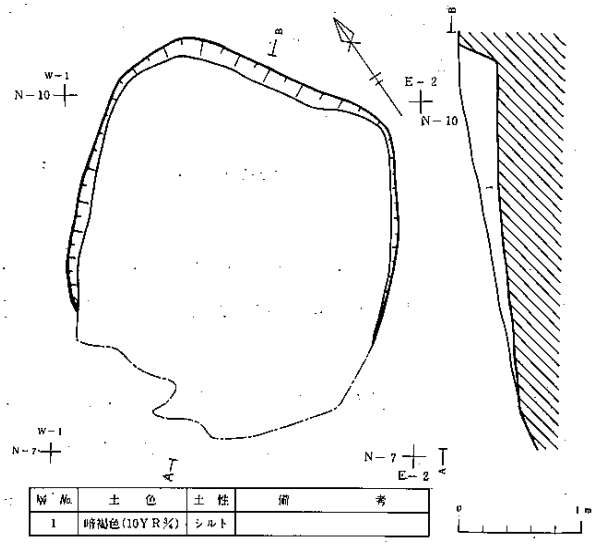
赤焼土器

坏（第29図８）　底部から口縁部にかけて外傾している。回転糸切りの底部である。

３．竪穴遺構とその出土遺物

第１号竪穴遺構（第30図）

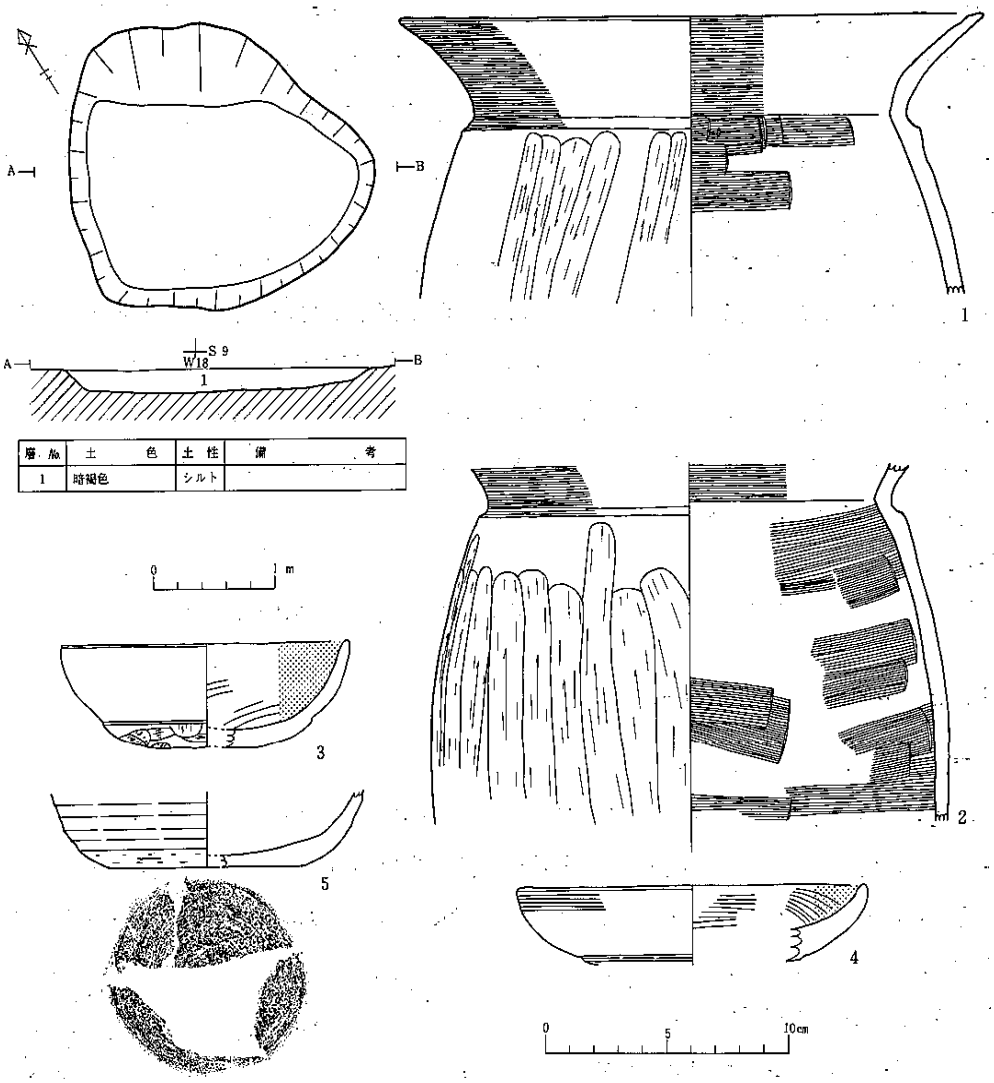
調査区北側、第４号住居跡東側地山面において確認された。南壁及び東壁・西壁の南側は削平のために失われている。平面形は、北壁及び東壁、西壁の状況から方形を基調とするものと考えられる。東西軸は約2.7mである。底面及び壁は地山をそのまま使用している。床面は平坦で、壁の立ち上がりは急である。最も遺存状態の良い北壁で壁高は約40cmである。堆積土は１層のみで出土遺物はない。



第30図　第１号竪穴遺構

第２号竪穴遺構（第31図）

調査区西側、第５号住居跡南側の基本層位第Ⅱ層上面で確認された。平面形は不正楕円形で、長軸約2.5m、短軸約 2.2mである。底面及び壁は、基本層位第Ⅱ層をそのまま使用している。壁は、北壁では緩やかな立ち上がりで、



層・No.	土　色	土 性	備　考
1	暗褐色	シルト	

第31図　第２号竪穴遺構及び出土遺物

その他の壁は急な立ち上がりを示している。底面は平坦で堅い。堆積土は１層のみで暗褐色の土層である。出土遺物は、底面出土の土師器甕・堆積土出土の土師器坏・須恵器坏がある。

土師器

甕　いずれも製作に際しロクロを使用していないもので、口縁部のあるもの（第31図１）口縁部欠損して無いもの（第31図２）とがある。前者は、最大径の位置は口縁部にある。前者も後者も頸部には段が巡り、口縁部内外にヨコナデ、体部外面がヘラケズリ、内面にはヘラナデが施されている。

堆積土出土遺物

土師器

坏　いずれも製作に際しロクロを使用していない。体部外面に段が巡るもの（第31図３）、沈線が巡るもの（第31図４）とがある。前者は、段の上半分の器面調整は摩滅のため不明であり、段の下半分はヘラケズリが施されている。後者は、沈線の上半分がヘラミガキ、下半分はヘラケズリが施されている。いずれも、内面にはヘラミガキ、黒色処理が施されている。

須恵器

坏（第31図５）　口縁部は欠損している。体部下半から底部にかけて回転ヘラケズリの再調整が施されている。底部切り離し技法は、再調整のために不明である。

４．焼土遺構とその出土遺物

第１号焼土遺構（第32図）

調査区南側の地山面において確認された。平面形は楕円形で長軸約1.0m、短軸約0.9m、深さは約20㎝である。底面は平坦であり、南側にわずかに傾斜している。壁は、北側では急な立ち上がりで、南側では緩やかな立ち上がりである。北壁のみに焼け面が見られた。堆積土は、３層に分かれる。１・２層には木炭が含まれている。出土遺物はない。

第２号焼土遺構（第32図）

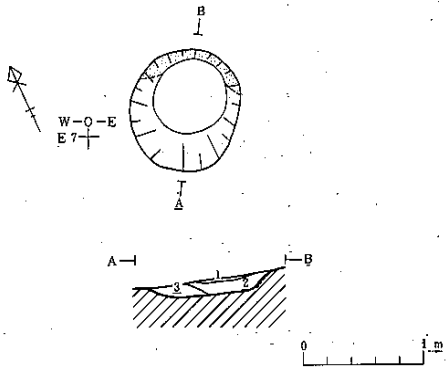
調査区中央、基本層位第Ⅱ層上面において確認された。平面形は長軸約90㎝、短軸約80㎝の楕円形で、深さは約20㎝である。底面は、南側にわずかに傾斜している。壁は、急な立ち上がりを示している。北壁のみに焼け面が見られる。堆積土は、３層に分かれる。１層には焼土、２・３層には焼土・木炭が多量に含まれていた。遺物は、堆積土出土の土師器甕がある。

土師器

甕　製作の際にロクロを使用していない。頸部でくびれ、口縁部はゆるやかに外反している。最大径の位置は口縁部にある。器面調整は、口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は縦方向のヘラケズリ、内面は摩滅が激しく不明である。内面には、粘土の積み上げ痕が明瞭に残っている。

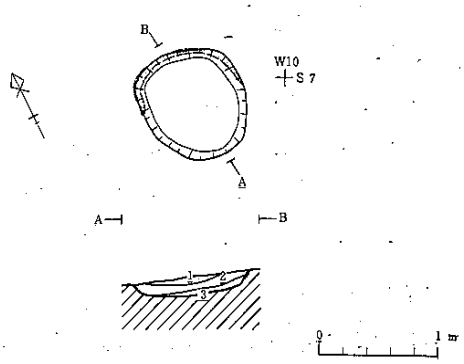
第３号焼土遺構（第32図）

調査区中央、第２焼土遺構と第３焼土遺構の間の基本層位第Ⅱ層上面で確認された。平面形は円形で、径約80㎝、深さは約15㎝である。底面は平坦であり、壁の立ち上がりは急である。北東の壁にのみ焼け面が見られる。堆積土は、１層のみであり、焼土・木炭が多量に含まれてい

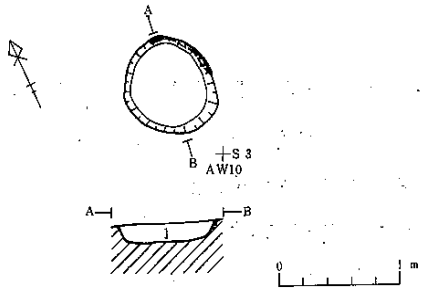


層 No.	土　色	土 性	備　考
1	暗褐色(10YR3/4)	シルト	木炭含む
2	暗褐色(10YR3/4)	シルト	木炭含む
3	黒褐色(10YR2/4)	シルト	

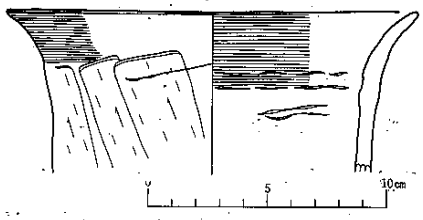
第1号焼土遺構



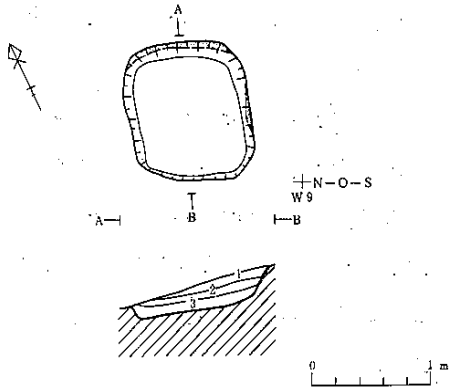
層 No.	土　色	土 性	備　考
1	黒褐色(10YR2/4)	シルト	焼土含む
2	暗褐色(7.5YR3/4)	シルト	焼土、木炭多く含む
3	黒褐色(7.5YR2/4)	シルト	焼土、木炭多く含む



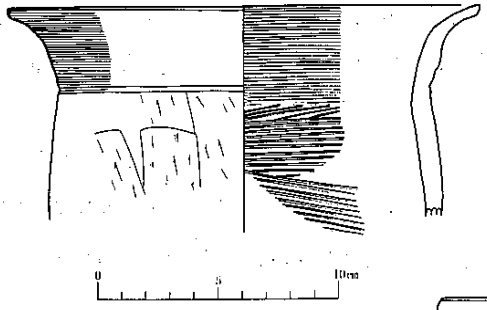
層 No.	土　色	土 性	備　考
1	黒褐色(10YR2/4)	シルト	焼土、木炭多く含む



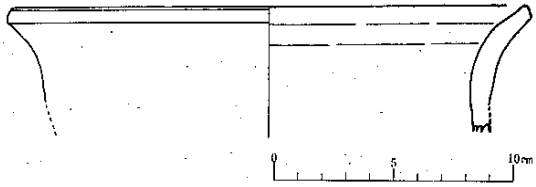
第2号焼土遺構及び出土遺物



層 No.	土　色	土 性	備　考
1	黒褐色(10YR2/4)	シルト	
2	黒褐色(10YR2/4)	シルト	焼土含む　2層の上面と下面（層理面に本炭）
3	黒褐色(10YR2/4)	シルク	焼土、木炭多く含む



第3号焼土遺構及び出土遺物



第32図　焼土遺構（Ⅰ）　　第4号焼土遺構及び出土遺物

る。遺物は、堆積土出土の土師器甕がある。

土師器

甕　製作の際にロクロを使用していない。頸部に段が巡っており、口縁部は緩やかに外反する。最大径の位置は、口縁部にある。器面調整は、口縁部内外ともヨコナデ、体部外面は縦方向のヘラケズリ、内面は刷毛目が施されている。

第４号焼土遺構（第32図）

調査区中央第５号住居跡東側、基本層位第Ⅱ層上面で確認された。平面形は正方形で軸長約1.0m、深さは約30㎝である。底面は南側にかけて傾斜している。壁の立ち上がりは、急である。北壁及び東壁の一部に焼け面が見られる。堆積土は、３層に分かれる。２・３層には、焼土・木炭が多量に含まれている。遺物は堆積土出土の土師器甕がある。

土師器

甕　製作の際にロクロを使用している。頸部から口縁部にかけてのみ残存している。口縁部はゆるやかに外反し、端部は上方につまみ出されて狭い縁帯をつくり出している。

第５号焼土遺構（第33図）

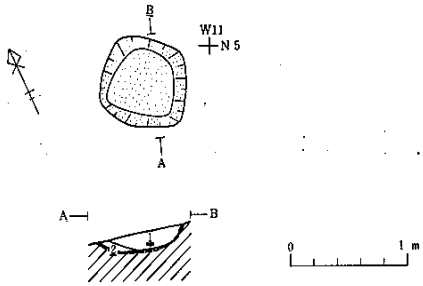
調査区中央、第８号、第11 号住居跡の南側の地山面で確認された。平面形はほぼ正方形で軸長約0.74m、深さは約20㎝である。底面は南側にかけてわずかに傾斜している。壁は、比較的緩やかに立ち上がっている。底部及び壁面全面に焼け面が見られる。堆積土は、２層に分けられる。１層には木炭、２層には木炭・焼土が含まれている。遺物は、堆積土出土の土器坏がある。

土師器

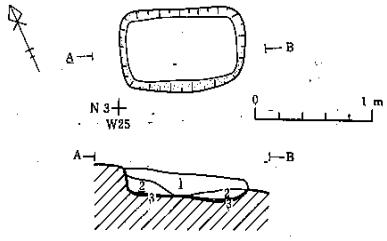
坏　製作の際にロクロを使用していない。底部は丸底で、体部は丸味をもって立ち上がり口縁部で内弯気味になる。器面調整は、外面ヘラケズリのちヘラミガキ、内面にはヘラミガキ、黒色処理が施されている。

第６号焼土遺構（第33図）

調査区西側、第７号住居跡の中央部堆積土上面で確認された。第７号住居跡、第９号住居跡を切っている。平面形は長方形で、長軸約1.1m、短軸約0.7m、深さ約20㎝である。底面わずかに東側に傾斜している。壁は急な立ち上がりである。底面を除いて壁面全面に焼け面が見られる。堆積土は、３層に分かれ、２層には、焼土・木炭・黄褐色粘土が多量に含まれている。３層は、木炭の層である。遺物は、土師器の甕の破片が堆積土から出土している。図示できる

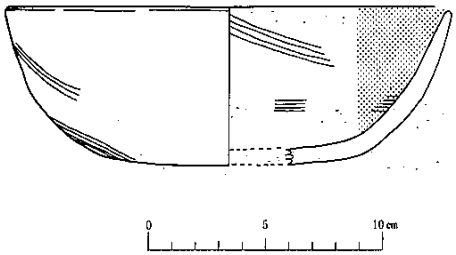


層位	土色	土性	備考
1	暗褐色(10YR3/4)	シルク	木炭含む
2	暗褐色(7.5YR3/4)	シルク	焼土木炭含む

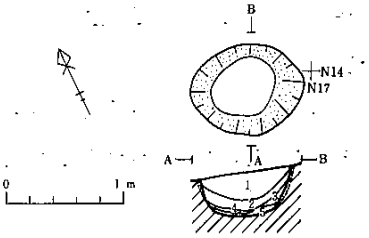


層位	土色	土性	備考
1	暗褐色(10YR3/4)	シルト	
2	暗褐色(10YR3/4)	シルト	焼土、炭化物、黄色粘土、多量に含む。
3			炭化物の層である。

第6号焼土遺構

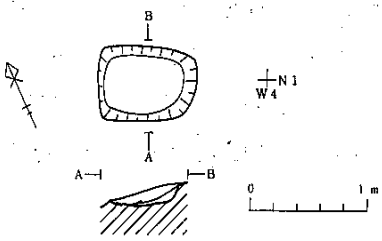


第5号焼土遺構及び出土遺物

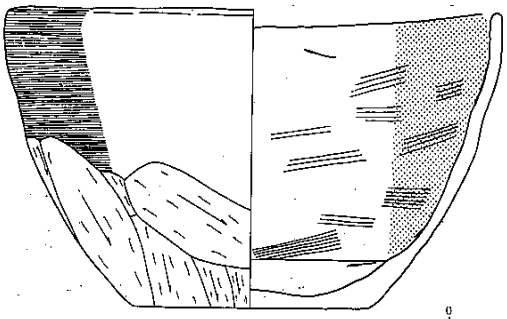


層位	土色	土性	備考
1	褐色(10YR4/4)	シルト	木炭粒、焼土粒わずか含む。竹の根によって一部攪乱、しまりよし
2	黒色(10YR3/1)	シルト	木炭層
3	明赤褐色(5YR5/6)	シルト	焼土層
4	黄褐色(10YR5/6)	シルト	地山ロームの流れこみ
5	黒色(10YR2/1)	シルト	木炭層

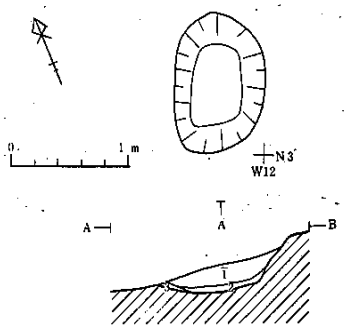
第7号焼土遺構



層位	土色	土性	備考
1	暗褐色(10YR3/4)	砂質シルト	
2	黒褐色(10YR3/1)	シルト	焼土(木炭若干)含む

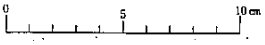


第8号焼土遺構及び出土遺物



層位	土色	土性	備考
1	暗褐色(10YR3/4)	シルト	木炭粒わずか地山ローム塊わずか含む
2	暗褐色(10YR3/4)	シルト	焼土、木炭多量に含む
3	黒褐色(10YR3/1)	シルク	地山ローム多量に含む

第9号焼土遺構



第33図焼土遺構（Ⅱ）

ものはない。

第７号焼土遺構（第33図）

調査区北側、第３号住居跡北西部地山面において確認された。平面形は楕円形で、長軸約1.0m、短軸約0.74m、深さは約38㎝である。底面は、凹凸があり、中央がわずかに低まっている。壁は、ほぼ垂直に立ち上がっている。底面を除いて、壁面全面に焼け面が見られる。堆積土は、５層に分けられる。２、５層は、木炭層である。出土遺物はない。

第８号焼土遺構（第33図）

調査区中央、第４号住居跡南東の基本層位第Ⅱ層上面で確認された。平面形は長方形で、長軸約0.84m、短軸約0.6m、深さは約24㎝である。底面は平坦である。壁の立ち上がりは急である。壁にはわずかに焼け面が見られた。堆積土は、２層に分けられる。２層は、焼土・木炭を含んでいる。遺物は、堆積土から土師器甕が出土している。

土師器

甕　製作の際にロクロを使用していない。底部は平底で、体部は丸味を持って立ち上がり、口縁部で内弯気味になる。口縁部から体部にかけてヨコナデ、その後に体部から底部にかけてヘラケズリが施されている。内面は、ヘラミガキ、黒色処理が施されている。

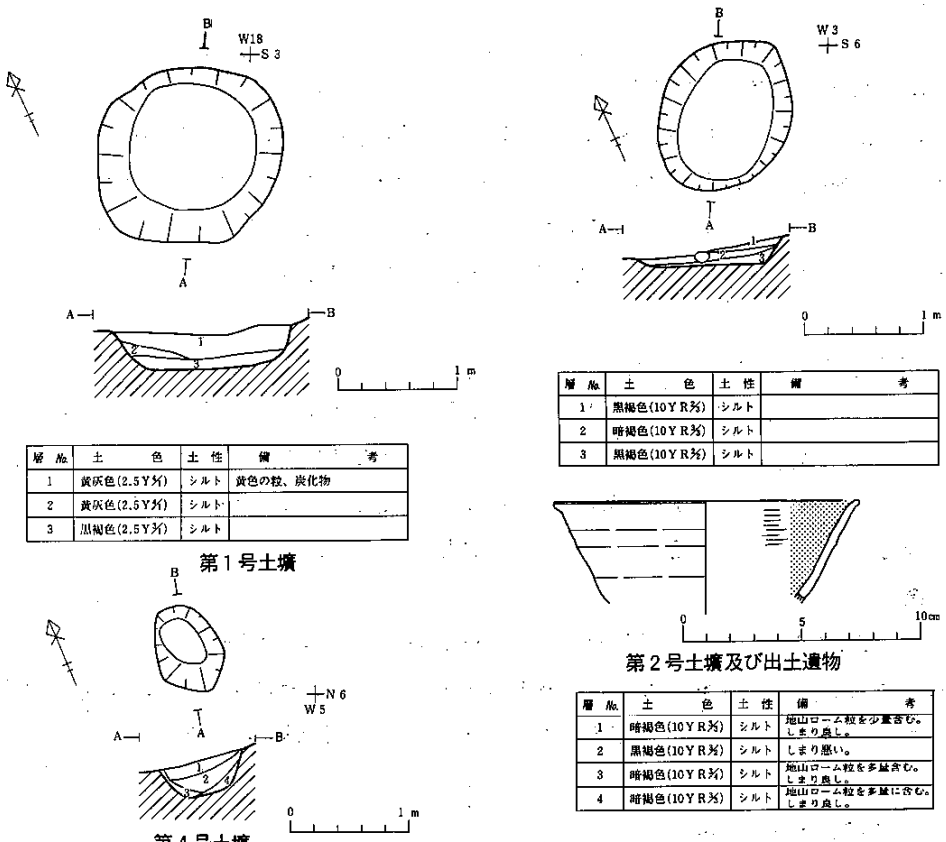
第９号焼土遺構（第33図）

調査区中央、第５号焼土遺構南西の地山面において確認された。平面形は不正楕円形で、長軸約1.1m、短軸約0.8m、深さ約20㎝である。底面は南側へわずかに傾斜している。北壁は立ち上がりは急であるが南壁は緩やかである。壁にはわずかに焼け面が見られた。堆積土は、３層に分けられる。２層に焼土・木炭が多量に含まれている。出土遺物はない。

５．土壙とその出土遺物

第１号土壙（第12・34図）

調査区西側の第５号住居跡貼り床下において確認された。平面形は円形で、径約1.5m、深さは約30㎝である。底面はほぼ平坦である。壁の立ち上りは緩やかである。堆積土は３層に分けられる。１層には炭化物が含まれていた。遺物は、堆積土中から土師器坏・甕が出土している。図示できるものはない。



層 No.	土　色	土 性	備　考
1	黄灰色(2.5Y4/1)	シルト	黄色の粒、炭化物
2	黄灰色(2.5Y4/1)	シルト	
3	黒褐色(2.5Y3/1)	シルト	

第１号土壙

層 No.	土　色	土 性	備　考
1	黒褐色(10YR3/1)	シルト	
2	暗褐色(10YR3/1)	シルト	
3	黒褐色(10YR3/1)	シルト	

第２号土壙及び出土遺物

層 No.	土　色	土 性	備　考
1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山ローム粒を少量含む。しまり良し。
2	黒褐色(10YR3/1)	シルト	しまり悪い。
3	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山ローム粒を多量含む。しまり良し。
4	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山ローム粒を多量に含む。しまり良し。

第４号土壙

第34図　土　壙

第２号土壙（第34図）

調査区中央の井戸西脇の基本層位第Ⅱ層上面において確認された。平面形は楕円形で、長軸約1.4m、短軸約1.1m、深さ約20cmである。底面は平坦で、壁の立ち上がりは緩やかである。堆積土は３層に分かれる。遺物は、堆積土から土師器坏が出土している。２層中に径約20cmの礫が入っている。

土師器

坏　製作の際にロクロを使用している。底部は欠損している。口縁部は、わずかに外反している。内面はヘラミガキ、黒色処理が施されている。

第３号土壙（第22図）

調査区中央、第８号住居跡堆積土中において確認された。第８号住居跡を切っている。平面形は略方形であり軸長は約1.0mである。底面は平坦で堅い。壁は、西壁途中において段が見

られるが、その他の壁はほぼ直線的に立ち上がっている。堆積土は１層のみで、出土遺物はない。

第４号土壙（第34図）

調査区中央、第４号住居跡南側の地山面で確認された。平面形は楕円形で、長軸約 80 ㎝、短軸約 60 ㎝、深さ約 20 ㎝である。底面は、わずかに南側に傾斜している。壁の立ち上がりはある。堆積土は、４層に分かれる。出土遺物はない。

６．井戸跡とその出土遺物（第35図）

調査区中央、第２号土壙東脇の基本層位第Ⅱ層上面において確認された。井戸とそれに続く堀状の遺構とからなる。井戸の平面形は楕円形で、長軸約 2.8m、短軸約 1.6m、深さ約 1.2mである。堀状遺構は、長さ約5.2m、幅約0.8m、深さ約60 ㎝で、南側は削平によって切られている。井戸の断面図は湧水のために作成することは出来なかった。出土遺物には、堆積土出土の土師器坏・甕・須恵器坏甕、赤焼土器坏などがある。また井戸西脇に井戸に、接続している落ち込みが見られ、堆積土から土師器坏・須恵器坏が出土している。

土師器

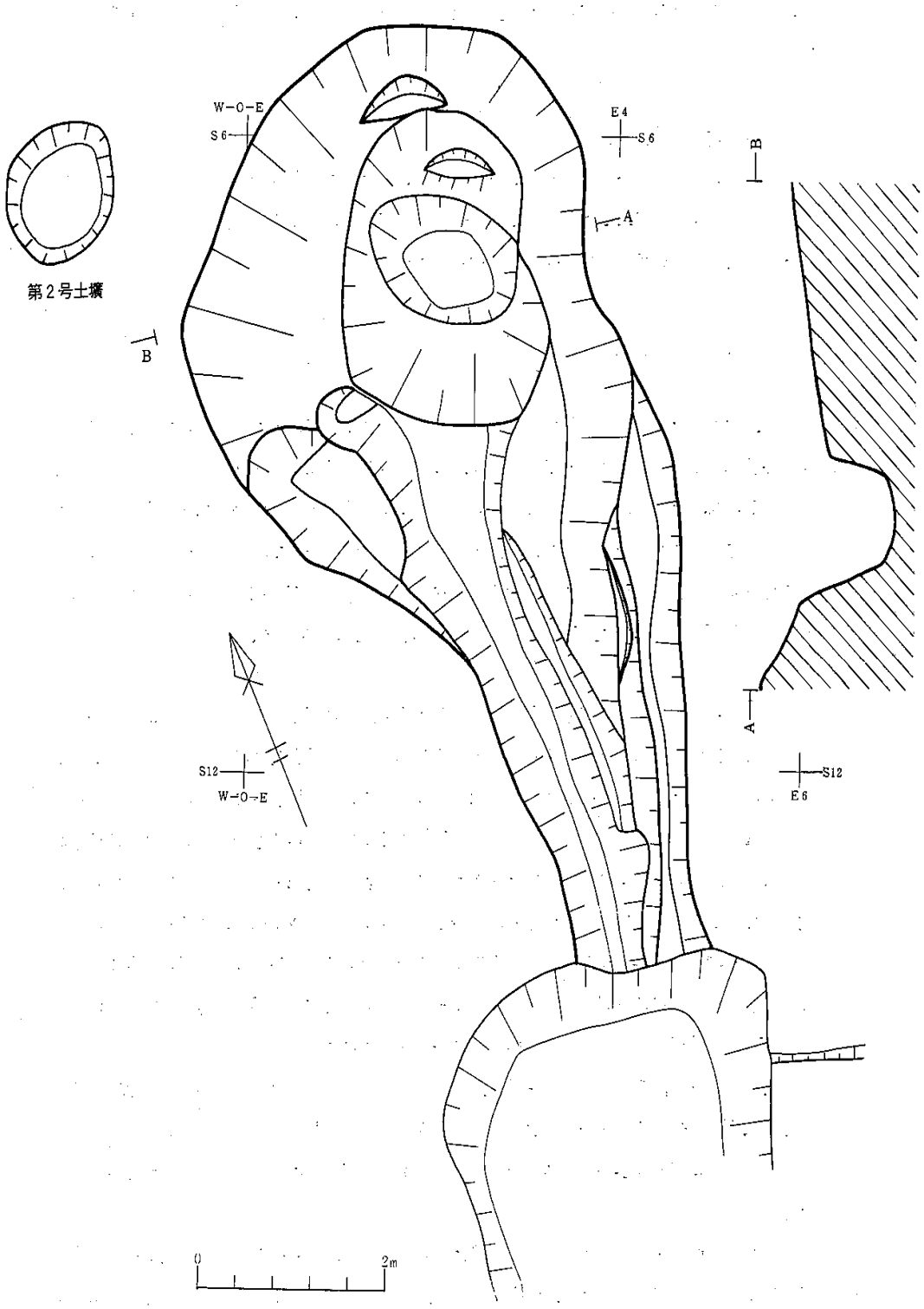
坏　製作に際しロクロを使用しないもの（第36図１）と使用しているもの（第36図２～３）とがある。前者は、口縁部が欠損している平底の坏である。器面調整は、外面が口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてヘラケズリ、内面にはヘラミガキ、黒色処理が施されている。後者には、底部を除いた外面全面にヘラミガキ、黒色処理を施しているもの（第36図２）、体部下端から底部周縁にかけて手持ヘラケズリが施されているもの（第36図３）とがある。いずれも、内面にはヘラミガキ、黒色処理が施されており、底部切り離し技法は回転糸切りである。

甕（第36図４）　製作に際しロクロを使用しないものである。口径より器高が大きく、最大径の位置は口縁部にある。頸部でくびれ、口縁部は強く外反する。器面調整は、口縁部内外ヨコナデ、体部外面がヘラケズリ、内面には刷毛目が施されている。

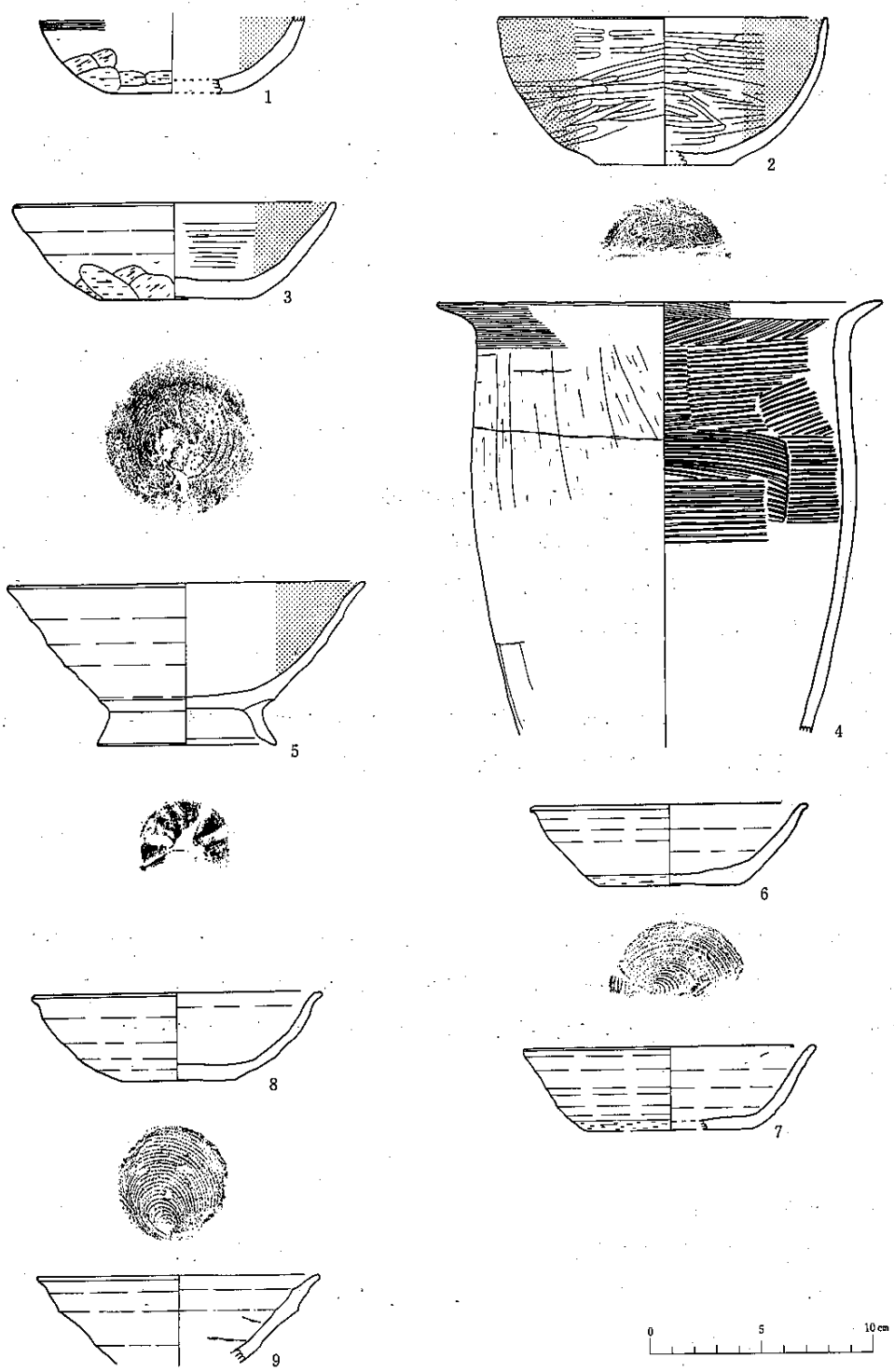
高台付坏（第36図５）　坏部と坏部に比して低い高台部とからなる。坏体部は、丸味を持って立ち上がり口縁部でわずかに外反する。高台部は「八」字状に開き、短い。高台部接合の際の調整のために坏部底部の切り離し技法は不明である。底部には放射状ナデつけが見られる。

須恵器

坏　底部に回転糸切り痕のあるもの（第36図６）、体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリの再調整が施されているために底部切り離し技法が不明なもの（第36図７）、底部欠損のため切り



第35図　井戸跡

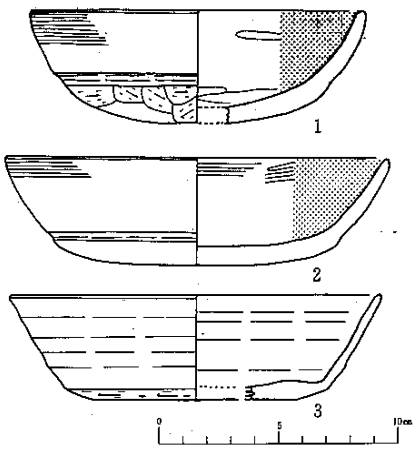


第36図　井戸跡出土遺物

離し技法が不明なもの（第36図９）とがある。６は、体部下端に回転ヘラケズリが施されている。

赤焼土器

坏（第36図８）　製作の際にロクロを使用し、底部切り離しが回転糸切りのもので再調整がないものである。体部は丸味を持って立ち上り、口縁部でわずかに外反する。



第37図　井戸附近落ち込み出土遺物

井戸附近落ち込み出土遺物

土師器

坏　いずれも製作の際にロクロを使用していない。口縁部は内弯気味になり、体部外面には沈線が巡っている。沈線の位置は、体部中央にあるもの（第37図１）、底部近くにあるもの（第37図２）とがある。いずれも沈線から上半分は、口縁部がヨコナデ、体部がヘラケズリ、下半分にはヘラケズリが施されている。摩滅のために単位の不明な箇所が多い。内面はヘラミガキ、黒色処理が施されている。

須恵器

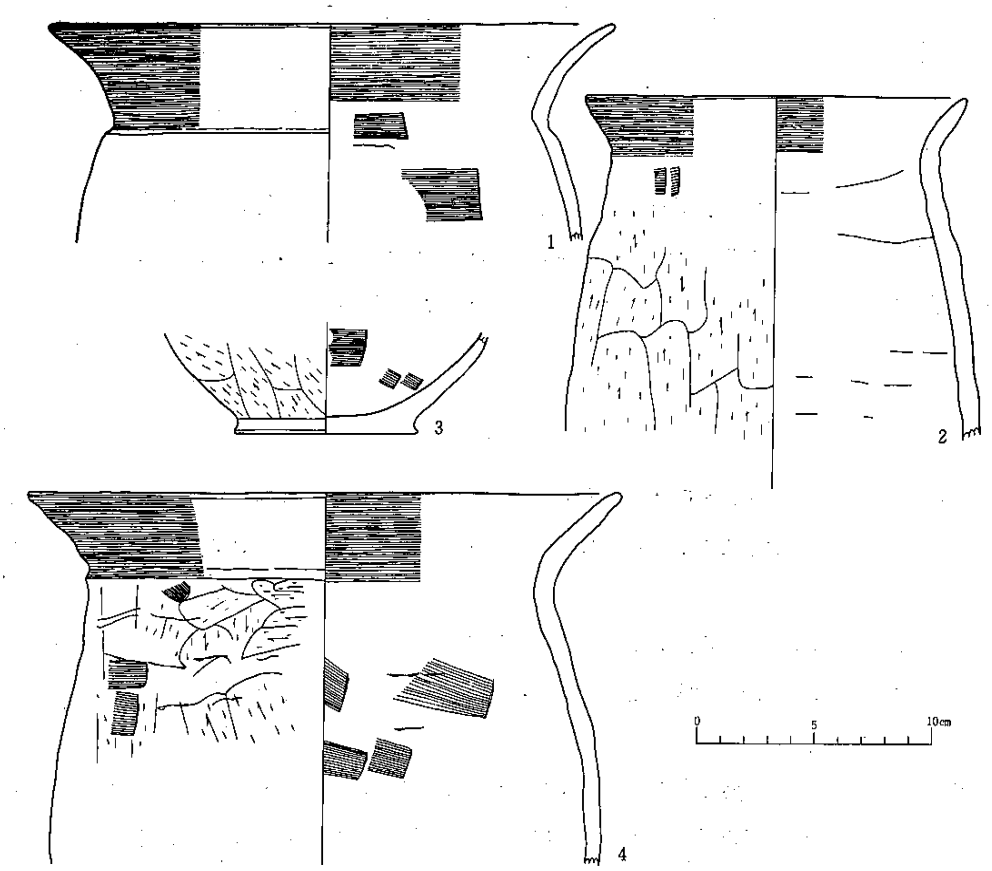
坏（第37図３）　底部から口縁部にかけて外傾している。回転ヘラケズリが体部下端から底部にかけて施されているために、底部切り離し技法は不明である。

７．溝とその出土遺物

調査区全体で５本の溝が検出されている。（第４図）。いずれも、竪穴住居跡を切って掘られているものであり、住居跡よりも新しい。このうち、調査区西側で検出されている３本の溝（第１～３号溝）からは土師器・須恵器が出土している。他の溝はかなり削平を受けており、攪乱なども著しく出土遺物もない。以下、遺物の出土している第１～３号溝について述べてみる。

第１号溝（第４図）

調査区西側、基本層位第Ⅱ層上面において確認された。第２・３号溝とほぼ直角に交っており、第２・３号溝及び第６号住居跡を切っている。土師器・須恵器・赤焼土器が堆積土から出土している。図示できるものはない。



第38図　第２号溝出土遺物

第２号溝（第４図）

調査区西側、基本層位第Ⅱ層上面において確認された。第３号溝とほぼ平行に東西方向に掘られている。第１・４号溝によって切られている。長さ約11m、最大幅約0.7m、最も深いところで約40cmである。溝底面より土師器甕、堆積土から土師器甕が出土している。

土師器

甕（第38図２）　製作の際にロクロを使用していない。口径より器高が大きく、最大径の位置は体部にある。口縁部内外ヨコナデ、体部外面は、ヘラケズリが施されている。内面の調整は摩滅のため不明である。

堆積土出土遺物

土師器

甕　いずれも製作に際しロクロを使用していない。第38図１・４は、最大径の位置が口縁部

にあり、頸部には段が巡っている。第38図３は、体下部及び底部のみ残存している。いずれも、口縁部内外ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ、内面にはヘラナデが施されている。

第３号溝(第４図)

調査区西側、基本層位第Ⅱ層上面において確認された。第１号溝に切られ、第５・６・７号住居跡を切っている。長さ約7.4m、最大幅約0.8m、最も深いところで約20㎝である。土師器・須恵器などが堆積土から出土している。図示できるものはない。

８．ピットとその出土遺物

ピットは、住居跡内と住居跡以外で検出されている。住居跡内で検出されたピットについてはすでに述べてあるので、ここでは住居跡以外から検出されたピットについて述べることにする。

ピットは12個検出されている。いずれも、調査区西側において検出されている。ピット１を除いて、これらのピットから遺物は出土していない。また、ピット間で組み合うものはない。

ピット１(第４図)

基本層位第Ⅱ層上面で確認されている。溝２を切っている。平面形は楕円形で長軸約80㎝、短軸約50㎝、深さ約40㎝である。土師器坏・赤焼土器坏がピット内から出土している。

土師器

坏（第39図１）　製作の際にロクロを使用している。体部から口縁部にかけて直線的に外傾している。内面はヘラミガキ、黒色処理が施されている。底部は欠損している。

赤焼土器

坏（第39図２）　口縁部は欠損している。底部切り離し技法は回転糸切りである。再調整はない。

第39図　ピット１出土遺物

９．遺物包含層とその出土遺物

調査区のほぼ中央の表土下において２枚の遺物包含層が検出された。以下各層の状況と分布出土遺物について述べることにする。

〔第１層〕

黒褐色シルト層（10YR⅔）である。調査区北側から中央にかけて分布している。南側では見られない。層は、最も厚いところで約 20cm の厚さを持ち斜面の北側より南側の方が厚くなっている。出土遺物は豊富で土師器・須恵器を中心に多量に出土している。遺物は、調査区中央に最も多く分布している。また、遺物の出土状況に規則性はない。

〔第２層〕

暗褐色シルト層（10YR⅔）である。調査区中央から西側にかけて分布している。北側、南側及び東側では見られない。厚さは、最も厚いところで約 30cm である。層は、斜面の北側よりも南側の方が厚くなっている。出土遺物は、第１層よりは少ないが土師器・須恵器を中心に多量に出土している。また、遺物の出土状況に規則性はない。

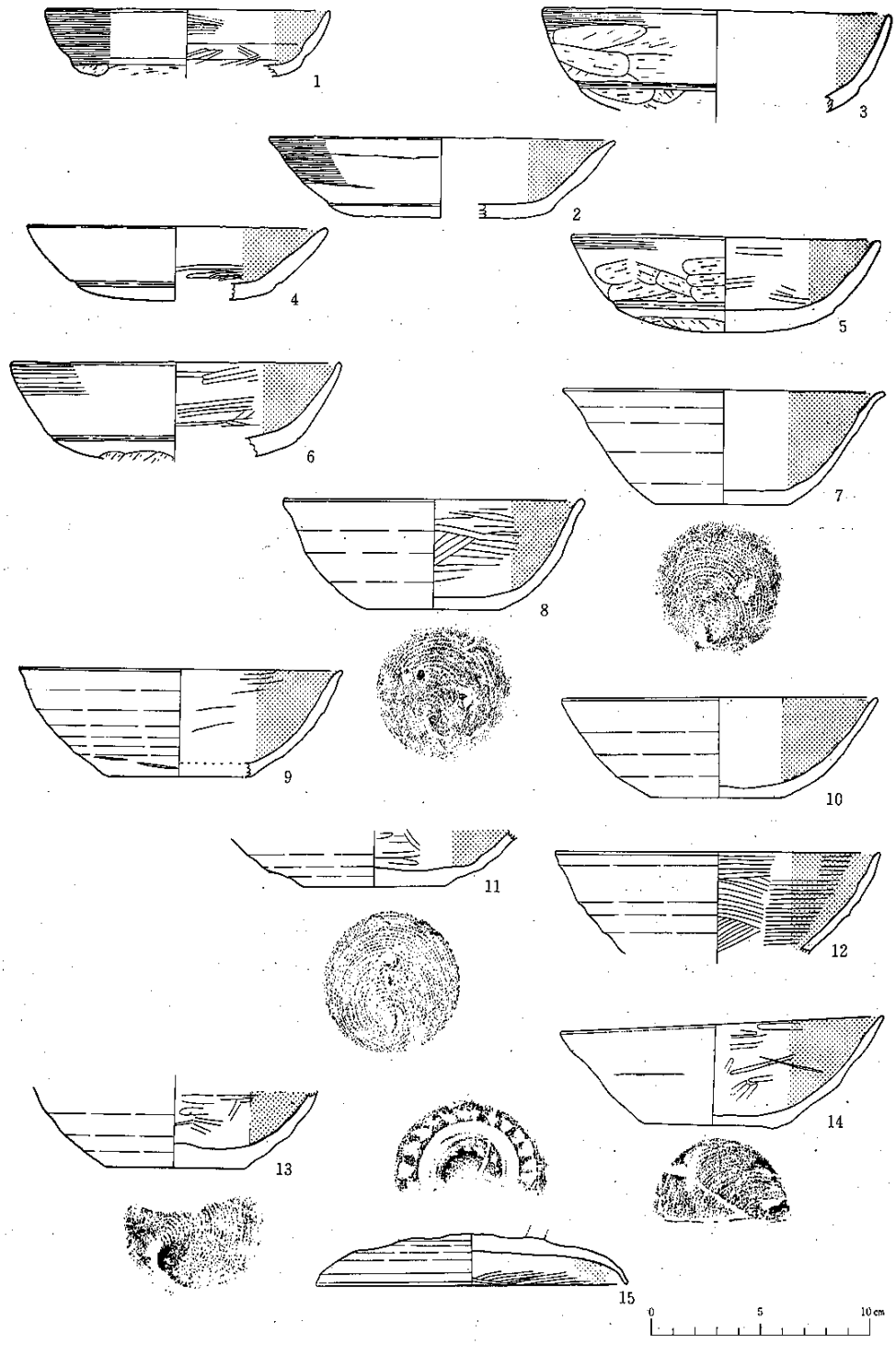
イ．遺物包含層第１層からの出土遺物

土師器

坏　製作の際にロクロを使用していないもの（第40図１～６）、ロクロを使用しているもの（第40図７～14）とがある。

前者は、いずれも丸底の底部を持つ。さらに前者は体部外面に段が巡るもの（第40図１・２）沈線が巡るもの（第40図３～６）とに分かれる。段の巡るものは、内面に段が巡るもの（第40図１）と巡らないもの（第40図２）とがあり、いずれも段を境にして段の上半分ヨコナデ、下半分にはヘラケズリが施されている。第40図２は、体部の一部が摩滅のため調整は不明である。いずれも内面にはヘラミガキ、黒色処理が施されている。体部外面に沈線の巡るものには、沈線の上半分が口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ、下半分にはヘラケズリが施されているもの（第40図３・５～７）と、外面全体にヘラミガキが施されているもの（第40図４）とがある。いずれも内面にはヘラミガキ、黒色処理が施されている。

後者には、体部は丸味を持って立ち上がり、口縁部でわずかに外反するもの（第40図７～９）体部は丸味を持って立ち上がり、口縁部まで直線的に外傾するもの（第40図 10・12・14）とがある。９・12 は底部、11・13 は口縁部が欠損している。底部の残存しているものは、いずれも回転糸切り技法によって切り離されており、再調整はない（第40図７・８・11・13・14）。



第40図　遺物包含層第１層出土遺物（Ⅰ）

蓋（第40図15）　リング状のつまみを有する蓋であると思われる。つまみ部は欠損してなく、天井部には回転糸切痕が残っている。内面にはヘラミガキ、黒色処理が施されている。

甕　製作の際にロクロを使用しないもの（第41図１・２・３・７）とロクロを使用しているもの（第41図９）とがある。

ロクロを使用しないものには、最大径の位置が口縁部にあるもの（第41図２・３）と体部にあるもの（第41図１・４）とがある。前者は、さらに頸部に段が巡るもの（第41図３）と巡らないもの（第41図２）とに分かれる。いずれも頸部でくびれ、口縁部は外反している。第41図２は、口径が14.6㎝と小形である。後者も、さらに、頸部に沈線が巡るもの（第41図１）、と段が巡るもの（第41図７）とに分かれる。いずれも頸部でくびれ、口縁部は外反している。第41図７は、端部に一条の沈線が巡っている。

器面調整は、前者も後者も口縁部内外ヨコナデ、体部外面にはヘラケズリが施されている。体部内面は、ヘラナデが施されているもの（第41図１・２・７）、ヘラケズリの後ヘラナデが施されるもの（第41図３）とがある。

ロクロを使用しているものは、最大径の位置が体部にある（第41図９）。頸部でくびれ、口縁部は外反している。端部は上方につまみ出され狭い縁帯をつくっている。

須恵器

坏　底部は回転ヘラケズリの再調整が加えられ底部切り離し技法の不明なもの（第41図４）回転糸切りのもの（第41図５）とがある。第41図６は、欠損しており切り離し技法は不明である。

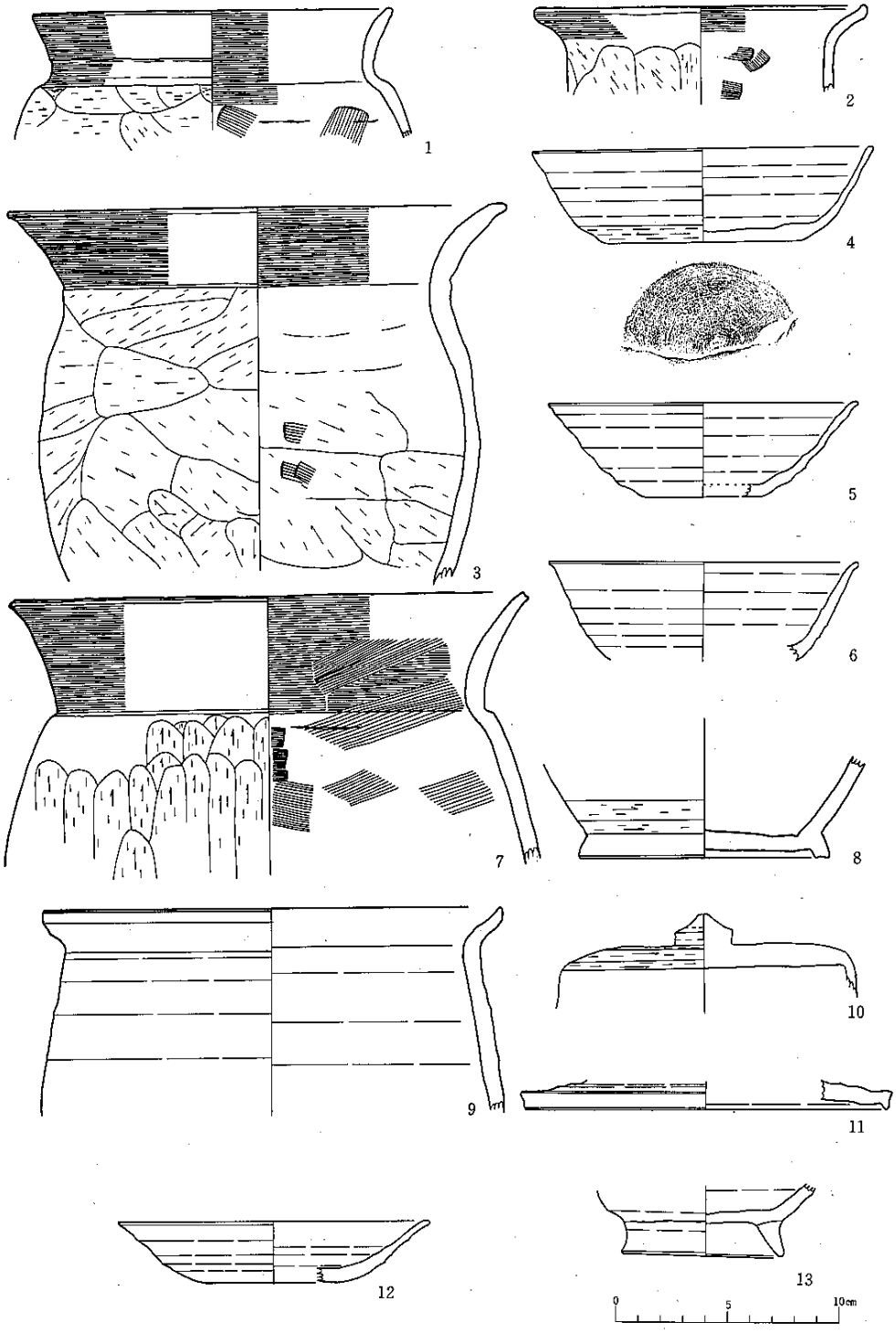
壺（第41図８）　体部上半は欠損している。体部下端には回転ヘラケズリの再調整があり、底部には低い高台が付いている。

蓋　第41図10はつまみの中央が周縁より高いいわゆる宝珠形のつまみを持っている。天井部外面には、回転ヘラケズリ痕が見られる。天井部はほぼ平坦で、口縁部はほぼ直角に折り曲げられている。第41図11はつまみ部が欠損している。天井部は、ほぼ平坦で、口縁端が下方に折り曲げられている。

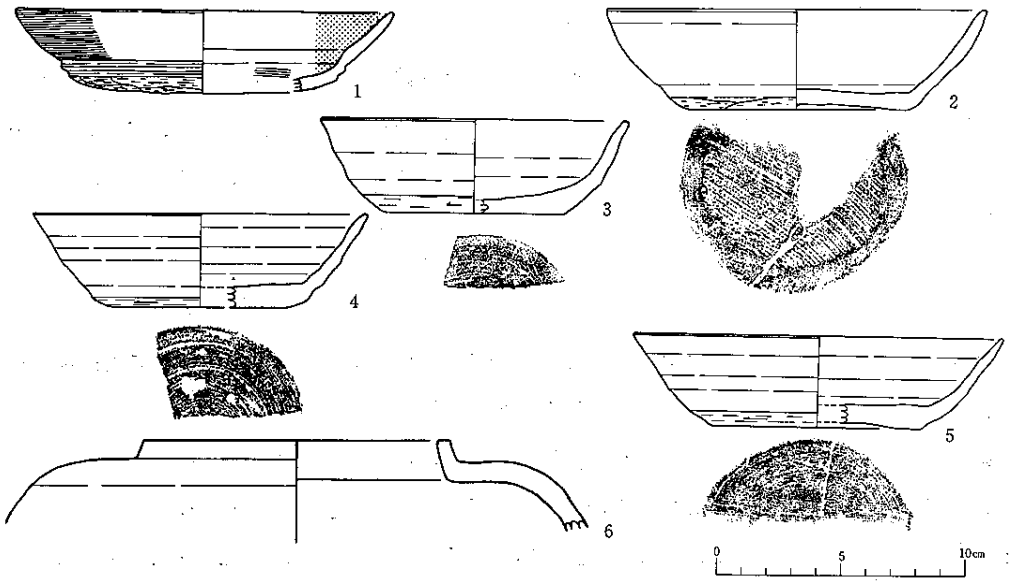
赤焼土器

坏（第41図12）　製作の際にロクロを使用しており、再調整はない。体部は丸味を持って立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。底部は大半が欠損しているが、わずかに残存部に回転糸切り痕が見られる。

高台付坏（第41図13）　坏部は大半が欠損してない。高台部は短く「八」字状に外方に開く。坏底部周縁には、高台部接合の際のナデ調整が施されているが、中央まで及ばないために、回転糸切り痕が残っている。



第41図　遺物包含層第１層出土遺物（Ⅱ）



第42図　遺物包含層第２層出土遺物

ロ．遺物包含層２層からの出土遺物

土師器

坏（第42図１）　丸底の底部を持ち、体部下端には２本の沈線が巡っている。内面には段が見られる。口縁部は、直線的に外傾している。外面は沈線の上半分がヨコナデ、下半分は底部に至るまでヘラケズリが施されている。内面にはヘラミガキ、黒色処理が施されている。

須恵器

坏　底部切り離し技法が静止糸切りのもの（第42図２）、回転ヘラケズリの再調整のために不明のもの（第42図３～５）とがある。前者は、体部下端から底部周縁にかけて手持ちヘラケズリが施され、後者は、体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリの再調整が施されている。

壺（第42図６）　短頸の壺である。体部上半のみ残存している。頸部で屈曲し、口縁部は短く内傾している。

10．遺構以外の出土遺物

イ．表土からの出土遺物

土師器

坏　製作の際にロクロを使用しないもの（第43図１～３）と、使用しているもの（第43図４・５）とがある。

ロクロを使用しないものは、さらに丸底のもの（第43図１・２）と、平底のもの（第43図３）

に分かれる。

前者には、体部外面に段の巡るもの（第43図１）と沈線の巡るもの（第43図２）とがある。第43図１は、口縁部は内弯気味で、体下部に段が巡っている。外面調整は、段を境にして上半分は口縁部がヨコナデ、体部がヘラミガキ、段の下半分はヘラケズリが施されている。第43図２は、口縁部が外傾しており、体部中央に沈線が巡っている。外面調整は、線の上半分はヨコナデ、下半分にはヘラケズリが施されている。内面にはいずれもヘラミガキ、黒色処理が施されている。

後者は、体部は丸味を持って立ち上がり、口縁部は内弯気味になる。外面は口縁部がヨコナデ、体部から底部にかけてヘラケズリが施されている。

第43図４・５は、製作の際にロクロを使用している。いずれも体部は丸味を持って立ち上がり、口縁部はわずかに外反している。内面にはヘラミガキ、黒色処理が施されている。４・５とも、底部には手持ちヘラケズリの再調整が施されているために、切り離し技法は不明である。

甕　製作の際にロクロを使用しないもの（第43図７）と使用しているもの（第43図９）とがある。

前者は、体部下半が欠損している。頸部でくびれ、口縁部は外反している。最大径の位置は体部にある。器面調整は、口縁部内外にヨコナデ、体部外面にヘラケズリ、内面にはヘラナデが施されている。

後者は、体部下半が欠損している。頸部でくびれ、口縁部は外反している。端部は上方につまみ出され狭い縁帯をつくっている。最大径の位置は口縁部にある。体部外面には、ヘラケズリが施されている。

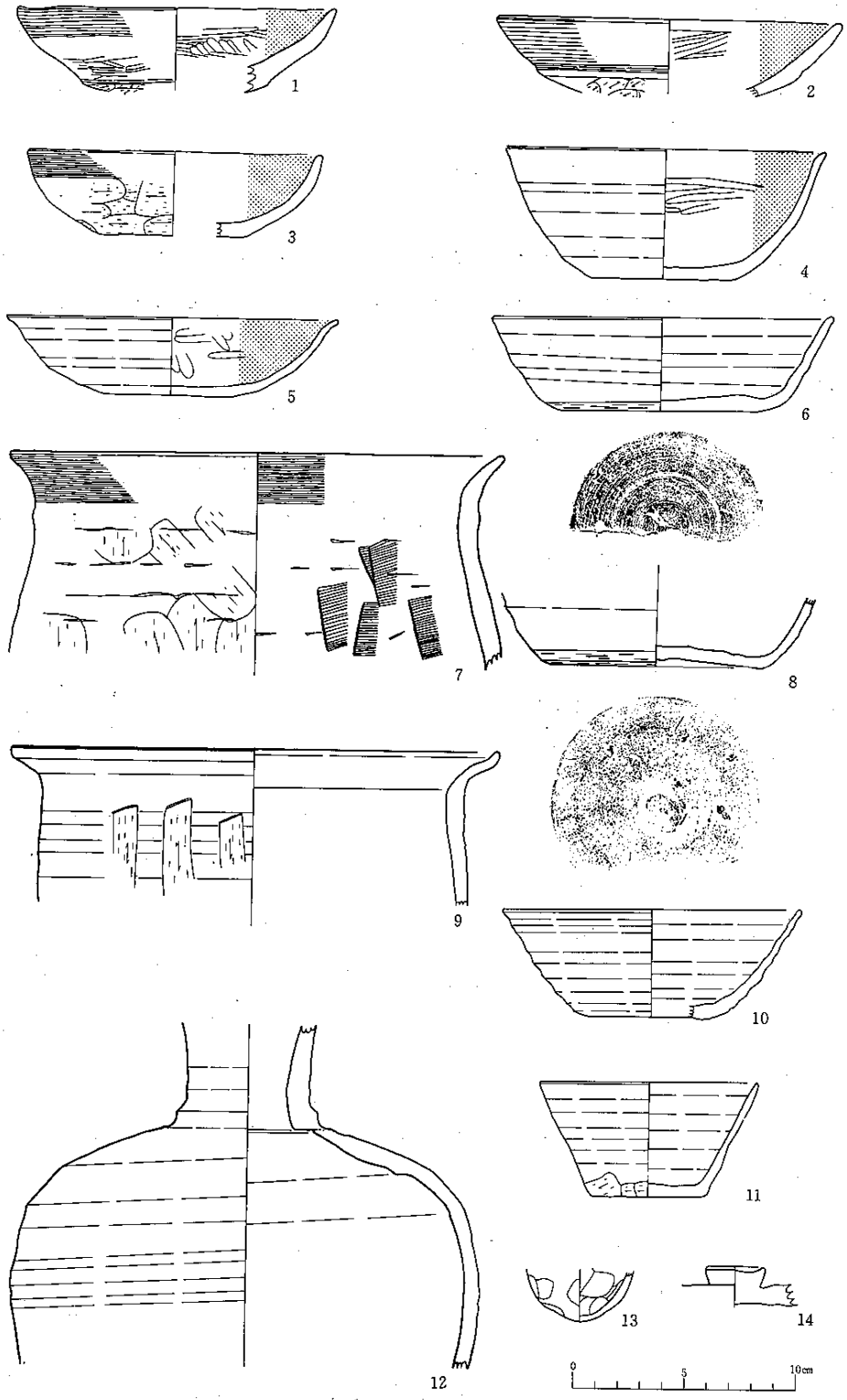
手捏ね土器（第43図13）　尖底の小型手捏ね土器である。指痕が明瞭に残っている。

須恵器

坏　底部切り離し技法がヘラ切りのもの（第43図８）と回転糸切りのもの（第43図10）、再調整が施されているために不明なもの（第43図６・11）とがある。ヘラ切りのものは、体部下端から底部にかけて軽い回転ヘラケズリの再調整が施されているために、ヘラ切り痕が明瞭に残っている。再調整が施されているために切り離し技法が不明なものには、手持ちヘラケズリが施されているもの（第43図11）、回転ヘラケズリが施されているもの（第43図６）とがある。いずれも、体部下端から底部にかけて施されている。

壺（第43図12）　口縁部、底部は欠損している。長頸壺と思われる。頸部には接合痕が観察される。

蓋（第43図14）　つまみ部のみ残存している。つまみの中央は周縁よりわずかに低い。



第43図　表土出土遺物

ロ．出土地点不明の遺物

土師器

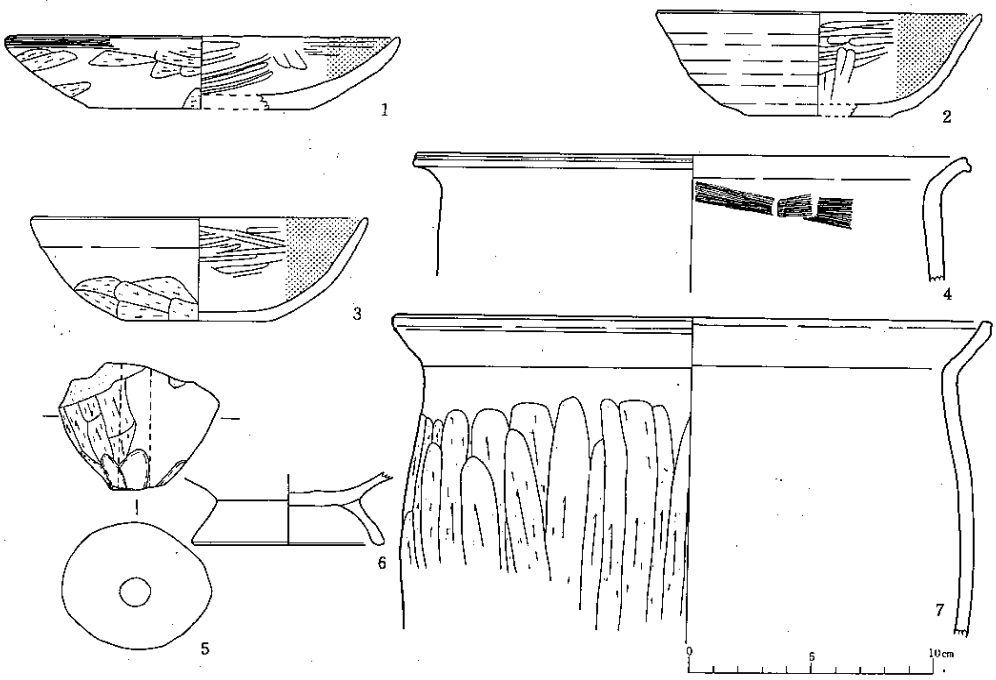
坏　製作の際にロクロを使用しないもの（第44図１）と、使用しているもの（第44図２～３）とがある。

前者は、平底の底部を持ち口縁部は内弯している。器面調整は、口縁部外面ヨコナデ、体部外面から底部にかけてヘラケズリ、内面にはヘラミガキ、黒色処理が施されている。

後者には、底部切り離し技法が回転糸切りのもの（第44図２）と、手持ちヘラケズリの再調整が体部下端から底部にかけて施されているために不明のもの（第44図３）とがある。いずれも、内面にはヘラミガキ、黒色処理が施されている。

甕　いずれも製作の際にロクロを使用しており、最大径の位置は口縁部にある（第44図４・７）。第44図４は、頸部でくびれ口縁部は外反している。端部は上方につまみ出され狭い縁帯をつくっている。縁帯中央には、一条の沈線が巡っている。第44図７は、頸部でくびれ口縁部は外傾している。端部は上方につまみ出され狭い縁帯をつくっている。縁帯中央はくぼんで、一条の浅い沈線をつくり出している。体部外面には縦方向のヘラケズリが施されている。

赤焼土器



第44図　出土地点不明の遺物

高台付坏（第44図６）　坏部の上半分は欠損している。高台部は外傾して短い。坏底部の切り離し技法は、高台部接合の際のナデ調整が全面に施されているために不明である。

土製品

土錘（第44図５）　半欠品である。中央に径約1.2cmの貫通孔がある。外面にはヘラケズリが施され、端部には指頭によるオサエ痕が残っている。所属時期については、不明である。

ハ．縄文土器（第45図１～17）

17点出土している。いずれも深鉢土器体部小破片であり、器両全体にＬＲの単節斜行縄文が施文されている。繊維の含んでいるものはない。

所属時期については不明である。

ニ．弥生土器（第45図18～20）

３点出土している。１は、甕の体部小破片である。ＬＲの単節斜行縄文が施文されている。２は、甕の口縁部破片である。口縁部に一条の沈線が巡っており、沈線の下にはＬＲの単節斜行縄文が施文されている。３は、壺の体部破片と思われる。一本工具の沈線が２本並んで横走している。沈線間は磨かれている。沈線の下には、細かなＬＲの単節斜行縄文が施文されている。

所属時期は、２・３はその特徴から、弥生時代中期初頭の大泉式（伊東：1957）に併行するものと思われる。１については所属時期は不明である。

ホ．石器および石製品

石鏃３点、剥片３点、砥石６点の合計12点が出土している。

石鏃（第46図１～３）

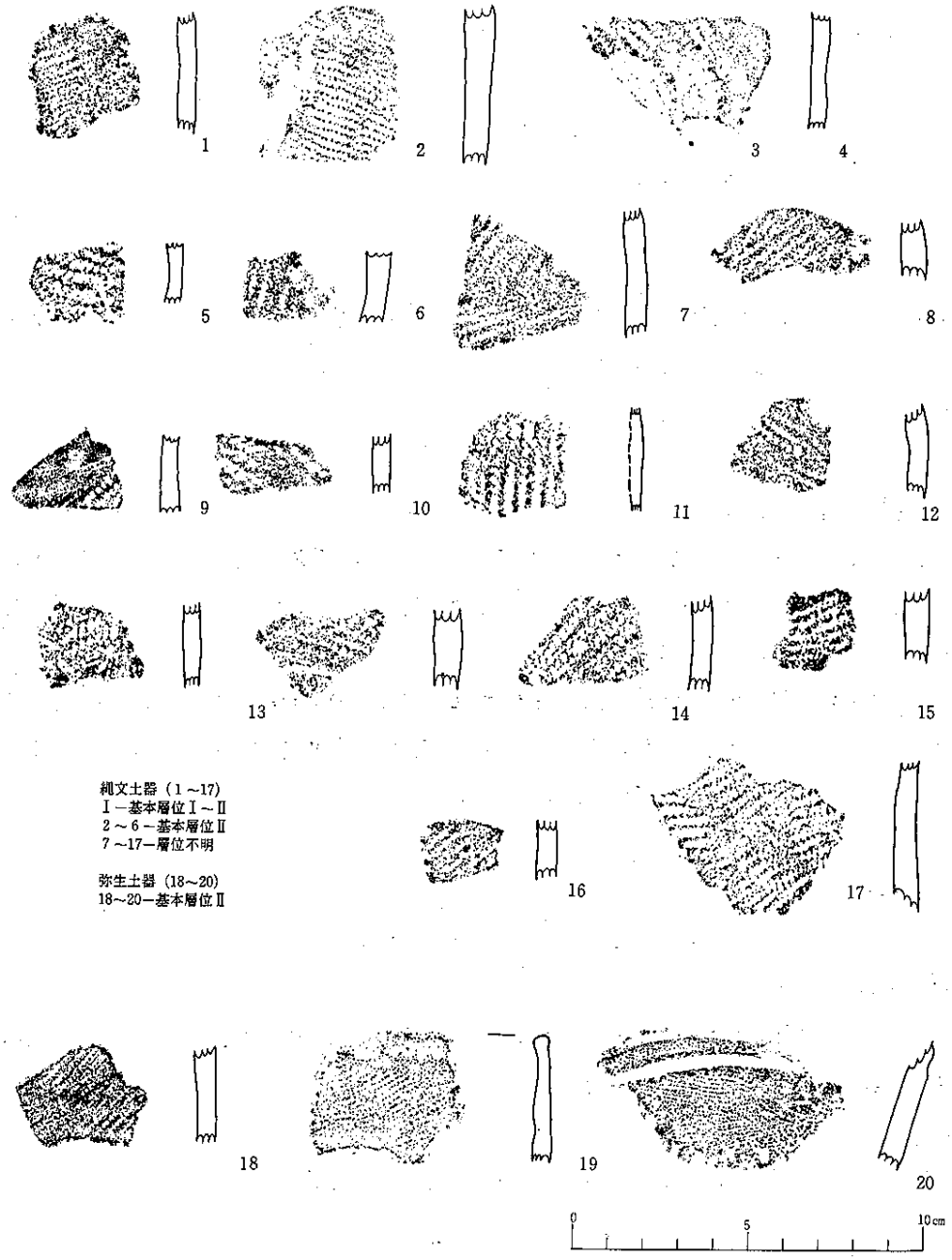
１は、平坦な基部を持ち、尖頭部側縁がわずかにふくらむ二等辺三角形になっている。全体に厚さは薄く偏平になっている。全面に入念な調整剥離が施されている。

２・３は、基部側縁にえぐりを入れて、凸状の茎をつくり出しており、茎の一部は欠損している。尖頭部側縁は直線的になっている。全面に入念な調整剥離が施されている。

剥片（第46図４～６）

４は、背面に腹面の剥離に対して、同一方向および任意方向の剥離が施されている。５・６は、背面には全面に腹面の剥離に対して、同一方向および任意方向の剥離が施されており、腹面の縁辺の一部には小さな調整剥離が施されている。

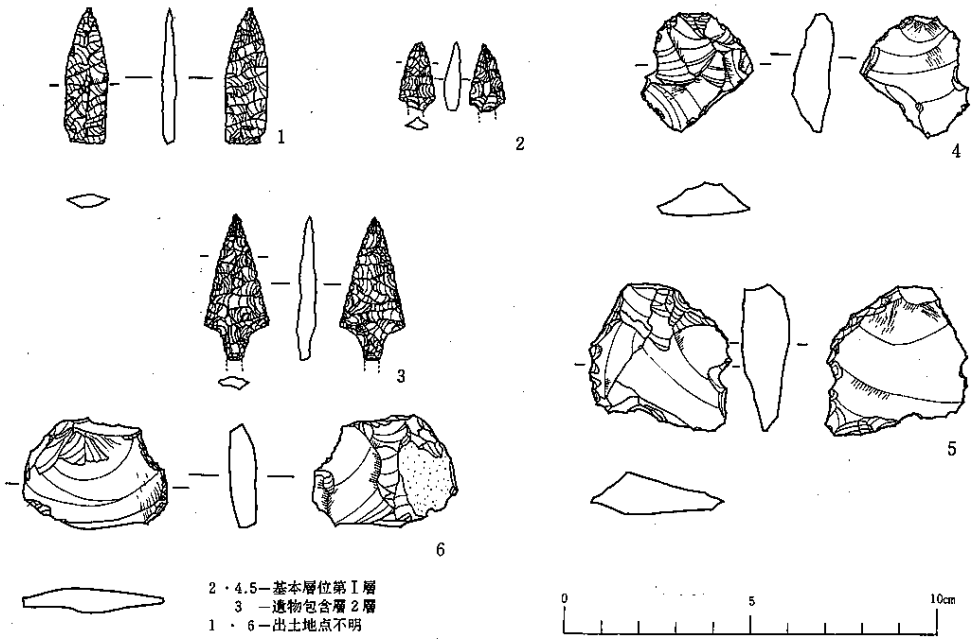
６は背面の一部に自然面を残している。



第45図　縄文・弥生土器

砥石（第47図）

６点出土している。いずれも表裏側面に砥磨面が見られる。いずれの表裏面も中央がわずかにくぼんでおり相当使用されたと思われる。また、幅の狭い研磨溝が残されているものもある



第46図　石器

（第47図1～3・6）。

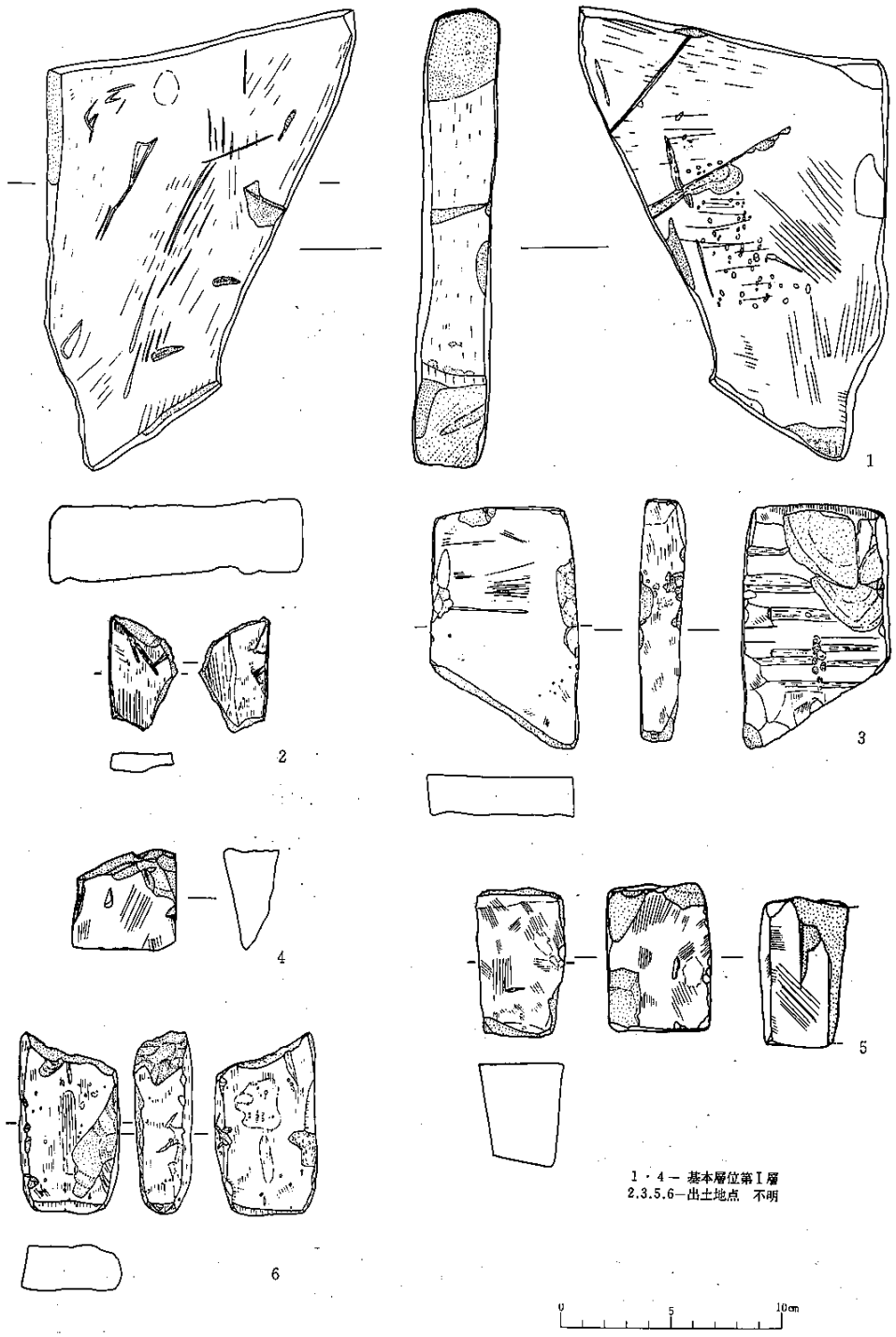
以上の石器および石製品の所属時期について、石鏃・剥片は、本遺跡から縄文土器・弥生土器が出土していることから、縄文時代及び弥生時代に所属する可能性がある。砥石については、形態や使用痕跡などから、古墳時代以降のものと考えられる。しかし、本遺跡では表土（基本層位第Ⅰ層）・遺物包含層に各時期の遺物が混在しているために所属時期については限定できない。

第3表　石器観察表

図版番号	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重量（g）	石　材	出土地点
第46図1	37.2	11.3	3.2	1.3	細粒凝灰岩	不　明
2	(18.0)	9.5	4.3	0.4	細粒凝灰岩	AQ—18 基本層位第Ⅰ層
3	(38.3)	17.0	4.4	1.8	細粒凝灰岩（珪化）	AS—22 遺物包含層2層
4	31.9	30.6	10.2	6.6	細粒凝灰岩（珪化）	BA—22 基本層位第Ⅰ層
5	39.1	38.5	12.7	16.9	細粒凝灰岩	BA—19 基本層位第Ⅰ層
6	27.4	38.8	7.3	9.5	細粒凝灰岩	不　明

第4表　砥石観察表

図版番号	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石　材	出土地点
第47図1	17.5	13.8	3.4	1088.0	凝灰質砂岩	AQ—17 基本層位第Ⅰ層
2	(5.1)	(3.0)	0.8	17.5	凝灰質頁岩	不　明
3	(10.7)	6.5	2.0	205.0	石英安山岩質凝灰岩	不　明
4	(4.5)	(4.7)	(2.5)	51.7	石英安山岩質凝灰岩	AQ—17 基本層位第Ⅰ層
5	6.5	(3.8)	4.7	188.15	石英安山岩質凝灰岩	不　明
6	(8.1)	4.7	2.0	143.85	石英安山岩質凝灰岩	不　明



第47図　砥　　石

Ⅴ．遺構と遺物に関する問題点

１．出土遺物

イ．出土土器の分類

出土土器には、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、赤焼土器があるが、縄文土器、弥生土器についてはすでに前項で述べているので、ここでは後三者について述べる。

〔土師器〕　土師器には、坏、甕、高台付坏、蓋、耳皿、手捏ね土器などがある。耳皿、手捏ね土器を除いて各器種の形態的特徴や製作に際しての技法によって、いくつかに分類することが可能である。なお、以下の分類は器形の比較的明らかな図示遺物を対象としている。

坏　坏には製作の際にロクロを使用しないものと、使用しているものとがある。前者は器形の特徴により、後者は底部切り離し技法によりそれぞれ二類に分類される。

Ａ類　ロクロを使用しないもので、丸底のもの。

Ｂ類　ロクロを使用しないもので、平底のもの。

Ｃ類　ロクロを使用しており、底部の切り離しが回転糸切り技法によるもの。

Ｄ類　ロクロを使用しており、底部に再調整が加えられているために切り離し技法の不明なもの。

以上の各類はさらに体部器形の特徴、器面調整の特徴などからいくつかに細分される。

〈坏Ａ類〉　製作の際にロクロを使用しないもので底部形態が丸底のものである。内面はいずれもヘラミガキ・黒色処理されている。体部に段の巡るものをＡⅠ類、体部に沈線の巡るものをＡⅡ類、体部に段、沈線をもたないものをＡⅢ類とする。また各類とも外面の器面調整としてヘラミガキのあるもの（ａ）とないもの（ｂ）に分かれる。

ＡⅠ類　丸底で体部に段のつくものである。ＡⅠ類はさらに内面に段のつくものをＡⅠｉ類、内面に段のつかないものをＡⅠⅱ類に分けることができる。外面の段の位置は体部中央がやや下部である。体部は丸味を持って立ち上がり、口縁部は内弯気味のものと外傾するものとがある。

ＡⅡ類　丸底で体部に沈線が巡るものである。ＡⅡ類はさらに内面に段のつくものＡⅡｉ類、内面に段のつかないものＡⅡⅱ類に分けることができる。外面の沈線の位置は、体部中央がやや下部であり、沈線は一条巡るものと二条巡るものとがある。体部は丸味を持って立ち上がり、口縁部は、内弯気味のものと外傾するものとがある。

ＡⅢ類　丸底で体部に段、沈線の巡らないものである。体部は丸味を持って立ち上がり、口

縁部で内弯気味になる。

〈坏B類〉 製作の際にロクロを使用しないもので底部形態が平底のものである。体部は丸味を持って立ち上がり、口縁部で内弯気味になる。

外面器面調整は、口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてヘラケズリ、内面はヘラミガキ、黒色処理が施されている。

〈坏C類〉 製作の際にロクロを使用しているもので、底部の切り離し技法が回転糸切りのものである。内面はヘラミガキ・黒色処理されている。再調整が施されているものをＣⅠ類、再調整が施されていないものをＣⅡ類とする。

ＣⅠ類 底部の切り離し技法が回転糸切りのものであり、再調整が施されているものである。体部は丸味を持って立ち上がり、口縁部でわずかに外反するもの、底部から口縁部まで直線的に外傾するものとがある。外面の一部に手持ちヘラケズリが施されているもの（a）、口縁部及び体部外面にヘラミガキ、黒色処理が施されているもの（b）とに分かれる。前者には体部下端のみに施されるもの（1）、体部下端及び底部周縁に施されるもの（2）とがある。

ＣⅡ類 底部切り離し技法が回転糸切りのものであり、再調整が施されていないものである。体部は丸味を持って立ち上がり口縁部でわずかに、あるいは強く外反するもの、底部から口縁部にかけて直線的に外傾するもの、体部は丸味を持って立ち上がり口縁部で内弯気味になるものなどがある。

〈坏D類〉 製作の際にロクロを使用しているもので、再調整のために底部切り離し技法が不明のものである。内面はヘラミガキ・黒色処理されている。体部上半から底部にかけて手持ちヘラケズリの施されているもの（a）、体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリの施されているもの（b）、底部のみに手持ちヘラケズリの施されるもの（c）とがある。体部は丸味を持って立ち上がり口縁部で内弯気味になるもの、体部は丸味を持って立ち上がり口縁部でわ

第５表　土師器坏の分類

ロクロ不使用	A．丸　底	Ⅰ．体部に段	i　内面に　段 ii　内面に　段なし	a．外面にミガキあり b．外面にミガキなし
		Ⅱ．沈　線	i　内面に　段 ii　内面に　段なし	
		Ⅲ．段・沈線なし		
	B．平　底			
ロクロ使用	C．回転糸切り	Ⅰ．外　面 再調整あり	(a)　一部に手持ちヘラケズリ	(1)体部下端(2)体部下端～底部周縁
			(b)　ヘラミガキ・黒色処理	
		Ⅱ．外面再調整なし		
	D．切り離し不明	外　面 再調整あり	手持ちヘラケズリ	(a)　体部上半～底部 (b)　体部下端～底部 (c)　底　部

ずかに、あるいは強く外反するものとがある。

甕　甕においても、製作の際にロクロを使用しないものと、使用しているものとがある。前者も後者も最大径の位置によって、それぞれ二種に分類される。

A類　ロクロを使用しないもので、最大径の位置が口縁部にあるもの。

B類　ロクロを使用しないもので、最大径の位置が体部にあるもの。

C類　ロクロを使用し、最大径の位置が口縁部にあるもの。

D類　ロクロを使用し、最大径の位置が体部にあるもの。

以上の各種はさらに細部の器形の特徴や器面調整の特徴などからいくつかに細分される。

〈甕A類〉　製作の際にロクロを使用しないもので、最大径の位置が口縁部にあるものである。頸部に段の巡るものをＡⅠ類、頸部に段の巡らないものをＡⅡとする。

ＡⅠ類　頸部に段の巡るものである。器面調整には、体部内面にヘラナデが施されるもの、刷毛目の施されるもの、ヘラケズリの施されるものとがある。いずれも、口縁部は外反および外傾するものであり、体部外面器面調整は、ヘラケズリが施されている。

ＡⅡ類　頸部に段の巡らないものである。口径より器高の大きいものや、口径より器高が小さいものがある。ＡⅡ類は、さらに口縁部形態によって、頸部でくびれて、口縁部が外反及び外傾するものをＡⅠｉ類、頸部でくびれず、口縁部がわずかに外反するものをＡⅠⅱ類、口縁部が内弯気味になるものをＡⅠⅲ類とに分けることができる。器面調整には、口縁部内外ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデの施されているもの、口縁部内外ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ、内面刷毛目の施されているもの、外面は指頭によるオサエ、内面は口縁部が横方向のナデ、体部は縦方向のナデが施されているもの外面は口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてヘラケズリ、内面はヘラミガキ、黒色処理が施されるものとがある。

〈甕B類〉　製作の際にロクロを使用しないもので、最大径の位置が体部にあるものである。頸部に段の巡るものをＢⅠ類、頸部に沈線の巡るものをＢⅡ類、頸部に段も沈線も巡らないものをＢⅢ類とする。

ＢⅠ類　頸部に段の巡るものである。頸部でくびれて口縁部はゆるやかに外反する。端部には一条の沈線が巡る。器面調整は、口縁部内外ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ、内面はヘラナデが施されている。

ＢⅡ類　頸部に沈線の巡るものである。頸部には幅約１㎝の沈線が巡っている。頸部でくびれて口縁部はゆるやかに外反している。器面調整は、口縁部内外ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ、内面はヘラナデが施されている。

Ｂⅲ類　頸部に段も沈線も巡らないものである。頸部でくびれて口縁部はゆるやかに外反している。器面調整は、口縁部内外ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ、内面はヘラナデが施されている。

〈甕Ｃ類〉　製作の際にロクロを使用しているもので、最大径の位置が口縁部にあるものである。器高より口径が大きいものと、器高より口径が小さいものがある。頸部でくびれて口縁部で外反しており、端部は上方に立つものと丸くおさまるものとがある。体下部から底部にかけて欠損しており、器面調整の不明のものが多い。外面器面調整は、ロクロ調整後ヘラケズリが施される。内面は、ナデやヘラナデが施されているものもあるが再調整のないものが多い。

〈甕Ｄ類〉　製作の際にロクロを使用しているもので、最大径の位置が体部にあるものである。頸部でくびれて口縁部で外反している。端部は、上方に立つものと丸くおさまるものがある。体下部から底部にかけて欠損しており、器面調整の不明のものもある。外面器面調整は、ロクロ調整後ヘラケズリが施されている。内面にはナデ調整が施されているものもあるが再調整の施されていないものが多い。

第６表　土師器甕の分類

ロクロ不使用	Ａ．最大径　口縁部	Ⅰ．頸部　段あり	
		Ⅱ．頸部　段なし	ⅰ　口縁　くびれて外反・外傾
			ⅱ　口縁　くびれずわずかに外反
			ⅲ　口縁　内弯気味
	Ｂ．最大径　体　部	Ⅰ．頸部　段あり	
		Ⅱ．頸部　沈線あり	
		Ⅲ．頸部　段・沈線なし	
ロクロ使用	Ｃ．最大径　口縁部		
	Ｄ．最大径　体　部		

高台付坏　図示可能なものは２例ある。いずれも製作の際にロクロを使用している。高台付坏は、器面調整の違いによって２種類に分けることができる。坏部内外面にヘラミガキ、黒色処理が施され、黒色処理が高台部内外面にまで及んでいるものをＡ類、ヘラミガキ黒色処理が坏部内面にのみ施されているものをＢ類とする。いずれも高台部接合に際しては、底部切り離し技法が不明になるほどナデ調整が施されている。

蓋　１例出土している。製作の際にロクロを使用している。リング状のつまみを有しており天井部には糸切り痕が残っている。内面にはヘラミガキ、黒色処理が施されている。

耳皿　１例出土している。坏部と坏部に比して低い高台部とからなる。製作の際にロクロを使用したかどうかは不明である。坏部の口縁部は、長軸方向に対している口縁を上方に折り曲げ

ている。坏部内外面及び高台部外面はヘラミガキが施され、高台部内面にはナデ調整がされている。全面に黒色処理が施されている。

手捏ね土器　２例出土している。１例は、内外面に指頭によるオサエ痕のある尖底土器で、もう１例は、体部から口縁部にかけて直線的に外傾している円筒形の土器で、内外面にナデ調整されているものである。前者は口縁部が欠損し、後者は底部が欠損している。

〔須恵器〕　須恵器には坏、甕、壺、蓋などがある。

坏　器形は、体部から口縁部にかけて直線的に外傾するもの、体部は丸味を持って立ち上がり、口縁部で外反するものなどがある。底部切り離し技法、再調整の有無等により分類することができる。

A類　静止糸切りによって底部が切り離されているもの。

B類　ヘラ切りによって底部が切り離されているもの。

C類　回転糸切りによって底部が切り離されているもの。

D類　再調整のために底部切り離し技法の不明なもの。

〈坏A類〉　静止糸切りによって底部が切り離されているものである。再調整が加えられているもので、体部下端から底部周縁にかけて手持ちのヘラケズリが施されている。

〈坏B類〉　ヘラ切りによって底部が切り離されているものである。再調整が加えられているもので、体部下端から底部全面にかけて軽い回転ヘラケズリが施されている。

〈坏C類〉　回転糸切りによって底部が切り離されているものである。再調整のあるものをＣⅠ類、再調整のないものをＣⅡ類とする。ＣⅠ類は体部下端に回転ヘラケズリの再調整が加えられている。

〈坏D類〉　再調整のために底部の切り離し技法の不明なものである。回転ヘラケズリの再調整が体部下端から底部にかけて施されるものをＤⅠ類、手持ちヘラケズリが施されているものをＤⅡ類とする。ＤⅡ類には、体部下端から底部にかけて施されるもの（ａ）と底部のみに施されるもの（ｂ）とがある。

第７表　須恵器坏の分類

A．静止糸切り	再調整あり	手持ちヘラケズリ―体部下端～底部周縁
B．ヘラ切り	再調整あり	回転ヘラケズリ―体部下端～底　部
C．回転糸切り	Ⅰ．再調整あり	回転ヘラケズリ―体部下端
	Ⅱ．再調整なし	
D．不　　明	再調整あり	Ⅰ．回転ヘラケズリ―体部下端～底部
		Ⅱ．手持ちヘラケズリ―(a)体部下端～底部 (b)底　部

甕　図示可能なものは３例である。いずれも、外面にはヘラケズリが施されている。さらにこれらは、内面の器面調整の違いによって刷毛目が施されるものをＡ類、再調整のないものをＢ類とに分けることができる。

長頸壺　図示可能なものは２例である。口縁部及び体部下半の欠損しているものが１例、高台の付くものが１例である。

短頸壺　図示可能なものは１例である。口縁部は短く、内傾している。

蓋　宝珠形のつまみを有し、天井部から口縁部までなだらかにのびて端部はほぼ垂直に下方へ折れ曲がる。天井部外面は、回転ヘラケズリの再調整が加えられている。つまみの形態によって２類に分けられる。

〈蓋Ａ類〉　つまみ中央部が周縁部より高いもの。

〈蓋Ｂ類〉　つまみ中央部が周縁部より低いもの。

〔赤焼土器〕　坏、甕、高台付坏がある。本書において「赤焼土器」としたものは、色調が赤褐色ないし明褐色を呈し、成形・調整の際にロクロを使用し、底部切り離しが回転糸切り技法によるもので、内外面とも再調整の施されないのを云う。

坏　底部から口縁部にかけて直線的に外傾するもの、体部は丸味をもって立ち上がり、口縁部でゆるやかに、または強く外反するものとがある。

甕　底部から底部にかけて残存している。底部切り離し技法は回転糸切りである。

高台付坏　坏部と坏部に比して低い「ハ」字状に開いた高台部のつくもので、いずれも製作に際してロクロを使用しているものである。坏部と高台部の接合の際に、坏底部の切り離し技法が不明になるほど底部全面に再調整が加えられているものをＡ類、再調整が坏底部周縁にのみ施され、中心までおよばないで坏底部に回転糸切りの痕跡が認められるものをＢ類とする。

〈高台付坏Ａ類〉　坏部と高台部の接合の際に、坏底部の切り離し技法が不明になるほど底部全面に再調整が加えられているものである。高台部内外面及び坏部底部にナデ調整が施されている。

〈高台付坏Ｂ類〉　坏部と高台部の接合の際に、再調整が坏底部周縁にのみ施され、中心までおよばないで坏底部に回転糸切りの痕跡が認められるものである。

以上の様に出土土器の分類を行なった。この分類を図示した土器を分類にあてはめると第８

表のようになる。

また、分類した土器を出土地点・層位ごとに配列すると第９表のようになる。

ロ．出土土器の組合わせとその年代

出土土器は、それぞれ前項のように分類された。分類された土器は、各住居跡単位において第９表のように共伴関係が認められた。ここでは、各住居跡で共伴する土器の組み合わせ関係や、住居跡間での組み合わせ関係などについて検討し、その年代について考察する。

土師器坏には、製作に際しロクロを使用しないものと、ロクロを使用しているものの二者がある。前者にはA・B類があり、後者にはC・D類がある。B類は、住居跡内からは出土していない。

ロクロを使用しないA類は、第２号住居跡において、AⅡⅱaとAⅡⅱbが共伴している。AⅢb類は、第１号住居跡から出土しているが、他の住居跡からは出土例がなく共伴関係は不明である。

ロクロを使用しているC・D類は、第５号住居跡においてCⅠa・CⅡ・D類が共伴しており、第４号住居跡においては、CⅡ・CⅠbが共伴している。従って、CⅠa・CⅠb・CⅡ・D類が共伴関係にあり、すべて組み合わせが成立するものと考えられる。

ロクロを使用しないA類とロクロを使用しているC・D類の間には共伴関係が認められなかった。

以上のことから、ロクロを使用していないA類は、AⅢb類だけ出土するグループと、AⅡⅱa・AⅡⅱb類が共伴して出土するグループに、ロクロを使用しているC・D類は１つのグループになり、土師器坏は大きく３つのグループに分けることができる。

土師器甕には、製作に際しロクロを使用しないものとロクロを使用しているものの二者がある。前者にはA・B類があり、後者にはC・D類がある。

ロクロを使用しているC・D類は、第７号住居跡において共伴している。第11号住居跡において、ロクロを使用しているC類とロクロを使用しないAⅡⅱ類が共伴している。つまり、AⅡⅱ類・C・D類の組み合わせが成立するものと考えられる。

AⅠ類が第１号住居跡において、AⅡⅰ類が第10号住居跡において単独に出土しており、共伴関係については不明である。

次に土師器坏との共伴関係において考えてみる。

第４号住居跡においてD類が、土師器坏CⅠb・CⅡと共伴し、第10号住居跡において、AⅡⅰ類が土師器坏CⅡ類と共伴している。よって、AⅡⅰ・AⅡⅱ・C・D類は、土師器坏

第8表の① 図示遺物の分類

図版番号	出土地点	種別	器形	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	分類	図版番号	出土地点	種別	器形	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	分類
5図1	1住 床	土師器	坏		18.4		AⅢb	6	5住 貯蔵穴	土師器	坏	5.4	14.6	6.0	CⅡ
2	1住 床	土師器	甕		20.8		AⅠ	7	5住 貯蔵穴	土師器	坏	4.7	14.1	6.0	CⅡ
6図1	2住カマド支脚2	土師器	坏		14.0			8	5住 貯蔵穴	土師器	坏	4.55	13.7	5.9	CⅠa(ⅱ)
2	2住カマド支脚2	土師器	坏		12.85		AⅢb	9	5住 貯蔵穴	土師器	坏	5.0	15.4	6.7	CⅡ
3	2住カマド支脚2	土師器	坏		12.2		AⅢa	10	5住 貼り床	土師器	坏	5.6	13.95	5.7	CⅡ
4	2住 煙道	土師器	手捏土器		5.2			11	5住 貯蔵穴	土師器	坏		15.2		
9図1	4住 貯蔵穴	土師器	坏	4.7	13.1	5.0	CⅡ	12	5住 貯蔵穴	土師器	坏		14.0	6.7	
2	4住 床	土師器	坏		15.9			13	5住 貯蔵穴	土師器	坏		15.4		
3	4住 貯蔵穴	土師器	坏		14.4		CⅠb	14	5住 貯蔵穴	土師器	坏			5.7	CⅡ
4	4住 カマド内床	土師器	坏	5.0	14.6	5.4	CⅡ	14図1	5住 貯蔵穴	土師器	坏	5.0	14.8		D(a)
5	4住 カマド内床	土師器	甕		18.0		D	2	5住 貯蔵穴	須恵器	坏	5.2	15.3	6.3	CⅡ
6	4住 貯蔵穴	赤焼土器	坏		11.7			3	5住 貯蔵穴	須恵器	坏	5.1	14.05	6.4	CⅡ
7	4住 貯蔵穴	赤焼土器	坏	4.3	12.1	4.7		4	5住 貼り穴	赤焼土器	坏			8.0	
8	4住 貯蔵穴	赤焼土器	坏	5.35	13.1	5.4		8	5住 ピット2		耳皿				
9	4住 貯蔵穴	赤焼土器	坏	4.25	11.6	4.7		9	5住 ピット2	土師器	坏	4.0	14.0	6.9	CⅡ
10	4住 貯蔵穴	赤焼土器	坏	3.95	12.05	5.5		10	5住 ピット3	土師器	坏	6.2	15.0	6.0	CⅡ
11	4住 カマド内床	土師器	坏			5.45	CⅡ	11	5住 堆積土	土師器	坏	4.8	13.8	6.4	
12	4住 貯蔵穴	赤焼土器	坏		13.35			12	5住 堆積土	土師器	甕		20.75		
10図1	4住 貯蔵穴	赤焼土器	坏	4.7	12.85	5.0		13	5住 堆積土	土師器	甕		15.8		AⅡi
2	4住 貯蔵穴	赤焼土器	坏		13.5			15図1	5住 堆積土	土師器	甕	23.0	26.7	9.0	AⅡi
3	4住 貯蔵穴	赤焼土器	坏	4.55	13.1	5.3		2	5住 堆積土	須恵器	甕				B
4	4住 貯蔵穴	赤焼土器	甕			6.7		3	5住 堆積土	須恵器	甕	22.5	14.3	9.7	B
5	4住 貯蔵穴	赤焼土器	高台付坏			8.2	A	17図1	6住 堆積土	土師器	坏	4.9	13.5	5.5	CⅠa(ⅱ)
6	4住 貯蔵穴	赤焼土器	高台付台	5.85	13.1	7.2	A	2	6住 堆積土	土師器	坏	4.7	13.8	5.8	Da
13図1	5住 床	土師器	坏	5.5	14.35	7.3	CⅡ	3	6住 堆積土	赤焼土器	坏	4.3	13.3	5.0	
2	5住 貯蔵穴	土師器	坏	5.3	15.2	5.9	CⅡ	19図1	7住 煙り出し	土師器	甕	22.45	17.9	9.3	D
3	5住 貼り床	土師器	坏	5.0	14.6	6.5	CⅠa(ⅱ)	2	7住 カマド	土師器	甕		16.6		D
4	5住 貼り床	土師器	坏	4.8	14.4	6.0	Dc	3	7住 カマド	土師器	甕		21.25		D
5	5住 貼り床	土師器	坏	4.6	14.05	5.7	CⅡ	4	7住 カマド	土師器	甕		14.6		C

第８表の②

図版番号	出土地点	種別	器形	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	分類	図版番号	出土地点	種別	器形	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	分類
19図5	7住 カマド	土師器	甕		18.25		C	29図7	11住 床	土師器	坏	4.5	12.5	5.7	CⅡ
6	7住 カマド	土師器	甕		18.8		C	8	11住 床	土師器	坏		12.3		
20図1	7住 カマド	土師器	甕		22.0		C	9	11住 床	赤焼土器	坏	3.5	11.6	5.0	
2	7住 カマド	土師器	甕		20.5		C	10	11住 床	土師器	甕		16.4		C
3	7住 カマド	須恵器	坏	4.1	11.45	6.4	DⅡ(b)	11	11住 床	土師器	甕		13.1		AⅡⅱ
4	7住 床	須恵器	坏	4.1	14.6	6.0	CⅡ	31図1	第2号竪写遺構底面	土師器	甕		24.05		AⅠ
5	7住 床	須恵器	甕			3.75	A	2	第2号竪穴遺構底面	土師器	甕				
21図1	7住 カマド左側壁	土師器	甕		21.85			3	第2号 竪穴遺構 堆積土	土師器	坏	4.1	11.9		
2	7住 カマド左側壁	土師器	甕		20.55			4	第2号 竪穴遺構 堆積土	土師器	坏		14.15		AⅡⅱa
3	7住 堆積土	土師器	坏		15.85			5	第2号 竪穴遺構 堆積土	須恵器	坏			7.8	DⅠ
4	7住 堆積土	赤焼土器	坏		15.0			32図	第2号 焼土遺構 堆積土	土師器	甕		17.05		AⅡⅰ
23図1	8住 床	土師器	坏	4.8	13.8	6.4	D(c)	32図	第3号 焼土遺構 堆積土	土師器	甕		19.65		AⅠ
2	8住 床	赤焼土器	高台付坏			7.8	A	32図	第4号 焼土遺構 堆積土	土師器	甕		21.55		
3	8住 堆積土	土師器	高台付坏			7.2	A	33図	第5号 焼土遺構 堆積土	土師器	坏	6.5	18.8		AⅢa
25図1	9住 床	土師器	甕		15.8		C	33図	第8号 焼土遺構 堆積土	土師器	甕	12.2	20.95	10.0	AⅡⅲ
2	9住 床	須恵器	坏	4.0	11.4	6.4	DⅡ(b)	34図	第2号 土壙 堆積土	土師器	坏		12.65		
27図1	10住 カマド	土師器	坏	4.85	13.5	6.0	CⅡ	36図1	井戸 堆積土	土師器	坏			5.4	B
2	10住 ピット床	土師器	甕		22.3		AⅡⅰ	2	井戸 堆積土	土師器	坏	6.6	14.6	5.9	CⅠb
3	10住煙り出しピット	土師器	甕			8.0		3	井戸 堆積土	土師器	坏	4.2	14.1	6.5	CⅠa(2)
4	10住 貯蔵穴	赤焼土器	坏	3.85	12.75	5.4		4	井戸 堆積土	土師器	甕		20.0		AⅡⅰ
5	10住 貯蔵穴	赤焼土器	坏		17.1			5	井戸 堆積土	土師器	高台付坏	7.1	15.75	7.9	B
6	10住 カマド	赤焼土器	坏	4.5	12.75	5.1		6	井戸 堆積土	須恵器	坏	3.6	12.0	6.1	CⅠ
7	10住 堆積土	土師器	甕		18.0		C	7	井戸 堆積土	須恵器	坏	3.65	13.0	7.3	DⅠ
29図1	11住 床	土師器	坏	5.5	14.4	7.0	D(c)	8	井戸 堆積土	赤焼土器	坏	3.85	12.7	4.9	
2	11住 床	土師器	坏		15.2			9	井戸 堆積土	須恵器	坏		12.55		
3	11住 床	土師器	坏	5.1	13.5	6.8	D(c)	37図1	井戸附近落ち込み 堆積土	土師器	坏	4.5	13.75		AⅡⅱb
4	11住 床	土師器	坏		15.6			2	井戸附近落ち込み 堆積土	土師器	坏	4.3	15.85		AⅡⅱb
5	11住 床	土師器	坏		14.2			3	井戸附近落ち込み 堆積土	土師器	坏	4.2	15.3	8.2	DⅠ
6	11住 床	土師器	坏	4.5	12.0	6.3		38図1	第2号溝 堆積土	土師器	甕		24.08		AⅠ

第8表の③

図版番号	出土地点	種別	器形	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	分類
38図2	第2号 溝 底面	土師器	甕		16.0		BⅢ
3	第2号 溝 堆積土	土師器	甕			7.7	
4	第2号 溝 堆積土	土師器	甕		24.75		AⅠ
39図1	ピット1	土師器	坏		13.3		
2	ピット1	赤焼土器	坏			6.0	
40図1	AQ24 遺物包含層1層	土師器	坏		12.9		AⅡb
2	AM23 遺物包含層1層	土師器	坏	3.6	15.6		
3	AQ24 遺物包含層1層	土師器	坏		15.8		AⅡⅢb
4	AM24 遺物包含層1層	土師器	坏	3.3	13.55		AⅡⅢa
5	南北セクション 遺物包含層1層	土師器	坏	4.25	13.9		AⅡⅢb
6	南北セクション 遺物包含層1層	土師器	坏		14.8		AⅡⅢb
7	AQ21 遺物包含層1層	土師器	坏	5.1	14.6	6.1	CⅡ
8	AS24 遺物包含層1層	土師器	坏	4.9	13.45	6.0	CⅡ
9	AQ22 遺物包含層1層	土師器	坏	4.8	14.55	6.5	
10	AO23 遺物包含層1層	土師器	坏	4.8	14.35	5.8	CⅡ
11	AQ23 遺物包含層1層	土師器	坏			6.35	CⅡ
12	AM22 遺物包含層1層	土師器	坏		14.7		
13	AQ23 遺物包含層1層	土師器	坏			6.3	CⅡ
14	AQ21 遺物包含層1層	土師器	坏	5.0	14.8	6.0	CⅡ
15	AQ22 遺物包含層1層	土師器	甕		13.95		
41図1	AM23 遺物包含層1層	土師器	甕		16.0		BⅡ
2	AM22 遺物包含層1層	土師器	甕		14.6		AⅡi
3	南北セクション 遺物包含層1層	土師器	甕		22.4		AⅠ
4	南北セクション 遺物包含層1層	須恵器	坏	4.2	15.15	8.3	DⅠ
5	AQ22 遺物包含層1層	須恵器	坏	4.25	13.8	5.1	CⅡ
6	AM24 遺物包含層1層	須恵器	坏		13.65		
7	AO20 遺物包含層1層	土師器	甕		22.9		BⅠ
8	BA23 遺物包含層1層	須恵器	長頸壺			11.15	
9	AQ23 遺物包含層1層	土師器	甕		20.45		D
10	AM24 遺物包含層1層	須恵器	蓋				A

図版番号	出土地点	種別	器形	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	分類
41図11	AM21 遺物包含層1層	須恵器	蓋		16.2		
12	AC20 遺物包含層1層	赤焼土器	坏	2.7	13.9	6.1	
13	AC20 遺物包含層1層	赤焼焼器	高台付坏			7.1	B
42図1	AT21・22 遺物包含層2層	土師器	坏	3.2	15.05		AⅡib
2	BA21 遺物包含層2層	須恵器	坏	4.1	15.1	9.2	A
3	AT23・24 遺物包含層2層	須恵器	坏	3.8	12.2	7.4	DⅠ
4	AT21・22 遺物包含層2層	須恵器	坏	3.8	13.3	7.0	DⅠ
5	BA21 遺物包含層2層	須恵器	坏	3.7	14.7	8.4	DⅠ
6	BA21 遺物包含層2層	須恵器	短頸壺		12.4		
43図1	南北セクション 基本層位 第Ⅰ層	土師器	坏		14		AⅡⅢa
2	南北セクション 基本層位 第Ⅰ層	土師器	坏		15		AⅡⅢb
3	AM23 基本層位 第Ⅰ層	土師器	坏	3.8	12.45	6.3	B
4	BC22~24 基本層位 第Ⅰ層	土師器	坏	5.85	14.1	6.1	D(c)
5	BC22~24 基本層位 第Ⅰ層	土師器	坏	3.5	14.6	5.8	D(c)
6	南北セクション 基本層位 第Ⅰ層	須恵器	坏	4.2	15.1	8.8	DⅠ
7	BC22~24 基本層位 第Ⅰ層	土師器	甕		21.9		BⅢ
8	AL20 基本層位 第Ⅰ層	須恵器	坏			9.6	B
9	AL22・23 基本層位 第Ⅰ層	土師器	甕		21.7		C
10	AO24 基本層位 第Ⅰ層	須恵器	坏	4.85	13.15	5.4	CⅡ
11	南北セクション 基本層位 第Ⅰ層	須恵器	坏	5.15	9.6	5.0	DⅡ(a)
12	井戸附近 基本層位 第Ⅰ層	須恵器	長頸壺				
13	AL22・23 基本層位 第Ⅰ層	土師器	手捏土器				
14	AM24 基本層位 第Ⅰ層	須恵器	蓋				B
44図1	不明	土師器	坏	3.2	15.6	8.9	B
2	不明	土師器	坏	4.6	13.1	5.8	CⅡ
3	不明	土師器	坏	4.6	13.4	5.85	D(b)
4	不明	土師器	甕		22.1		C
6	不明	赤焼土器	高台付坏			7.6	A
7	不明	土師器	甕		23.9		C

第9表　図示土器集計表

（住居跡に伴う土器）

分類	土師器																											須恵器												赤焼土器			
	坏													甕									高台付坏		蓋	耳皿	手捏土器	坏						甕		長頸壺	短頸壺	蓋		坏	甕	高台付坏	
出土地点	AⅠib	AⅠiia	AⅡia	AⅡib	AⅡiia	AⅡiib	AⅢa	AⅢb	B	CⅠa	CⅠb	CⅡ	D	AⅠ	AⅡi	AⅡii	AⅡiii	BⅠ	BⅡ	BⅢ	C	D	A	B				A	B	CⅠ	CⅡ	DⅠ	DⅡ	A	B			A	B			A	B
第1号住居跡								1						1																													
第2号住居跡					1	1																					1																
第3号住居跡																																											
第4号住居跡											1	3										1																		9	1	2	
第5号住居跡										2		8	2																		2									1			
第6号住居跡																																											
第7号住居跡																					5	3									1		1	1									
第8号住居跡													1																													1	
第9号住居跡																					1												1										
第10号住居跡												1			1																									3			
第11号住居跡												1	2			1					1																			1			

（住居跡に伴わない土器）

第1号住居跡																																											
第2号住居跡																																											
第3号住居跡																																											
第4号住居跡																																											
第5号住居跡															1					1															2								
ピット2												1														1																	
ピット3												1																															
第6号住居跡										1			1																											1			
第7号住居跡																																								1			
第8号住居跡																						1																					
第9号住居跡																																											
第10号住居跡																					1																						
第11号住居跡																																											
第2号竪穴遺構					1									1																		1											
第2焼土遺構															1																												
第3焼土遺構														1																													
第5焼土遺構							1																																				
第8焼土遺構																	1																										
井戸									1	1	1				1									1						1		1								1			
井戸附近落ち込み						2							1																														
第2号溝														2						1																							
ピット1																																								1			
遺物包含層1層	1				1	3						6		1	1			1	1			1			1						1	1				1		1		1			1
遺物包含層2層			1	1																								1				3					1						
基本層位第Ⅰ層		1			1				1				2							1	1						1				1	2	1		1	1			1				
地点不明									1			1	1								2																					1	

の第３グループの土器と共伴関係にあり、組み合わせが成立するものと考えられる。また、第１号住居跡においてＡＩ類が土師器坏AⅢ類と共伴している。よって、ＡＩ類は土師器坏の第１グループの土器と共伴関係にあり、組み合わせが成立するものと考えられる。

須恵器坏には、底部切り離しが静止糸切りのものA類、回転ヘラ切りのものB類、回転糸切りのものC類、再調整のために切り離し技法の不明なものD類がある。A類・B類は住居跡内からは出土していない。

第７号住居跡においてＣⅡ類とＤⅡ類が共伴している。従って、ＣⅡ類とＤⅡ類は組み合わせが成立するものと考えられる。

次に、土師器坏との共伴関係において考えてみる。

第５号住居跡においてＣⅡ類が、土師器坏ＣＩａ・ＣⅡ・D類と共伴する。ＣⅡ類とＤⅡ類が共伴関係にあることから、須恵器坏ＣⅡ・ＤⅡ類は、土師器坏の第３グループの土器とすべて組みあうものと考えられる。

須恵器甕には、内面に刷毛目の施されているA類と、内面に再調整のないB類とがある。住居跡内からはB類は出土していない。須恵器甕A類は、第７号住居跡において単独に出土しており、共伴関係は不明である。しかし、第７号住居跡において、土師器甕C・D類、須恵器坏ＣⅡ・ＤⅡ類と共伴しており、須恵器甕A類は第３グループの土器と共伴関係にあるものと考えられる。

赤焼土器には、坏・甕・高台付坏がある。

第４号住居跡において、坏・甕・高台付坏A類が共伴している。従って、坏・甕・高台付坏A類がすべて共伴関係にあるものと考えられる。

次に土師器坏との共伴関係において考えてみる。

第４号住居跡において坏・甕・高台付坏A類が、土師器坏ＣＩａ・ＣⅡ・D類と共伴している。従って、土師器坏C・D類と赤焼土器坏・甕・高台付坏は共伴関係にあり、すべて組み合うものと考えられる。以上のように、出土土器の共伴関係と組み合わせについて検討して来た。これらをまとめると第10表のようになる。

なお、第３群としたものは、共伴関係が不明なために第１・２群のいずれにも位置づけることができないものである。また、第１グループとした土師器坏AⅢｂ類・土師器甕ＡＩの類は、群として設定できなかったので第３群土器の中に含めた。

さて、東北地方南部における土師器の編年の大綱は、氏家和典氏（氏家：1957）によって、主に坏形土器を中心に組み立てられた。その後、氏家氏自身をはじめとして、阿部義平・工藤雅樹・桑原滋郎・小笠原好彦・小井川和夫・高橋守克の各氏によって検討が加えられて来た。それによると、第１群土器の土師器坏は、国分寺下層式(奈良時代)、第２群土器の土師器坏は、表杉ノ入式（平安時代）に比定される。また、その他の土師器・須恵器・赤焼土器についても、

これまで述べて来た共伴関係や組み合わせによって同形式に位置づけることができる。

以上の様に、組み合わせ、年代を見て来たが、本群のいずれにも共伴関係が認められなかった土器群については、以下に年代を述べて見たい。

群を設定しなかった土師器坏AⅢｂ類は、器形の特徴は、糠塚遺跡（小井川・手塚：1977）出土の国分寺下層式土器に類例が見られるが、外面にヘラミガキが施されておらず国分寺下層式と異なる。従って、所属時期を限定できない。土師器坏AⅢｂ類と共伴している土師器甕ＡⅠ類についても、時期を限定することはできない。

土師器坏ＡⅠｉｂ類は、栗遺跡（仙台市教委：1979）出土土器に類例が見られ、栗囲式期に属するものである。

土師器坏ＡⅠⅱa類は、糠塚遺跡出土土器に類例が見られ、国分寺下層式期に属する。

土師器坏ＡⅡｉｂ類は、現在のところ報告例がない。しかし、体部外面に軽い段をつくり、その上に沈線を施していることや、内面に明瞭な段が残っていることから栗囲式に比定できると思われる。

土師器坏AⅢａ類は、糠塚遺跡出土土器に類例があり、国分寺下層式に属するものである。

土師器坏Ｂ類は、現在のところ報告例は少ないが、器形・器面調整などの特徴から、国分寺下層式期に属する可能性がある。

土師器甕AⅡⅲ 類は、住社式から国分寺下層式まで共通して出土する土器であり、時期を限定することはできない。

土師器甕ＢⅠ・ＢⅢ類は、住社式から表杉ノ入式まで共通して出土するもので、時期を限定することはできない。

土師器甕BⅢ類は、栗囲式及び国分寺下層式に共通して出土するもので、時期を限定できない。

土師器高台付坏Ａ・Ｂ類は、いずれも、製作に際しロクロを使用しており、表杉ノ入式期に属するものである。

土師器蓋は、製作に際しロクロを使用しており、表杉ノ入式期に属するものである。

土師器耳皿は、製作に際しロクロを使用したかどうかは不明である。しかし、現在のところロクロを使用した例や表杉ノ入式土師器と共伴して出土する例が各地で報告されており、表杉ノ入式期に属するものと考えられる。

土師器手捏ね土器は、共伴関係がわからず、時期は不明である。

須恵器坏Ａ類は、日の出山窯跡群（宮城県教育委員会：1970）出土土器などに類例が見られ、８世紀前半から中葉にかけての年代が与えられている（岡田・桑原：1974）

須恵器坏Ｂ類は、回転ヘラケズリの再調整があるが、ヘラ切り痕の残っているものである。

糠塚遺跡などでは、国分寺下層式に伴って出土する例が多い。

須恵器坏ＤⅠ類は、現在のところ県内では類例が少ない。器形的には、国分寺下層式に伴う須恵器坏に類似している。

須恵器甕Ｂ類・長頸壺・短頸壺・須恵器蓋Ａ・Ｂ類は、出土例が少なく時期は不明である。

第10表　出土土器の組み合わせ

	土師器						須恵器					赤焼土器		
	坏	甕	高台付坏	蓋	耳皿	手捏土器	坏	甕	長頸壺	短頸壺	蓋	坏	甕	高付台坏
第Ⅰ群	AⅡiia．AⅡiib					○								
第Ⅱ群	CⅠa．CⅠb．CⅡ．D	AⅡi．AⅡii．C．D					CⅡ．DⅡ	A				○	○	A
(第Ⅲ群)	AⅠib．AⅠiia．AⅡib AⅢa．AⅢb．B	AⅠ．AⅢiii．BⅠ BⅡ．BⅢ	A　B	○	○	○	A．B．CⅠ DⅠ	B	○	○	A B	○		B

ハ．出土土器に関する問題点

〔第１群土器〕

第１群土器の土師器は、製作に際しロクロを使用しないものであり、国分寺下層式に比定される。しかし、その中には、これまで国分寺下層式とされて来た土器群と器面調整の上で幾分様相の異なる土器が含まれており、以下、それについて考察する。

国分寺下層式は、1967年に氏家和典氏によって型式が設定された（氏家：1967）。その後、同型式は、阿部義平（阿部：1968）・桑原滋郎（桑原：1976）・小井川和夫・手塚均（小井川・手塚：1977）・小井川和夫・高橋守克（小井川・高橋：1977）等によって検討が加えられて来た。それによると、国分寺下層式の特徴は次の様になる。

１、製作に際しロクロを使用せず、底部形態には丸底・平底の両者がある。それぞれの外面には、段のほかに沈線の巡るものもあり、さらに段・沈線の巡らないものも含んでいる。段や沈線の位置は、体部中央か底部近くであり、これらの段や沈線に対応する内面に特別に認識できる変化を持たない。

２、器面調整は、内面にはヘラミガキ、黒色処理が施されており、外面にはヘラミガキ（段・沈線以上または全面）に施されるものが主体をなす。また、ヘラケズリが段・沈線の下ばかりでなく、上にもおよぶ場合がある。

次に、第１群土器について検討してみる。本遺跡における第１群土器は、体下部に沈線が巡っている丸底の土師器坏であり、内面には段などの明瞭な変化を持たない。器面調整の違いに

よって、ヘラミガキが施されるもの（ＡⅡⅱａ類）、ヘラミガキが施されないもの（ＡⅡⅱｂ類）の二者に分かれた。後者は、前述した様に、従来から国分寺下層式と呼ばれているものである。前者は、栗囲式と呼ばれているものに類似している土器であり、塩沢北遺跡（藤沼：1971）、砂押川遺跡（桑原：1976）出土土器などに類例が見られる。塩沢北遺跡出土土師器坏について藤沼は栗囲式に含め、砂押川遺跡出土土師器坏について桑原は、従来の型式にあてはめ、一応栗囲式に範疇に含めた上で、形態的な特徴などから栗囲式と国分寺下層式の中間的な型式を予想している。しかし、いずれの遺跡でも共伴関係は明白に報告されていない。

ところで、本遺跡においては、従来栗囲式、もしくは栗囲式よりも新しい時期のものとされて来たＡⅡⅱｂ類と国分寺下層式の土器であるＡⅡⅱａ類は、第２号住居跡内において共伴して出土しており、ＡⅡⅱｂ類土器は、国分寺下層式に含まれることが明らかになった。

しかし、ＡⅡⅱｂ類土器は、第２号住居跡において１点のみ出土しており、資料的には非常に少ないために、本遺跡での出土例を持って普遍化することは出来ない。今後の報告例の増加に期待しその上さらに検討して見たい。

〔第２群土器〕

第２群土器は、表杉ノ入式に比定される土器群である。本遺跡では、第２群土器をすべて包括して表杉ノ入式に比定される土器群として扱って来たが、表杉ノ入式期の住居跡間で重複関係（調査区西側で４軒、中央で３軒）が認められ、表杉ノ入式期の住居跡間でも時期差のあることが確認されている。また、各住居跡からの出土土器を検討しても、住居跡ごとに出土土器の種類や土器の器面調整に違いが見られる。ここでは、これらのことについて、これまでの研究成果をふまえて、比較・検討して見たい。

表杉ノ入式期の住居跡は、第４・５・６・７・８・９・10・11号住居跡である。その中から土師器坏を伴い比較的図化された数量の多い第４・５・11号住居跡を選び、これらの住居跡を中心として考えて見る。

まず、土師器坏について考えてみると、底部を回転糸切りで切り離し、再調整の加えられていないＣⅡ類・一部に再調整が加えられてはいるが回転糸切り痕が残っているＣＩａ・ＣＩｂ類、再調整が施され底部切り離し技法が全く不明なD類とがある。このうち、ＣＩｂ類は、底部を除いて、内外面にヘラミガキ、黒色処理が施されているものであり、特殊なものとしてここでは除いて考える。なお、再調整は、いずれも手持ちヘラケズリによるものである。

底部切り離し後の再調整の有無で考えて見ると、再調整が全く施されていない土師器坏ＣⅡ類のみを出土する住居跡と手持ちヘラケズリの再調整が施され底部切り離し技法が不明なD類を出土する住居跡とに大きく分けることが可能である。前者の例としては、第４号住居跡（土師器坏ＣＩｂ類が共伴）があり、後者の例としては第５（ＣⅡ・ＣＩａ類が共伴）・11（ＣⅡ

類が共伴）号住居跡がある。

第11号住居跡と第４号住居跡は、第８号住居跡をはさんで遺構が重複しており、第11号住居跡⟶第８号住居跡（第11号住居跡からの増改築の可能性あり）⟶第４号住居跡という変遷が確認されている。第８号住居跡においてもD類が出土している。以上のことから、D類を出土する第５・11号住居跡よりもＣⅡ類のみを出土する第４号住居跡の方が新しい時期のものであることがわかる。

次に、須恵器・赤焼土器との共伴関係から述べてみたい。

第４号住居跡において、赤焼土器が貯蔵穴内からまとまって12点出土した。坏・甕・高台付坏と種類も豊富である。須恵器は１点も含まれておらず、土師器の出土例よりも赤焼土器の出例の方が圧倒的に多い。

第５号住居跡からは、須恵器坏・赤焼土器坏が出土し、第11号住居跡からは、赤焼土器が出土している。第５号住居跡には須恵器坏が伴い、第11号住居跡には伴わないという違いこそ認められるが、第４号住居跡における赤焼土器の出土例と第５・11号住居跡における赤焼土器の出土例を比較すると、第５・11号住居跡の方が非常に少ないことがわかる。他の住居跡については、出土している土器の種類や組み合わせにバラエティが認められるが、個々の住居跡における出土遺物が少なく、検討ができない。

阿部義平（阿部：1968）、桑原滋郎（桑原：1969）は、主として土師器坏を中心として細分を試みており、成形・調整技法の観察からいくつかの類型に分け、それぞれの類型には、製作技法の手数の省略化の方向で変遷が認められるとしている。

本遺跡においても、手持ちヘラケズリの再調整が施されている土師器坏D類を出土する住居跡より、再調整が全く施されていないＣⅡ類のみを出土する住居跡の方が、時期的に新しいことがわかった。

また、岡田茂弘・桑原滋郎（岡田・桑原：1974）、小笠原好彦（小笠原：1976）の各氏は、表杉ノ入式をそれぞれの観点から細分しているが、本遺跡での調査結果からも第４号住居跡から出土した土器群と、第５・11号住居跡から出土した土器群とが時期的に違うものと考えられ、共伴している土器についても違いが認められた。

しかし、県内において報告例を求めてみると、本遺跡第４号住居跡出土土器は、御所内遺跡第３号住居跡（小井川：1971）、北沢遺跡第１号住居跡（斎藤・真山：1978）などに類例が求められるが、第５・11号住居跡出土土器については報告例がない。従って、本遺跡の調査結果では表杉ノ入式が細分される可能性のあることが指摘できるものの、資料的に不足しており、今後の類例の増加を待ちたい。

２．遺　構

イ．竪穴住居跡とその年代

〔年代〕

出土土器と竪穴住居跡の重複関係をもとに竪穴住居跡の年代を検討すると次の様になる。

国分寺下層式期	第２号住居跡（奈良時代）
表杉ノ入式期	第４・５・６・７・８・９・10・11号住居跡（平安時代）
時　期　不　明	第１・３号住居跡

第１号住居跡出土の土師器坏は、器形および外面器面調整とから時期を限定することができなかったので、ここでは時期不明としておく。第３号住居跡は、床面出土の遺物がないので時期不明とした。第６住居跡については、図示できる床面出土の土器はないが、表杉ノ入式期の住居跡３軒を切っていることや、破片ではあったが床面から赤焼土器の口縁部、貼り床内からはロクロを使用している内黒の土師器の底部（回転糸切り痕のある）が出土していることから、表杉ノ入式期の住居跡にした。

〔竪穴住居跡の分布〕

五輪Ｃ遺跡からは、11軒の竪穴住居跡が検出されている。それらは、南側に向って傾斜している斜面の中腹から上の比較的緩やかになっている部分を中心に分布している。表杉ノ入式期の住居跡同士が調査区西側で４軒、中央で３軒切りあっており、住居跡が偏在している。また、いずれも住居跡の北壁は、斜面傾斜に対してほぼ平行になっており、規則性が見られる。このような規則性は、後述する住居跡の構造とも深い関係があり、住居跡が斜面に立地しているという地形的な制約から来るものであると考えられる。

〔竪穴住居跡の構造〕（第12表）

（平面形・規模）　ほとんどの住居跡が削平や住居跡間の切り合いによって壁および床の一部が失われているために、平面形・規模の判明するものはない。しかし、残存壁からいずれも方形を基調とする住居跡であると考えられる。第１・３・４・５・６・８・10号住居跡については、東西軸の長さだけが判明しており、それぞれ、約3.6m、約4.2m、約5.0m、約4.2m、約4.0m、約3.5mである。規模は、東西壁だけから考えてみると、第５号住居跡の5.0mを除くと、3.5～4.2mと比較的まとまっている。第11号住居跡は、平面形は台形で、長軸約3.4m短軸約2.4mであり、他の住居跡よりもやや規模が小さい。

（壁）　全体として遺存状能は良くない。地山を掘り込んで住居跡を構築しているものは、地山を壁としているが、基本層位第Ⅱ層を掘り込んでいるものは、基本層位第Ⅱ層をそのまま壁として使用している。壁の立ち上がりは、緩やかなものと急なものとがあるが、壁の削平がかなり進んでおり、詳細に述べることができない。

（床面）　掘り方底面をそのまま床面としているものや、部分的に貼り床をしているものがある。部分的に貼り床をしているものの中には、第７・８号住居跡のように増改築による拡張のために、重複した古い住居跡部分に貼り床をして新しい床としているものもある。また、基本層位第Ⅱ層を床としている住居跡には、必ず第Ⅱ層上に貼り床がなされている。このことは、基本層位第Ⅱ層が軟弱であるために、貼り床をして堅固にしてから床として使用しているものと考えられる。地山を堀り込んでいる住居跡は全て地山をそのまま床として使用している。

（柱穴）　住居跡内で柱穴と考えられるピットが検出されたのは、第７号住居跡の１個だけであり、各住居跡とも柱穴については不明である。

（周溝）　第１号住居跡は、カマド部分を除いて北壁沿いと東壁沿いの北側に、第３号住居跡は、北壁沿いと西壁沿いに、第10号住居跡は、カマド西側の北壁沿いと西壁沿いに認められた。他の住居跡からは周溝は認められなかった。周溝のある住居跡とない住居跡とでは、ない住居跡の方が多い。

（カマド）

ａ．カマドの位置

カマドの位置は、第11号住居跡が東壁中央、その他の住居跡においては、ほとんどが北壁中央か北壁東寄りである。また、第７・９号住居跡カマドも北壁に付設されている。このように本住居跡においてカマドの位置が北壁に多いということは、次に述べる事に起因しているものと考えられる。つまり、五輪Ｃ遺跡の各住居跡は、住居跡の分布でも述べたように、北から南に向って傾斜している斜面に立地している。従って、カマドの位置も必然的にこの地形的な制約を受けることになり、カマドが北壁に構築されることが多くなると考えられる。

ｂ．カマドの構造

カマドの燃焼部構築方法には、地山を削り出して構築するもの、粘土を積み上げて構築するものの二者がある。前者のものとしては、第２号住居跡（国分寺下層式期）・第10号住居跡（表杉ノ入式期）があり、後者のものとしては、第４・５・６・７・９・11号住居跡（表杉ノ入式期）がある。以上のことからもわかるように、本遺跡においては二者の違いは時期差から生じるものではないと思われる。また、第７号住居跡カマドのように、両側壁にオサエとして土師器甕を使用しているもの、第５号住居跡カマドのように、支脚のあるものなどがある。

煙道は、トンネル状になっているものと溝状になっているものとがある。溝状になっている

ものは、本来はトンネル状になっていたものと考えられる。煙道は水平のものと先端から燃焼部に向って傾斜しているものとがある。

（貯蔵穴状ピット）　住居跡床面から検出されたピットのうちで、規模や深さが他のピットに比較して大きいものを貯蔵穴状ピットとした。本遺跡では表杉ノ入式期の住居跡である第４・５・６・７・９・10号住居跡から検出されている。貯蔵穴状のピットの位置は、いずれもカマド右脇にあり強い斉一性がある。第４・５号住居跡の貯蔵穴状ピットからは、多量の遺物が出土している。また、他遺跡の表杉ノ入式期の住居跡からも同様のピットが検出されることが多く、本遺跡のあり方と類似している。国分寺下層式期の住居跡である第２号住居跡からは検出されなかった。平面形及び規模は第11表の通りである。

第11表によると、平面形は楕円形か円形のどちらかである。楕円形のもので長軸が 1.0mを超えるものは第５号住居跡のピットのみであり、その他のピットは長軸が約 0.8〜1.0mの間であり差異はほとんどない。平面形が円形のものは、どちらも直径が約0.6mであり、楕円形のものよりやや小形である。前者も後者も深さは20〜40cm の間におさまる。

第11表　貯蔵穴状ピット計測表

	第４号住居跡	第５号住居跡	第６号住居跡	第７号住居跡	第９号住居跡	第10号住居跡
平面形	円　形	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	円　形
規模（長軸×短軸）	径 0.6m	1.3m×1.0m	1.0m×0.5m	0.9m×0.5m	0.8m×0.6m	径 0.6m
深さ	40cm	40cm	20cm	20cm	20cm	30cm

まとめ

五輪Ｃ遺跡からは、11軒の竪穴住居跡が検出され、各項目毎にまとめてみた。その結果、どの住居跡も方形を基調とした住居跡であり、第２・８・11号住居跡を除いて、カマドの位置な

第12表　住居跡一覧

住居跡番号	遺構確認面	平面形	規模（m）	カマド					周溝	柱穴	貯蔵穴状ピット	時期
				付設場所	長軸方向	地焼部の構築方法	煙道の傾斜	煙り出しピット				
1	地山	不明	3.6×？	北壁中央	南北	地山削り出し	↗	有	一部有			不明
2	地山	不明		北壁	南北	地山削り出し	↗	有				奈良時代（国分寺下層式期）
3	地山	不明	4.8×？						一部有			不明
4	地山	不明	4.2×？	北壁中央東寄り	南北	粘土	→	有			有 北東隅	平安時代（表杉ノ入式期）
5	基本層位第Ⅱ層	不明	5.0×？	北壁中央(新)北壁中央東寄り(旧)	南北南北	粘土	↗	有有			有 北東隅	平安時代（表杉ノ入式期）
6	基本層位第Ⅱ層	不明	4.2×？	北壁中央東寄り	南北	粘土	→	有			有 北東隅	平安時代（表杉ノ入式期）
7	基本層位第Ⅱ層	不明		北壁東寄り	南北	粘土	↗	有		1	有 北東隅	平安時代（表杉ノ入式期）
8	地山	不明	4.0×？									平安時代（表杉ノ入式期）
9	第７号住居跡貼り床下	不明		北壁	南北	粘土		有			有 中央	平安時代（表杉ノ入式期）
10	地山	不明	3.5×？	北壁中央東寄り	南北	地山削り出し	↗	有	一部有		有 北東隅	平安時代（表杉ノ入式期）
11	第８号住居跡貼り床下	台形	3.4×2.6	東壁中央	東西	粘土						平安時代（表杉ノ入式期）

どに共通性が見られた。しかし、カマドの構築方法・周溝・貯蔵穴状ピット・床面・壁などは、個々の住居跡においてそれぞれ違ったあり方を示していた。貯蔵穴状ピットのある住居跡においては、必ずカマドの右脇に位置しているという共通性が見いだされた。しかしながら11軒の住居跡を総体的に見ると類別できるほどのまとまりを示さず、時期差（国分寺下層式期・表杉ノ入式期・時期不明）による大きな違いも見いだせなかった。

ロ．その他の遺構とその年代

１．竪穴遺構とその年代

２基の竪穴遺構が検出されている。第２号竪穴遺構からは、底面から土師器甕が出土している。所属時期は、甕の特徴から古墳時代～平安時代であろう。第１号竪穴遺構からは出土遺物が無く時期は不明である。いずれも、件格は不明である。

２．焼土遺構とその年代

９基の焼土遺構が検出されている。平面形は、楕円形・円形・正方形・長方形とバラエティに富んでいる。いずれも、底面や壁面に焼け面が見られ、土壙の中で火を使用したものと思われる。底面や堆積土に木炭・焼土が混入していることが多い。

このような遺構は、宮前遺跡（宮城県教育委員会：1975）、宇南遺跡（斎藤：1979）などに類例が見られる。しかし、その性格、年代は明らかにされていない。本遺跡においては、第２・３・４・５・６・８号焼土遺構の堆積土からは、土師器坏・甕・須恵器坏・赤焼土器坏が出土しているが、年代を決定する資料はない。第６号焼土遺構は、第７・９号住居跡を切って構築しており、平安時代およびそれ以降のものである。いずれも、性格は不明である。

３．土壙とその年代

４基の土壙が検出されている。第１・２・３号土壙の堆積土からは、土師器坏・甕が出土しているが、年代を決定する資料はない。しかし、第１号土壙は、第５号住居跡、貼り床下において検出されており、平安時代以前の可能性が強い。また、第３号土壙は、第８号住居跡堆積土を切っており、平安時代以降のものであろう。いずれも、性格は不明である。

４．井戸跡とその年代

１基検出されている。堆積土から土師器・須恵器・赤焼土器が出土しているが、年代を決定する資料はない。所属時期は不明である。井戸西側で検出された落ち込みについては、堆積土から、土師器坏・甕・須恵器坏・甕が出土している。しかし、年代を決定する資料はなく、時期は不明である。

５．溝とその年代

５本検出されている。いずれも、住居跡を切っており、住居跡よりは新しい。第４・５号溝は、出土遺物が無く時期は不明である。第１号溝の堆積土からは、土師器坏・甕・高台付坏・須恵器坏・甕・赤焼土器が出土し、第３号溝の堆積土からは、土師器坏・甕が出土している。第２号溝からは、底面から土師器甕・堆積土から土師器坏・甕が出土している。しかし、いずれも年代を決定できる資料ではない。

６．ピットとその年代

住居跡外からピットが、12 個検出されている。ピット１からは、ロクロ使用の土師器坏・甕・赤焼土器坏が出土している。出土遺物から、平安時代のものと考えられる。その他のピットについては、時期は不明である。また、性格についても不明である。

７．遺物包含層とその年代

表土下で２枚の遺物包含層が検出されている。出土遺物を見ると、各層において時期の異なる遺物が混在して出土しており、二次堆積の可能性が強い。堆積した時期については不明である。

Ⅵ. ま　と　め

今回の調査の結果を要約すると次のようになる。

１．五輪Ｃ遺跡は、奥羽山脈から派生する築館丘陵の末端で、高清水町のほぼ中央にある標高約 50mの小丘陵の南斜面に立地している。

２．縄文時代・弥生時代・古墳時代・奈良時代・平安時代の遺物や遺構が発見されている。

３．遺構については、竪穴住居跡11 軒、竪穴遺構２基、焼土遺構９基、土壙４基、井戸跡１基溝５本、ピット12 である。竪穴住居跡以外は、時期の不明なものが多い。

　竪穴住居跡は、国分寺下層式期１軒、表杉ノ入式期８軒、時期不明のもの２軒である。表杉の入式期のものは、調査区西側で４軒、中央で３軒の重複が認められ、時期差のあることが明らかになった。

４．今回は、バイパスにかかる路線敷内に限って調査が行なわれたが、調査によって明らかにされた遺構の分布から見ると、調査区以外にも遺跡が続くことが推定される。

引用・参考文献

伊　東　信　雄　　(1957)　「古代史」「宮城県史」第１巻

高　清　水　町　　(1976)　「高清水町史」

氏　家　和　典　　(1957)　「東北土師器の型式分類とその編年」歴史第14輯

(1961)　「土器」「陸奥国分寺跡」所収、陸奥国分寺跡発掘調査委員会編

(1967)　「陸奥国分寺跡出土の丸底坏をめぐって－奈良・平安期土師器の諸問題－」
柏倉亮吉教授還暦記念論集

東北学院大学考古学研究部　(1979)「栗遺跡発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第14集
仙台市教育委員会

小井川　和　夫　　(1978)　「糠塚遺跡」宮城県文化財発掘調査報告書第53集
手　塚　　均

宮城県教育委員会　(1970)　「日の出山窯跡群」宮城県文化財調査報告書第22集

阿　部　義　平　　(1968)　「東国の土師器と須恵器－多賀城外の出土土器をめぐって－」帝塚山考古学№1

桑　原　滋　郎　　(1970)　「ロクロ土師器坏について」歴史第38輯

(1976)　「東北北部および北海道の所謂第Ⅰ型式の土師器について」
考古学雑誌第61巻４号

工　藤　雅　樹　　(1972)　「東北地方における古代土器生産の展開」考古学雑誌第57巻３号
桑　原　滋　郎

小井川　和　夫　　(1977)　「宮城県対馬遺跡出土の土器」宮城史学５号
高　橋　守　克

藤　沼　邦　彦　　(1971)　「塩沢北遺跡」宮城県文化財調査報告書第24集

岡　田　茂　弘　　(1976)　「多賀城周辺における古代坏形土器の変遷」宮城県多賀城跡調査研究所紀要Ⅰ
桑　原　滋　郎

小笠原　好　彦　　(1976)　「東北における平安時代の土器についての二、三の問題」
東北考古学の諸問題

小井川　和　夫　　(1972)　「御所内遺跡」宮城県文化財発掘調査報告書第25集

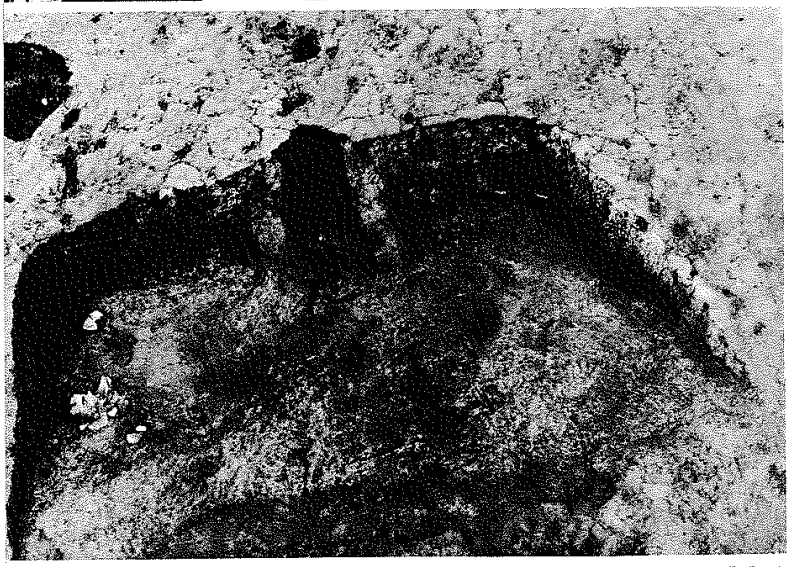
斎　藤　吉　弘　　(1978)　「北沢遺跡」宮城県文化財発掘調査報告書第56集
真　山　　悟

宮城県教育委員会　(1975)　「宮前遺跡」宮城県文化財調査報告書第38集

図版 1

遺跡遠景

第1号住居跡



第2号住居跡

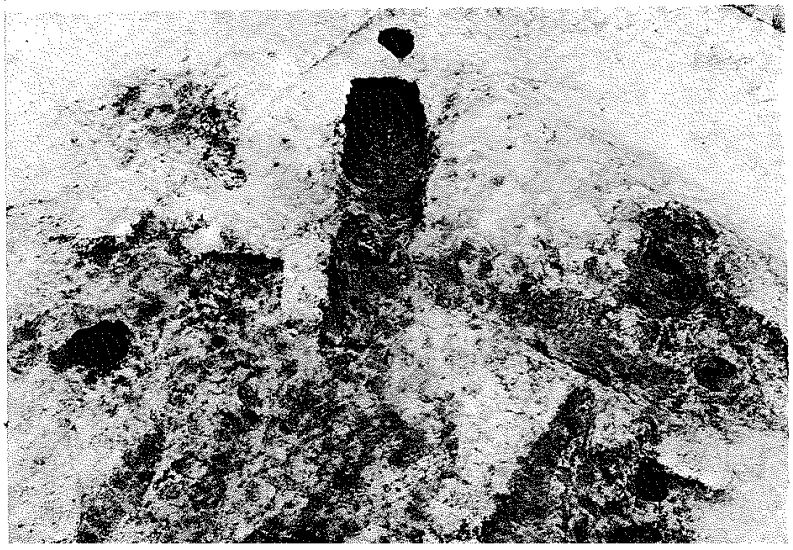


図 版 2

第 3 号住居跡

第 4 号住居跡

第 4 号住居跡
カ マ ド

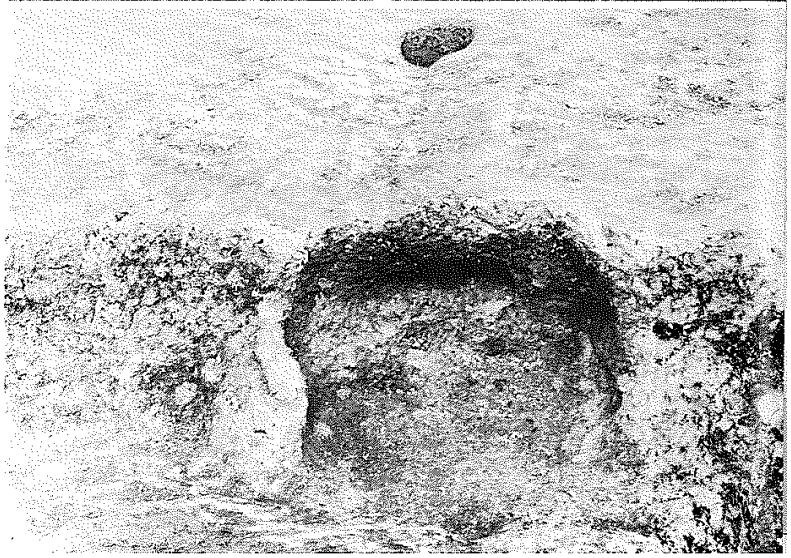
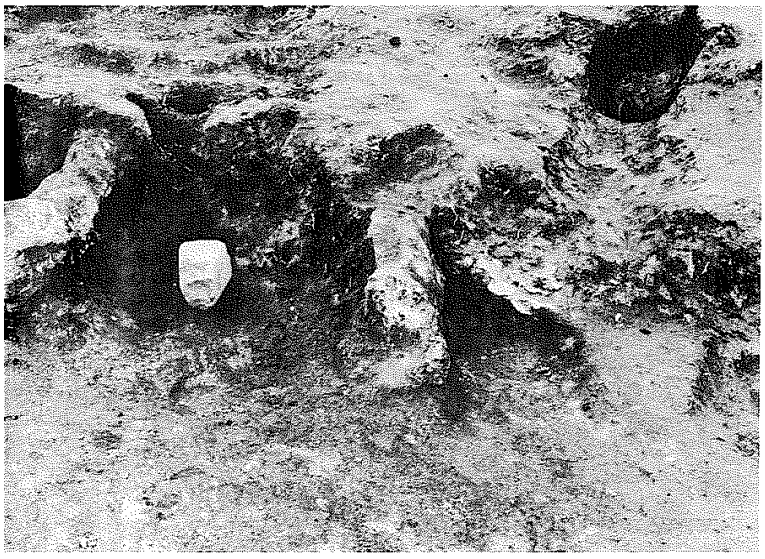


図 版 3

第４号住居跡
貯 蔵 穴

第５号住居跡

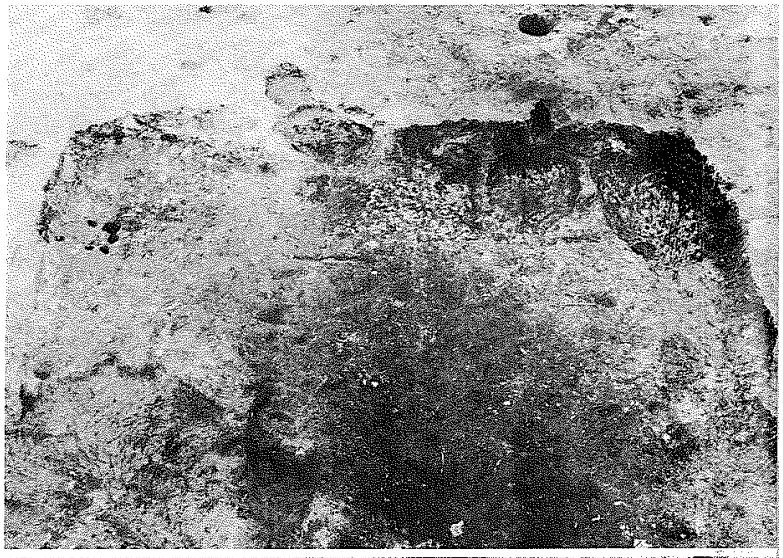


第５号住居跡
カ マ ド

図 版 4

第５号住居跡
貯 蔵 跡

第６号住居跡



第６号住居跡
カ マ ド

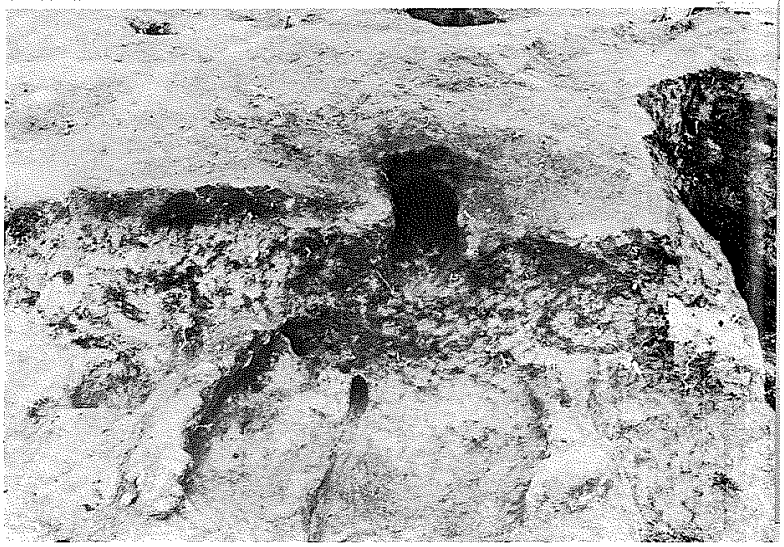
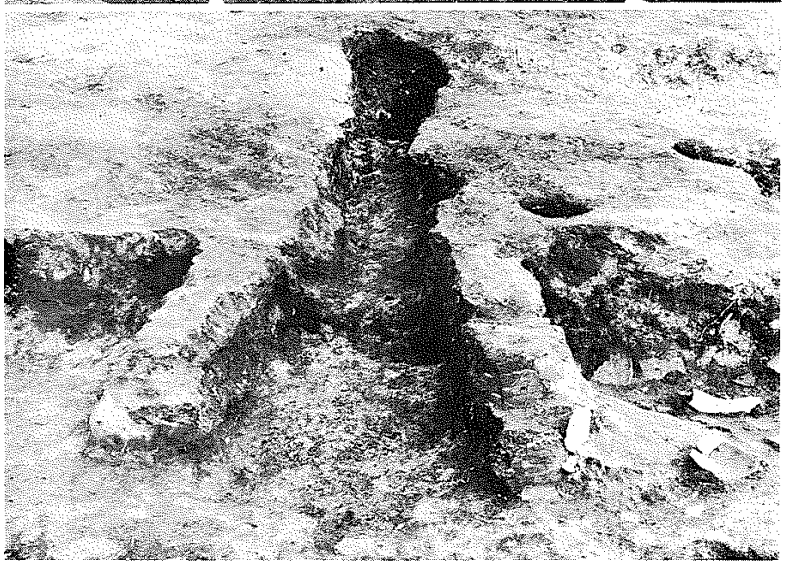
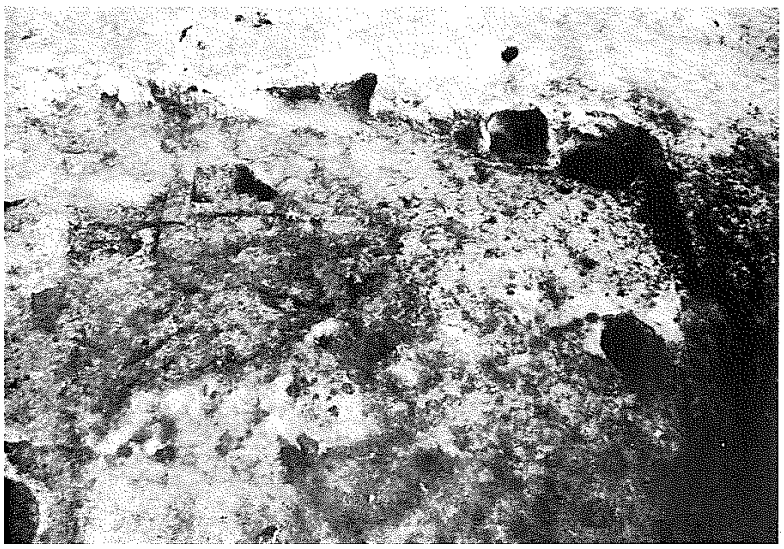


図 版 5

第７号住居跡



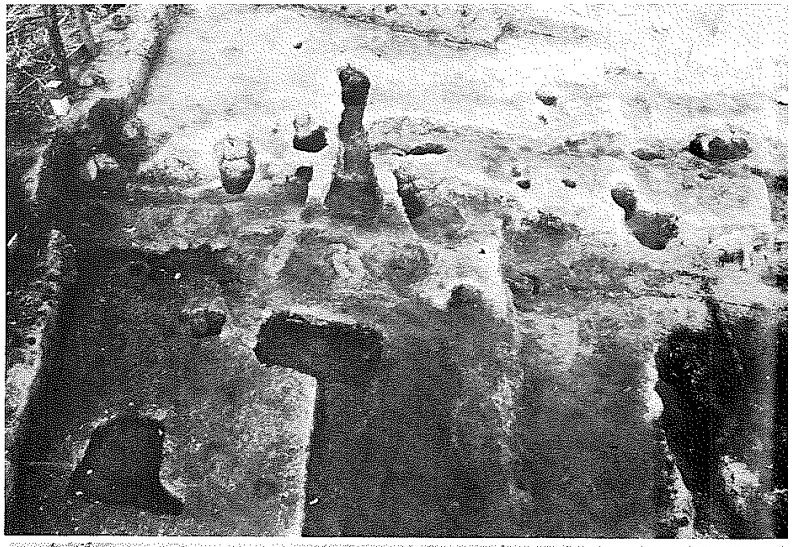
第７号住居跡
カ マ ド



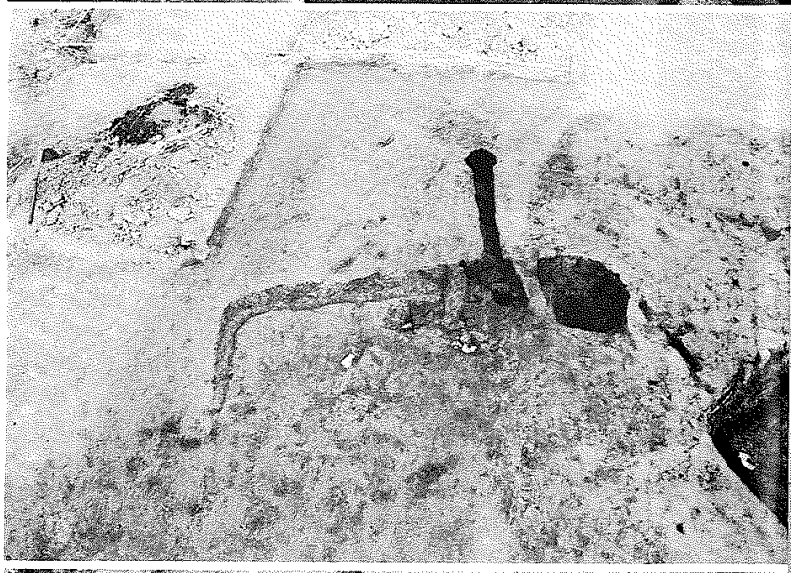
第８号住居跡

図 版 6

第９号住居跡

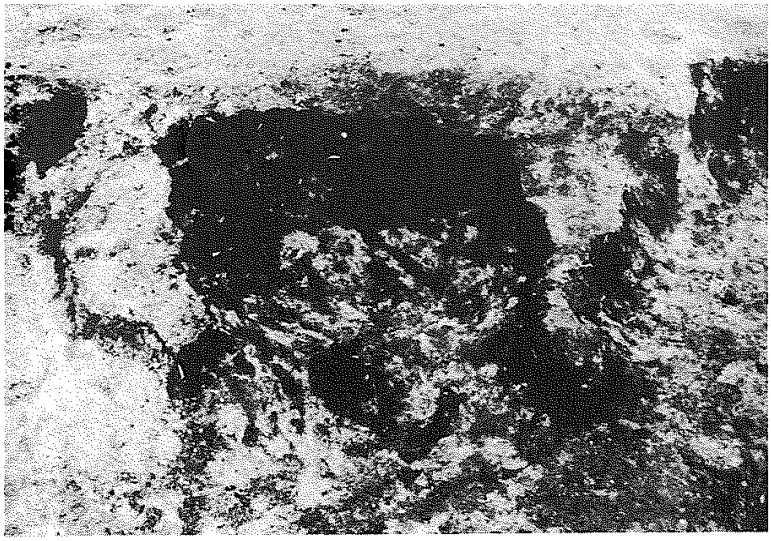


第10号住居跡



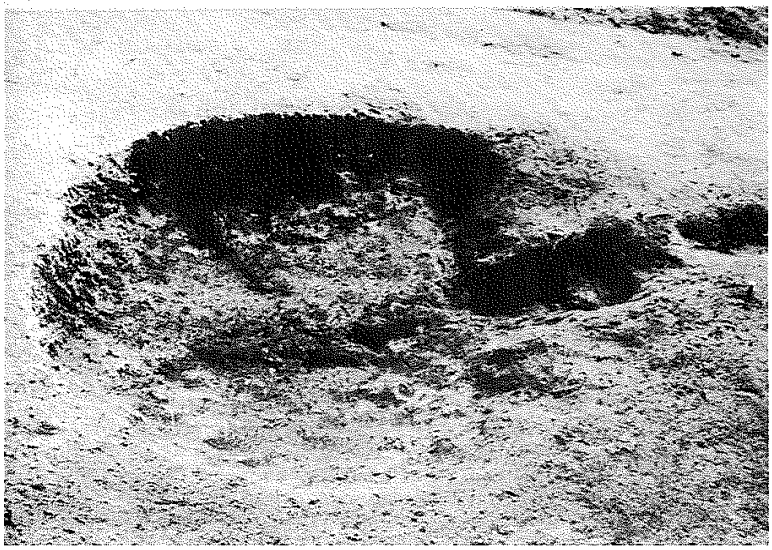
第11号住居跡

図 版 7



第11号住居跡
カ マ ド

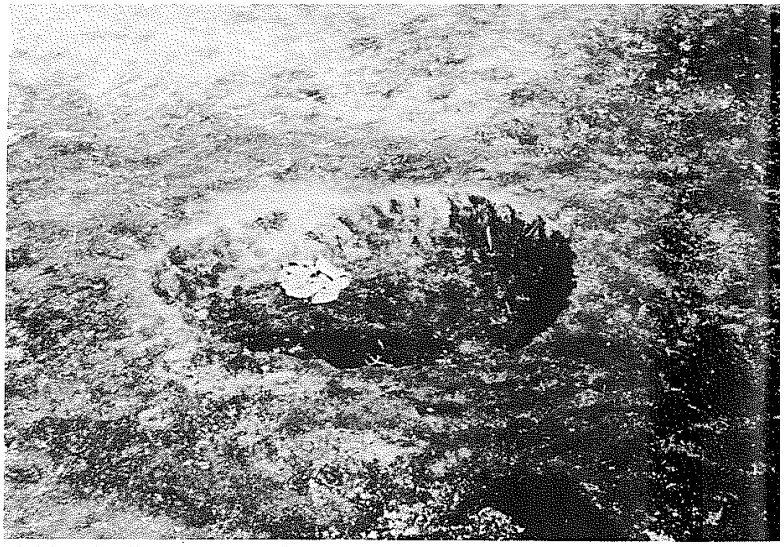
第１号竪穴遺構



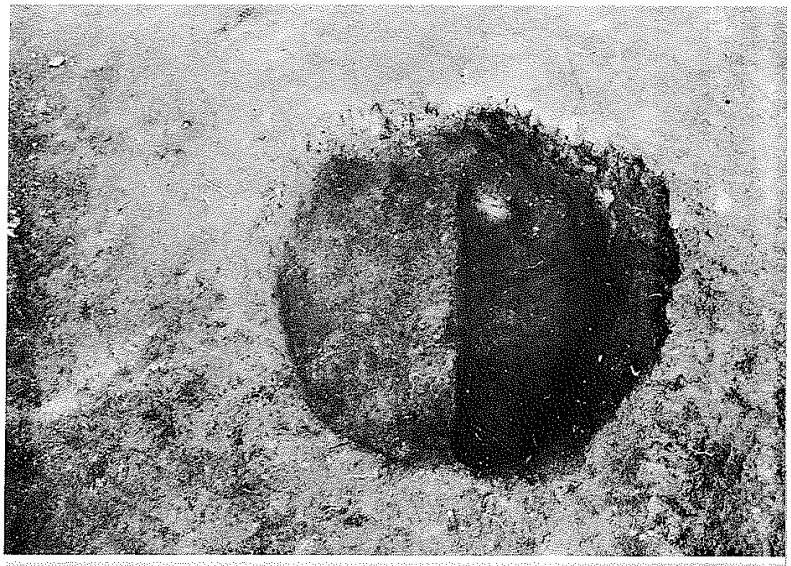
第１号焼土遺構

図 版 8

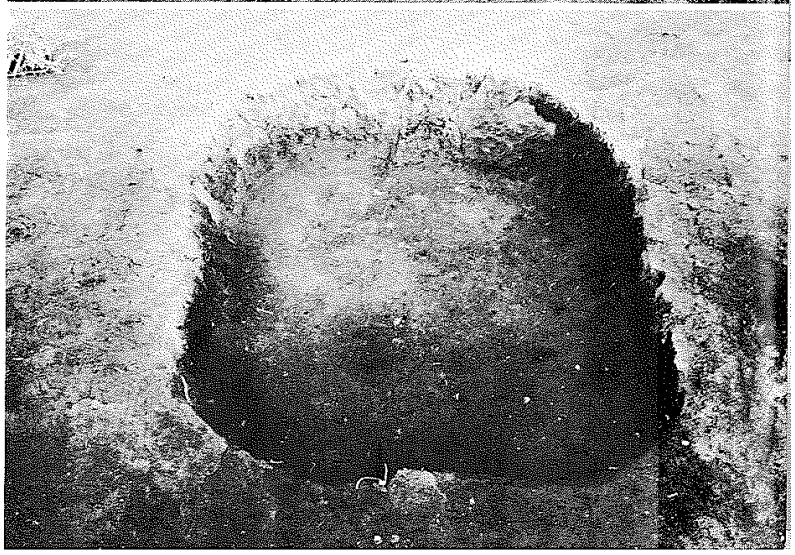
第 2 号焼土遺構



第 3 号焼土遺構



第 4 号焼土遺構



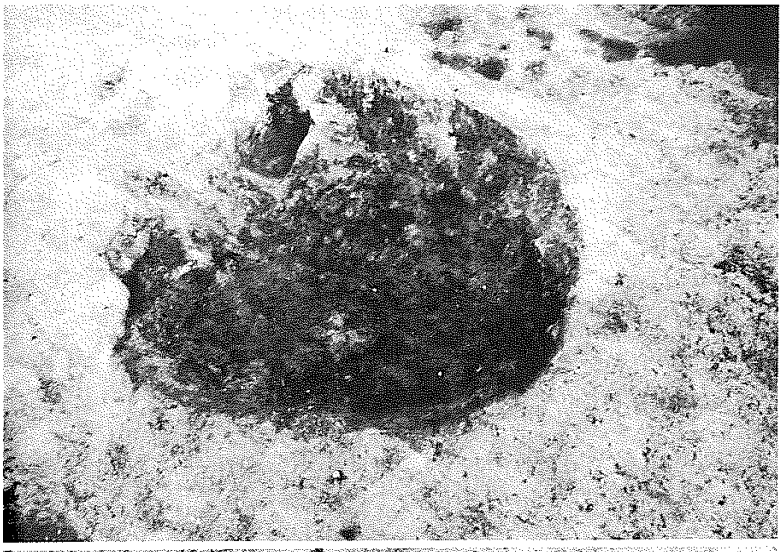
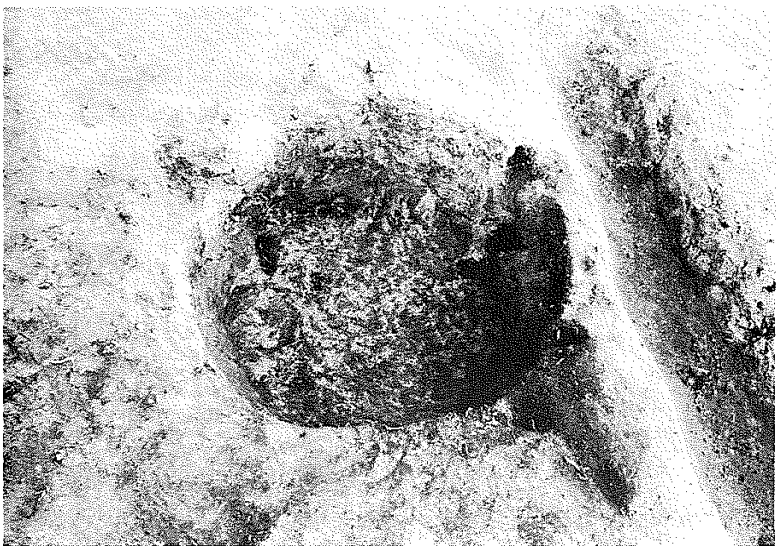


図 版 9

第 5 号焼土遺構

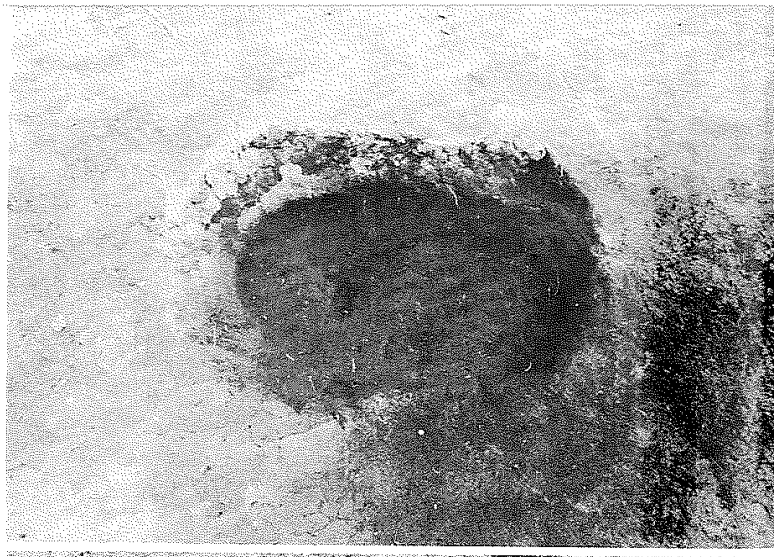
第 6 号焼土遺構



第 7 号焼土遺構

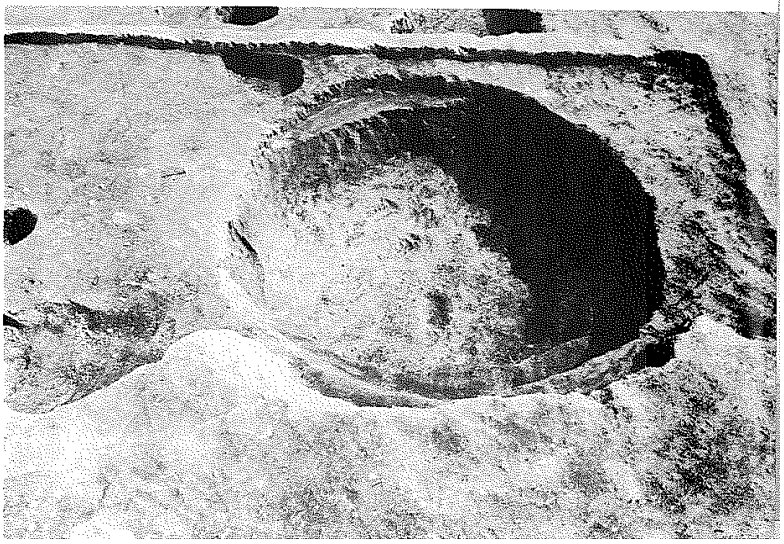
図 版 10

第 8 号焼土遺構



第 9 号焼土遺構

第 1 号土 壙



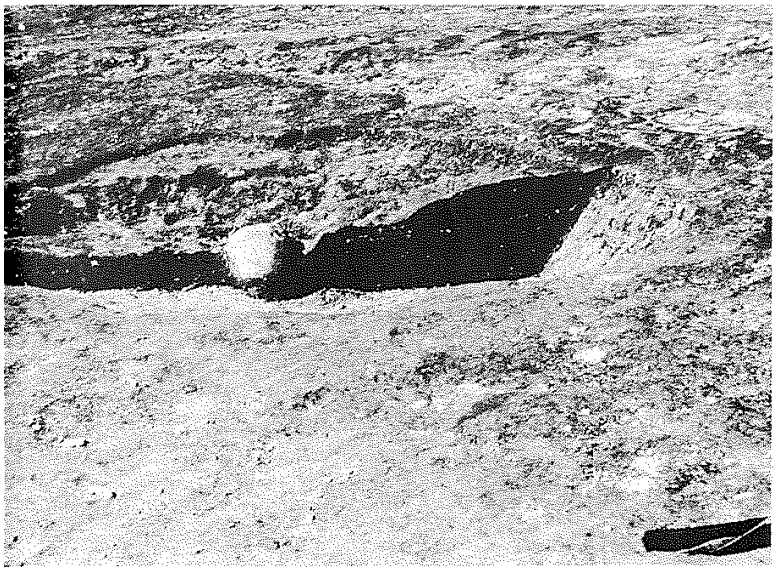
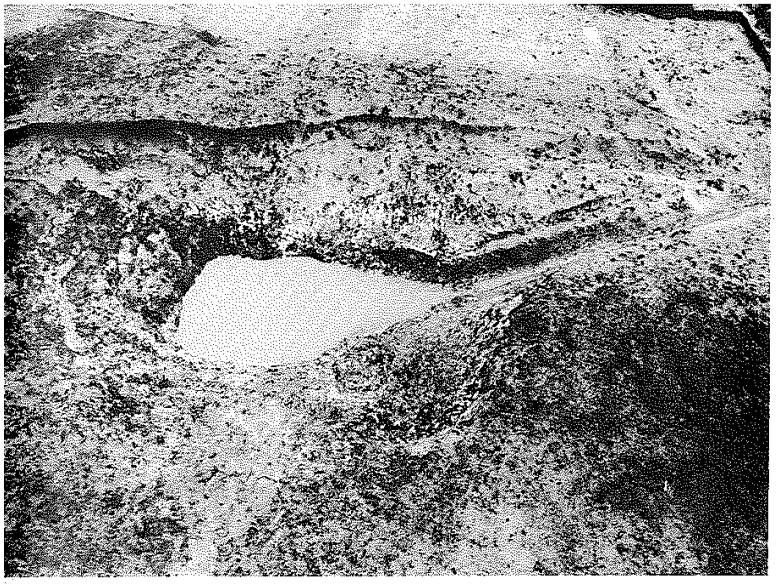


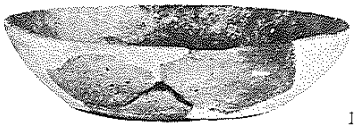
図 版 11

第２号土壙

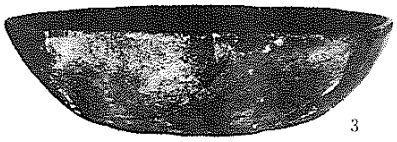


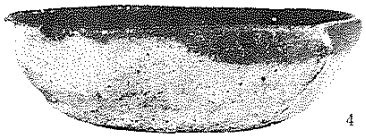
井 戸 跡

図 版 12

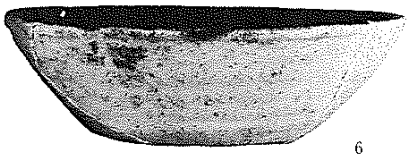

1

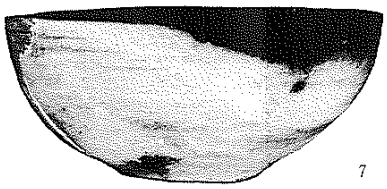
2


3


4

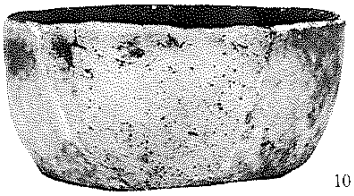
5

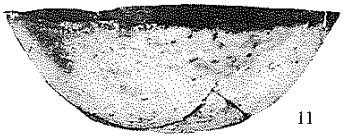

6

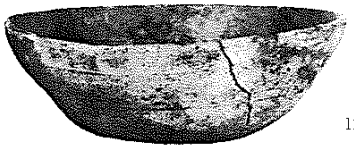

7

8

9

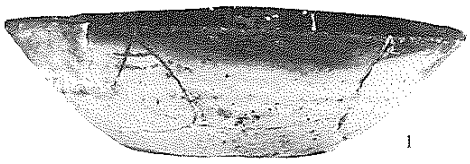

10


11


12

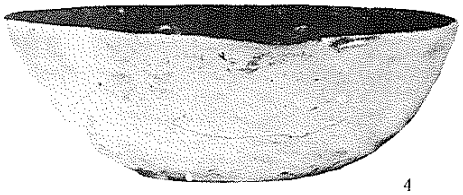
1：第6図3
2：第6図2
3：第40図5
4：第37図1
5：第13図7
6：第13図11
7：第36図2
8：第13図2
9：第29図3
10：第29図11
11：第29図7
12：第36図3
（縮尺不同）

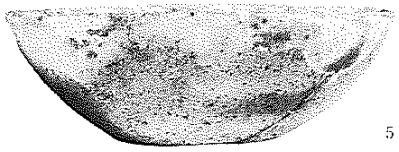
図 版 13


1

2

3


4

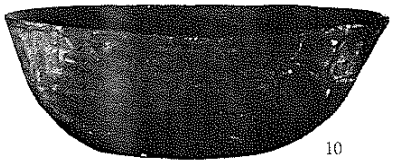

5

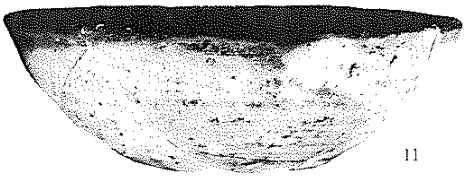
6

7

8

9

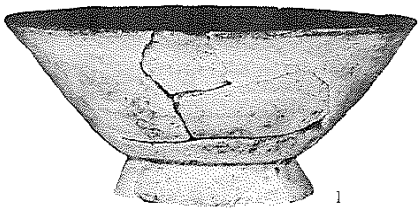

10


11

1：第13図8
2：第17図2
3：第13図10
4：第13図9
5：第14図1
6：第5図1
7：第33図
8：第17図1
9：第23図1
10：第9図3
11：第40図9

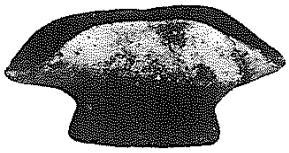
（縮尺不同）

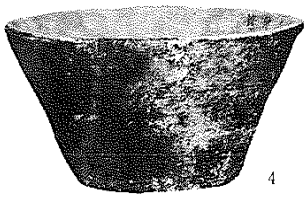
図 版 14

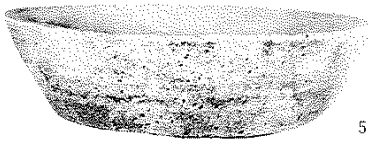

1

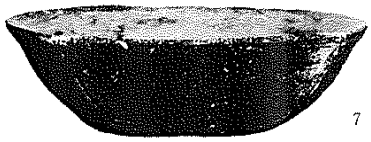
2

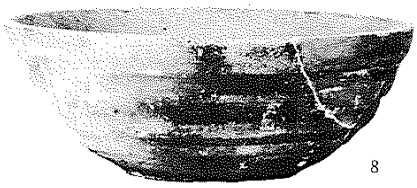
3


4


5

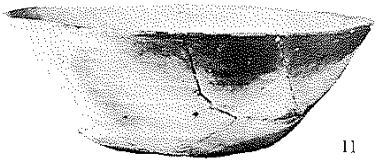

6


7

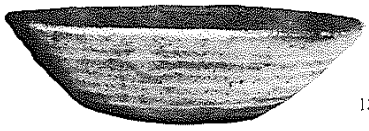

8

9

10


11

12


13

1：第36図5
2：第14図8
3：第33図
4：第43図11
5：第43図8
6：第9図1
7：第20図3
8：第14図3
9：第43図10
10：第41図10
11：第14図2
12：第31図5
13：第20図4

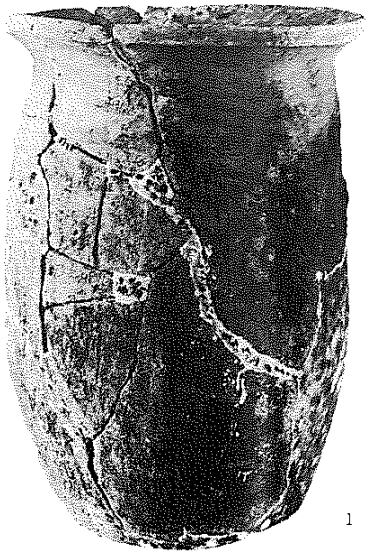
（縮尺不同）

図 版 15

1：第14図10
2：第13図6
3：第29図1
4：第40図14
5：第17図3
6：第41図12
7：第10図1
8：第27図4
9：第14図4
10：第9図9
11：第27図6
12：第29図9
13：第36図8
14：第9図7

（縮尺不同）

図 版 16



1

2

3

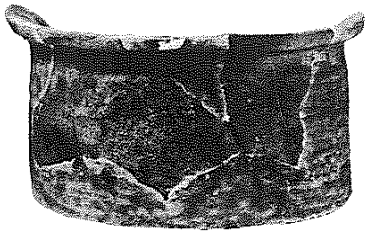
4

5

1：第19図3
2：第36図4
3：第19図1
4：第20図2
5：第9図5

（縮尺不同）

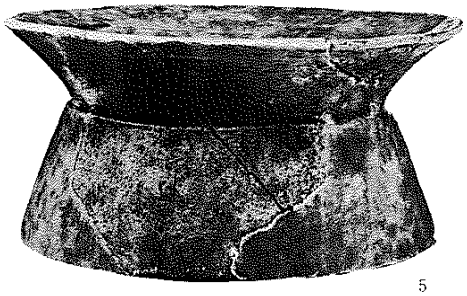
図 版 17


1

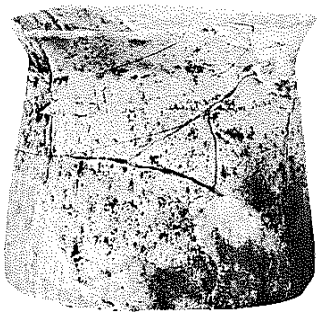
2

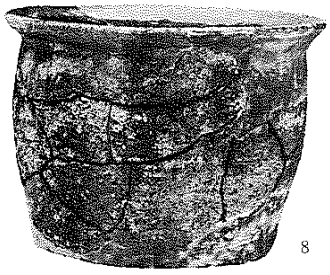
3

4


5

6


7

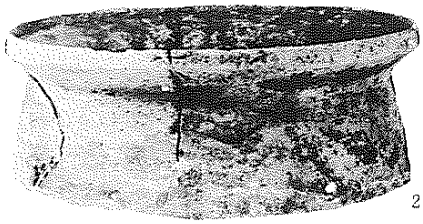

8

1：第19図5
2：第5図2
3：第41図3
4：第19図6
5：第38図1
6：第44図7
7：第38図2
8：第29図10

（縮尺不同）

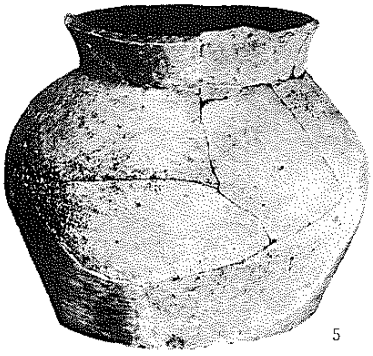
図 版 18

1


2

4

3


5

6

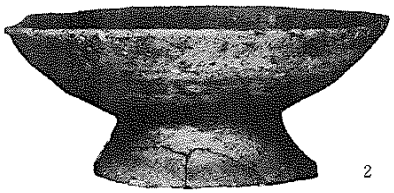
1：第41図 4
2：第14図12
3：第15図 1
4：第20図 5
5：第15図 2
6：第43図12
7：第15図 3

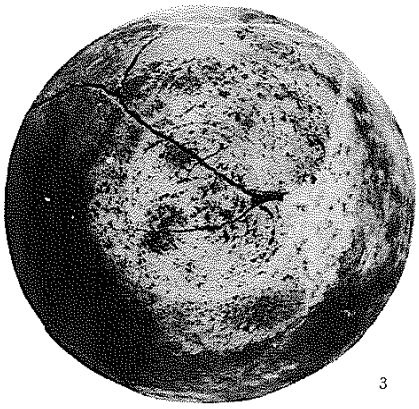
（縮尺不同）

7

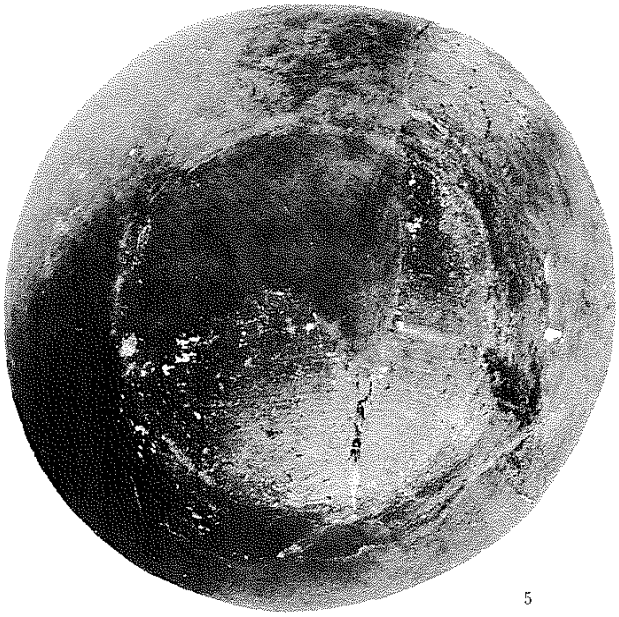
図 版 19

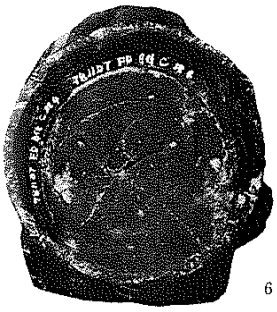
1


2


3

4


5


6

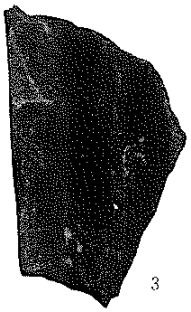
1：第9図7
2：第10図6
3：第36図3
4：第29図1
5：第42図2
6：第25図3

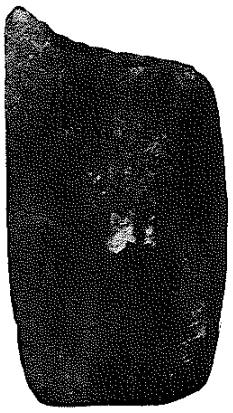
（縮尺不同）

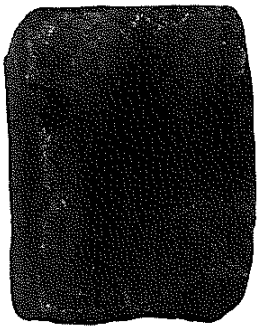
図 版 20

4

1


3


2


5

7

6

1：第47図4
2：第47図6
3：第47図2
4：第47図1
5：第47図5
6：第47図3
7：第27図8

(縮尺不同)

図 版 21

1

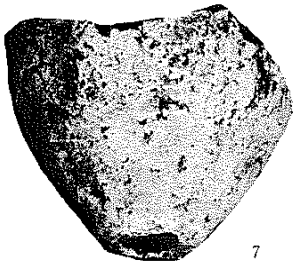
2

3

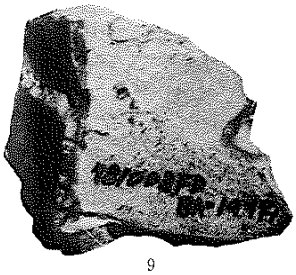
4

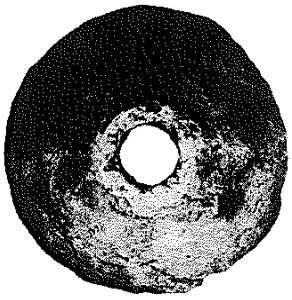
5

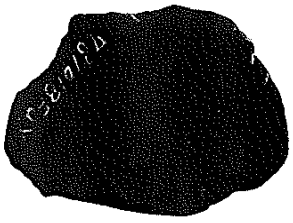
6


7

8


9




10

1：第14図 5
2：第14図 6
3：第14図 7
4：第46図 1
5：第46図 2
6：第46図 3
7：第44図 5
8：第46図 4
9：第46図 5
10：第46図 6

（縮尺不同）

第13表 破片集計表（図示遺物は除く）

種別	器形	部位	器面調整（外面－内面）	第1号住居跡／第2号／第3号／第4号住居跡／第5号住居跡／第6号住居跡／第7号住居跡／第8号住居跡／第9号／第10号住居跡／第11号／第2号竪穴／焼土遺構／土壙／井戸／掘り込み／溝／ピット	基層本位 工層	遺物包含層 1層	2層	地点不明	計
土師器	坏	口縁部	ミガキ－ミガキ（黒色）	1 1 3 1 2 11 2 1 2	18	39	7	13	101
			ミガキ（黒色）－ミガキ（〃）	2 1 1 1 1		8	4	4	22
			ロクロ－ミガキ（〃）	1 2 2 8 22 1 9 19 36 24 2 1 1 3 10 4 1 1 9 1 1 1 1 5 1 4 21 1 3	24	82	9	34	344
			－不明	2 1 1 2 3 1 1 1 1 2 1 1 2 2 4		4		4	33
			ナデ－ミガキ（黒色）	1 10 1 1 1 2 1 1 1	14	10	6	2	51
			－ナデ				1	1	2
			－不明	2			3	2	7
			ケズリ－ミガキ（黒色）		1	8	1		10
			不明－ミガキ（黒色）	1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 4 1 2 2 1	4	29	5	8	69
			－ナデ	1					1
			－不明	1 6 1 2 2 1 1 2 1 1 2 1 1 2 1 2	14	17	4	3	65
		体部	ミガキ－ミガキ（黒色）	5 7 4 2 3 1 1 10 3 1 24 6 4 1 2	42	96	6	37	255
			ミガキ（黒色）－ミガキ（黒色）	1 1 3 1 2 1 2 1 1 1	2	21		5	42
			－不明	3 1	3	2		1	10
			ロクロ－ミガキ（黒色）	9 5 3 1 2 7 16 1 6 15 37 17 3 5 8 7 1 2 1 1 2 4 3 2 21 3 1	49	94	7	24	357
			－ヘラナデ（黒色）	2					2
			－不明	1 2 1 5 7 1 2 2 1 3 2 2 5	5	13		4	56
			ナデ－ミガキ（黒色）	2 1	1	4			8
			－不明	1					1
			ケズリ－ミガキ（黒色）	9 1 4 1 2 2 1 1 2 1 2 10	26	60	5	13	140
			－不明	1 1	1		4	1	8
			不明－ミガキ（黒色）	1 9 15 1 3 12 16 6 1 4 5 3 7 2 3 6 2 14 1 37 6 1 5	92	208	13	72	545
			－ナデ		2				2
			－不明	4 1 3 4 3 2 6 7 2 22 18 8 1 1 6 2 1 5 1 4 1 2 1 8 5 1 1 8 3 1	46	80	10	52	320
		底部	手持ヘラケズリ	1 1 1 1 2 1 1 1 1 13 5 2	26	35	10	9	110
			回転ヘラケズリ	1 1 1	2	2		2	9
			ヘラミガキ	3 1 3 2 1 2 1 5 1	11	11		5	46
			回転糸切り	2 4 12 7 1 1 1 5 3 1 1 2 2 1 4 20 2 1 1	57	63	11	47	249
			ヘラ切り		1				1
			不明	1 1 1 1 4 8 11 3 1 2 1 1 3 1 1 2 1 2 1 3 1	31	29	7	22	139
	甕	口縁部	ヨコナデ－ヨコナデ	3 2 1 1 1 1 2 2 1 9 10 13 3 1 5 2 2 1 4 2 1 19 9 2 1 15 5 2 5 1	77	262	49	78	582
			－刷毛目			2			2
			－ヘラナデ					1	1
			－ミガキ（黒色）	1	1			2	4
			－不明	2 1 1 2 7 3 2 3	14	10	1	6	52
			ロクロ－刷毛目			1		1	2
			－ロクロ	3 4 1 5 7 9 4 3 1 2 1 1	12	20	6	14	93
			－不明	1					1
			不明－ヘラナデ	2					2
			－ナデ	1 1 1 1	4	5	1	2	16
			－不明	1 2 5 2 1 1 2 2 1 2 1	15	9	5	17	66
		体部	ケズリ－刷毛目	2 1 5 1 2 5 4 7 2 2 2 1 1 5 2 5 2 1 2 4 11 1 7 1 3 14 3 3 1 1	53	136	13	42	345
			－ヘラナデ	1 1 1 1 2 1 2 1 21 1 4 30 25 22 1 4 1 1 1 1 1 19 10 16 3 4 11 2 1 3 5 2 2 37 2 3 34 9 9 4 7 1	129	329	56	154	975
			－ミガキ（黒色）	1 1 1 1 2 1	4	20	3	6	40
			－ミガキ	1		2		3	6
			－ケズリ	1 1 2	7	16	4	3	34
			－ロクロ	3 1 1 1	3	4		3	16
			－不明	2 2 2 2 1 7 18 5 6 59 47 35 3 12 1 1 5 19 7 3 12 8 13 2 1 8 25 2 1 2 1 47 4 3 5 1 39 6 3 5 9 2	391	527	97	208	1,659
			刷毛目－刷毛目	4 1 1	6	6	1	7	26
			－ヘラナデ	1 1		1		1	4
			－ナデ			2			2
			－ミガキ（黒色）		1	2			3
			－不明	1 2 2 1	3	9		1	19
			ヘラナデ－ヘラナデ	1		1		1	3
			－ケズリ	1		1			2
			－不明		1			1	2
			ナデ－刷毛目			2		1	3
			－ヘラナデ	1	1	1		1	4
			－ナデ	1 1 2 1 1	2	5	1	2	16
			－ミガキ（黒色）					3	3
			－不明	1 1 1 1	9	1		2	16
			ミガキ－ヘラナデ	1	1				2
			－ナデ	1 1		1			3
			－ミガキ			1			1
			ロクロ－刷毛目	1					1
			－ヘラナデ	1				1	2
			－ナデ	1					1
			－ロクロ	2 2 1 26 14 16 1 1 6 1 2 3 1 1 1 3 1	15	14	2	9	122
			－不明	1 1 1 1 1 1 3 1	7		1	1	19
			不明－刷毛目	1 3 5 7 3 1 1 2 1	18	30	1	13	86
			－ヘラナデ	6 8 4 1 1 1 2 2	26	20	3	8	82
			－ナデ	1 4 2 1 1 1 1 1 3 1 4 1	18	41	4	13	97
			－ミガキ（黒色）	1 1 1 1	1	3			8
			－ミガキ	1 1	1			1	4
			－不明	12 3 3 3 1 1 4 2 6 36 10 138 80 6 3 2 3 1 1 32 13 1 1 22 4 25 5 6 10 4 6 11 1 1 128 1 7 46 7 68 20 8 15 8 3	774	1,016	151	328	3,037
		底部	木葉痕	2 1 2 1 2 3 2 1 1	15	24	5	15	74
			ヘラミガキ	4 1 1					6
			手持ケズリ	1 1 1 3 2 1 1 2 2 3 1 9 5 1	13	13	2	6	67
			刷毛目			1			1
			不明	1 3 3 1 5 12 3 2 4 1 1 1 3 1 1 5 2 1 1	37	51	21	30	190
	高坏	脚		1 1 1 2 1 1 2 9 1	15	29	7	25	95
	甑	底						1	1
須恵器	坏	口	ロクロ－ロクロ	4 4 5 1 1 1 1 2 1 4 9 2	27	34	2	8	106
		体部	手持ケズリ－ロクロ	1 1					2
			回転ケズリ－ロクロ		1	1			2
			ロクロ－ロクロ	3 2 3 1 1 4 1	15	17		10	57
			－不明	1	2	3		1	7
			不明－ロクロ		2				2
			－不明	1	2	1		1	5
		底部	回転糸切り	1 1 1 1 1 1 4	6	1		2	19
			静止糸切り			1			1
			回転ヘラケズリ	3 1 3 4	7	23	1	10	52
			手持ヘラケズリ		4	1		1	6
			不明	1 1 1	2	1			6
	甕	口縁部	ロクロ－ロクロ	1 1 1 3	8	2		5	21
		体部	平行タタキ目－アテ目（平行）	1 1 1 1 1 1	6	4	6	4	26
			－アテ目（格子）	1 2 8 1	2	2			16
			－アテ目（青海波）	1 1	5		1		8
			－オサエ		4	3	2	10	19
			－刷毛目	1					1
			－ナデ	1 1 1 1 1 1 2 4 3 1	12	15	4	19	66
			－ロクロ		2				2
			－不明	1 4 1 1	10	6		4	27
			格子タタキ目－アテ目（格子）	1		2			3
			－刷毛目			3			3
			－ナデ	1		7	1		9
			－アテ目（青海波）			1			1
			手持ケズリ－アテ目（平行）					1	1
			－オサエ			1			1
			－刷毛目	1 1 2	4	2	2	1	13
			－ナデ	1 1 1 10 1	19	7	2	2	44
			－ロクロ	3 1 4 1	5	8	3		25
			－不明			1		1	2
			回転ケズリ－ナデ						1
			－ロクロ		2			4	6
			－不明			1			1
			刷毛目－刷毛目		1				1
			ナデ－オサエ			1			1
			－刷毛目			1			1
			－ロクロ	1 2		1			4
			－不明	1		1		1	3
			ロクロ－ナデ	1	5	1		2	9
			－ロクロ	1 5 1 2 7 1	26	26	6	22	97
			－不明	3 1 1 1 1 1 1 1	1	6		2	19
			不明－ナデ	1 1 1 1	7	4	1	1	17
			－ロクロ	1 1	2	1		6	11
			－不明	1 1	3	1		2	8
		底部	手持ヘラケズリ	1 1	5	1	1	1	9
			ヘラミガキ	1	1				2
			不明	1	1	1		3	6
	壺	口			1			1	2
		頸			2		2	2	6
		体		1 1	3	6			11
		底			1			1	2
	蓋	口		1 1				3	5
		天		1		1			2
赤焼土器	坏	口		1 1 2 5 2 2 1 1 2 3 1 2 1 2 3 2 8 1 1 1 1 1 1 2 25 1 7	28	55	4	35	202
		体		1 2 6 1 1 3 4 1 3 5 7 2 1 2 17 2 18 1 2	27	24	6	30	166
		底		1 2 1 3 2 1 1 1 7 1	16	20	3	12	71
	高坏			5 8	2	1			16
	甕	底		1					1
手捏ね土器				1		1			2
計				19 2 15 1 25 12 24 11 29 10 19 25 59 208 20 51 305 466 297 13 53 7 6 1 7 6 1 31 156 71 5 32 70 19 5 130 2 7 25 15 53 66 8 3 23 3 1 59 15 4 331 14 14 75 1 5 23 2 503 96 62 45 33 11	2,426	3,823	594	1,584	12,138

宮城県教育庁文化財保護課職員（昭和54年度）

課長		氏家　和典	調査第１係係長	高橋　多吉	調査第２係係長	佐々木茂楨
課長補佐		佐藤　　茂	技術主査	新庄屋元晴	技術主査	平沢英二郎
〃	兼管理第２係長	扇　　正人	技　　師	小井川和夫	技　　師	佐々木安彦
管理第１係	係　　長	伊藤　篤男	〃	丹羽　　茂	〃	加藤　道男
	主　　事	佐藤　信子	〃	斎藤　吉弘	〃	遊佐　五郎
	〃	三浦　正義	〃	土岐山　武	〃	森　　貢喜
管理第２係	主　　査	中田　悌子	〃	千葉　宗久	〃	太田　昭夫
	主　　事	佐藤　隆志	〃	真山　　悟	〃	阿部　　恵
			〃	阿部　博志	〃	手塚　　均
			〃	小野寺祥一郎		
			〃	小川　淳一		
			〃	黒川　利司		
			〃	渋谷　正三		
			嘱　　託	熊谷　幹男		

五輪Ｃ発掘調査年次（昭和53年度）旧職員

管理第１係　　長	加　藤　忠　雄
管理第２主　　査	渡　辺　正　憲
調査第１係技術主査	早　坂　春　一
〃　技　　師	高　橋　守　克